
三次元で遊ぼう

しらたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三次元で遊ぼう

【Nコード】

N9557U

【作者名】

しらたま

【あらすじ】

普通じゃないけど普通の生活を送っていた 上野 撫新香 は、ある日電車にいた乗客たちとともに白い空間に飛ばされ、その後RPG風異世界へと飛ばされた。なんでも『魔王』を倒せということらしい。「そんなこと知らないよ。私は私で楽しませてもらうからね」主人公最強モノです。最強？ありえねえという方はブラウザの戻るボタンをクリックしてください。

注：作者の未熟さゆえ、文体？が時折変化します。 注：主人公は基本常に余裕を持っているので、緊張感に欠けます。

設定 8月7日微々更新(前書き)

設定なのでややこしいこんにちはは無しな方向で。

自分でも分からなくなってきたので少しまとめてみました。

設定 8月7日微々更新

登場人物紹介

上野 撫新香 ナデシコ
苗字はカットされたのであまり意味なし。

(こんばんは‘死神’殺し時点ステータス)

名前 ナデシコ

種族 人間

レベル 62

筋力 48

耐久力 29

魔力 42

抗魔力 28

感覚 39

スキル “解析 L V・3”、“天才”、“死神 L V・3”

冒険者ランク C

《プロフィール》つぼくなくなってしまった

この話の主人公です。最初はこの人しかいなくて、設定とか話とか実は後付け。ちなみにコンセプトは最強。欠点は緊迫感に欠ける。生物学上は。けれどあまり女らしくない。

ぶつちやけ元から強いのでレベルにはあまり意味が無し。本人はゲーム感覚で楽しんでレベル上げにいそしんでいる。一応レベルが高くなるにつれて強くしていこうと考えている。

戦闘スタイルは格闘が主体で、最初の村で只者じゃないお婆さんに

『ホーリイター大喰らい』をもらってから戦力が更に強化された。
実質死なないけれど、そもそも死ぬような状況にならないので、そのことをいつも忘れてしまう。
容姿、長い黒髪の綺麗な子。いつも楽しそうにニコニコ笑っている。
この世界に来た当初はかなりテンションが上がっていて言動もかなり怪しかった。

ピヨ介

(十一話時点ステータス)

名前 ピヨ介

種族 ヒヨコ?

レベル 10

筋力 4

耐久力 4

魔力 9

抗魔力 6

感覚 7

スキル なし

《プロフィール》

ナデシコの旅の連れその一。

岩の中にあつた金の卵から生まれたヒヨコ(?)。火を噴く凄い奴。
ピヨピヨとしか言わないがナデシコにはテレパシーで自分の意思を伝えることができる。ナデシコのこと大好きで、ナデシコにとっても大切な存在。

フアナ

(こんにちは魔力もろもろ時点ステータス)

名前 フアナ

種族 人間

レベル 32

筋力 18

耐久力 21

魔力 22

抗魔力 23

感覚 26

スキル “天才”、“祝福”、“奇運 正”、“×× Lv.2”

冒険者ランク F

《プロフィール》

ナデシコの旅の連れその二。十四歳。

盗賊に唯一の家族を殺されて、ナデシコに助けられた後ついて行く事にした。

システム
世界にもものすごく優遇されてる子。実は“奇運 正”のお陰で運よくナデシコ出会えた。でも“奇運 正”じゃなくて“幸運”だったらそもそも盗賊に遭遇しなかったと思われる。

父親に教わった剣を少し使えるが、まだまだ実戦経験などに欠ける。容姿、短い金髪の綺麗な子。瞳は青色。

将来的にはかなりの強キャラになる予定。

特技は魔力放出デス。別にどこぞの騎士王さんばくったつもりはないです。いつの間にかこうなっていました。

アリエラ

ナデシコが最初に立ち寄った村のギルドの受付嬢。二十三歳、獣人間延びした口調が特徴だが、うるたえたり緊張していたりと普通の口調になる。みなダンジョンの方角に行くのであまり誰も来ず、暇を持て余している。

ナデシコにソレスティへの道を教えた時、すっかり狼の縄張りのことを言い忘れてしまう。

この先の出演予定は…微妙。いつかは出せるかな。

ボックス

ナデシコが最初に立ち寄った村で出会ったBランク冒険者。十九歳人間。

実はナデシコがいた世界と同じ世界から来た転生者。ナデシコにも打ち明けた。

かなりの実力者で、ホーンベア程度なら楽々倒してしまう。レベルは88とのこと。

相変わらずナデシコのことが気になっている。好意は…持ってるのかな。

レーリ

名前 レーリ

種族 ?

レベル ?

筋力？
耐久力？
魔力？
抗魔力？
感覚？
スキル？

ナデシコが最初に立ち寄った村で出会った服飾屋のお婆さん。一応人間。ナデシコ同様な色々只者じゃない人。

名前は教えていたためオーブンされているが、その他はレベル差の所為で種族すら？になっている。

素手で戦うナデシコに何かを感じて『大喰らい』（ホールイーター）を渡した。

水晶で分かるレベル区分。後書きにも書きましたが、ついでに掲載。

黒F	1	20	紫E	21	35	青D	36	50	藤C	51
60	白B	61	70	灰A	71	90	銀S	91	120	金
SS	1	2	1							

D〜C辺りになると普通の人とは一線を画す身体能力を得る。
SS以上はまさに超人。

プラス冒険者ランクの目安。

Fで駆け出し、Eで半人前、D〜Cでようやく一人前、B〜Aで一流、S〜SSで一握り。

設定 8月7日微々更新（後書き）

随時更新かもです。

こんには私（前書き）

作者は現実逃避している。

衝動のまま書きました。

どこに進んでいくのが良く分かりません。

今回はどきどきしながら投稿してみました。

くんには私

私は上野撫新香。普通じゃないけどとりあえず普通の女子高生をやっている。

はてさて、私自身のことについて気づいたのは最近のことだ。いや？ むしろ思い出した、と言ったほうがいいかな。

二週間ぐらい前だよ。学校からの帰り道、人気の無い道を歩いてい たときのことだ。私は帰宅部だったのでまだ日の高いうちだった。特になんの変哲もない住宅街、いつも通っている、通いなれた通学 路だ。だからか油断していた。まあ、そもそも日常生活で警戒する ことなんざそうそうないんだけどね。ともかくだ。私は曲がり角か ら突然出てきた黒ずくめの男？の一撃を避けられなかった。

「@+ ~¥\$きこけかきけこけけっけけけけけけけけけけ！！！」

いやもう意味が分からなかったね。まだ私の身体目的だったら隙を 見てどうこう〜とかで命は助かったかもしれないんだけど、ど うしようもなかった。あの野郎、刺すだけじゃなくて強引に刃物を 横にしてそのまま私の横腹を丸ごと切り裂きやがったのさ。いてー ー！とかそんなレベルじゃない。脇腹から熱い液体がどんどん吹 き出てきて、反対に身体がどんどん冷えてゆく。私はそれらを止 められない。止められるはずもなかった。

で、キチ イがどうしたかといえば『ぶーーーん』とか言っただ ど っかに走り去って行った。ちくしょう絶対ゆるさねえてゆーかきゅ うきゅうしゃよんであれキ ギイにいつてもアレかなあとか、色々

考えながら私は前のめりに倒れていった。ばしやり、と自分の中からでていった液体、ていうかもう血溜りの中に倒れて死を待つばかりだったよ。

いや死んだよ。目の前が真っ暗になった！てね。走馬灯は見えなかったよ？ だって私は生きてたから。

え？ どういうことかって？ うーん。そう、死んだと思ったらね、生きている私が死体の私を見下ろしていたんだよ。いやあ、幽体離脱？とか思っただけどころか生きている私だったね。地面にしっかりと両足を下ろしているし、透けてもいないし、心臓の鼓動も聞こえる。

私も、どういうこと？と思いながら死体の私に触ったんだ。そして、途端にさあぁと青白っぽい粒子になって死体が消えていった。そこで、はたと思いついて私は筆箱からカッターナイフを取り出して首を掻っ切った。：頭はおかしくなって無いよ。確かにまあ正気の沙汰じゃないかもしれないけど。その時点で私は半ばほど気づいてたんだ。

二度死んで、ようやく思い出したんだ。ああ。そういえば、私は死んでも『私』が消滅するわけじゃなかったな、『私』はそういう存在だったな、ってね。

その後？ 普通に日常に戻ったよ。この世界もそこそこ楽しいしね。時折、刺激を求めたくもなるけど、わざわざ自分で動くほど退屈もしていないし。

一度あの チガイに復讐しに行ってやるうかと思っただけど、めんど

くさくなって止めた。捜し出して、『私を殺した責任、とってもら
うからね』とか言ってみても相手は所詮キチガ だしねえ。

時間の無駄ってもんだ。

あー。私って自分のこととなると、楽しそうなことじゃないとこ
とん動かないんだなあ。うん、勉強になった。

ん、ところでこの話し、実はプロローグってほどでもないんだよね。
ただ私がいわゆる普通じゃないってことを知って欲しかっただけ。
まあ後々のファンタジーを楽しんでくれたらそれでいいよ。私もそ
うするつもりだから。

こんには私（後書き）

この小説の主人公、上野撫新香さんは女らしくありません。
というか女性の身体なので女性寄りになってはいますが、本質的に
は女でも男でもありません。

こんには超展開(前書き)

投稿するのはなんだか難しいですね…

前は間違えて短編で投稿してしまい、削除するはめになりました。

…これってマナー違反なんでしょうか。

いんにちは超展開

運がよかったのか、日ごろの行いがよかったのか…とにかく面白そうなのが向こうから転がってきた。果報は寝て待てとはこのことだ。

うん。その日は中心街の方に行こうと思って、電車に乗ったんだ。時間が時間だったからね、乗客も多くてちょっと苦しかった。

誰かさんの手が私の臀部にのびてきたのを丁重に丹念におもてなしして遊んでたら、電車のほうに強引にトラックが突っ込んできたんだ。

いやあ、びっくりした。

あ、トラックの方にじゃないよ？ 多分、知覚できたのは私だけだと思っただけど、トラックが電車と衝突する瞬間世界が止まったんだ。比喻じゃないよ、文字通り、世界の時間が停止したんだ。

それと同時に転移陣ぽいのが出てきてね。対象は電車に乗ってる人みたいだったから、便乗してみたんだ。そりゃ抵抗もできるけど…だって楽しそうじゃないか。科学技術が蔓延るこの世界で“転移陣”が出現するなんて。

とにかく、私はワクワクしながら転移先につくのを待ってたんだ。

ついた先は真っ白い空間だった。

周りにはたくさん人がいた。同じ電車に乗ってた人たちだっただけのこと。はすぐに分かった。

時間の停止はすでに終わってるから、みんな動いてただけで、誰も彼もぼかんとしたね。まあ当然か。バスが迫ってきたと思っただら違つところにいるのだから。あるいは、死後の世界とか思っている人もいるかもしれない。

「ん…？」

さてどうなるのかなと待っていたら、早速事態が動いた。私達の前に数人の人影が出現したんだ。それはもう沸いて出てくるかのごとくぼわつとね。

人間じゃないってことはすぐに分かった。だって白い翼が生えてるから！あとそれっぽい空気がぴりぴりと。結局男女合わせて全部で13人出て来て、それから先頭にいる特徴に欠ける中間管理職的な天使（仮）さんが手を広げてこのたまったんだ。

「これから皆さんに 『魔王』 を倒してもらいます」

バカジャーネーノ

ほらみんなも更にぼかんとしちゃったよ。

数秒の空白の後、みんなようやく騒ぎ出したね。むしろ遅すぎたぐらいだ。

「意味分かんねえ！さっさと元の場所へ戻せよ！」 「そうよそうよ！なんで私達がそんなことしなきゃいけないのよ！」 「そうだそうだー！」 「結婚してくれー！」

予想通りの反応。なんか最後がおかしかったけど。というか、此処に来る直前の状況を忘れてるんじゃないだろうかこの人たち。

それにしても面白いね、全員が全員同じ意見ってわけじゃないみた

い。特に若い年代層は“何か”を期待しているみたいだ… んー？
それだと私も同類ってことになるのかな？ …ふふふー。

「それはできません、…いえ、しても構いせんが、戻した瞬間に死
が待っていますよ？」

天使（仮）はゆるゆると首を振って、拒否あるいは残酷な事実を吐
いた。

ああ。向こうの時間は止めたままなのか。なんだ、遠まわしの脅し
じゃんよ。

「皆さん、覚えていますか…？ あなたたちは先ほどまで電車に乗
っていた…そして…それからなにが、起きましたか…？」

天使（仮）は、ゆっくりゆっくりと、染み込ませるように言葉をつ
むいで行く。正直悪意を感じないでもない。天使（仮）中間管理職
バージョンの後ろにいる天使（仮）他たちも最初から無表情で立っ
ているが、嘲笑っているような気がする。なんだか面白く無いなあ。
踊るのは面白けれど、踊らされるのは御免こうむりたい。…ま、し
ばらくは踊らされることにして静観するとしようかな。私とて何で
も出来るというわけではないし。

周りの人達は自分達の現状？窮状？を思い出したらしい、顔色がみ
るみる変わってゆく。

天使（仮）はそれを見て満面の笑みを浮かべた。やっぱり性質悪い
なあ。

「ご理解いただけたようで、何よりです。ええ、今、あなた達は戻
れば死にます。死ぬことがおよそ決定しているのです。おつとご安
心ください、そこでチャンスを差し上げます。わざわざ死ぬ直前に

時間を止めてここにお呼びしたのも、それを説明するためなのですよ」

シン…と周囲が静まり返った。緊張感が少し漂いはじめ、みな一言も聞き漏らさないようにしているようだ。ようは自分達の命がかかっているのだ、ご静聴ぐらいするだろう。そんな中、死なない私は一人だけ余裕を持っている。なんだか私も性質が悪い気がするなあ。まあいいか、どうせ自分のことだし。

「これから皆さんを、所謂異世界に送ります。その世界で、何年かかっても構いません、誰か一人でも『魔王』を倒せば、異世界にいる全員を元の世界に戻し、生きることができるように取り計らいます。ちなみに、何年かかろうと元の世界の時は動いていませんので、元の時間に戻ることができますよ。」

今度はサワサワと、静かにざわめきが広がった。大事に至ることがなくとりあえず一安心したみたいだけど、まだ本題が残っている。

「…でもよ。『魔王』ってのがどんなのは知らねえけど、そんなに俺達が勝てんのか？」

「確かに。私はただのサラリーマンでスーパーマンではないのだが」「私だつてただのOLよ！」

つまるところ。この場にいるのは平和な日本で生きてきた一般人なのだ。喧嘩すら碌にしたことがないのが大半だろう。私みたいなのが他にいるとも思えないし、そんな普通の人たちが仮にも『魔王』と呼称されるものに勝てるとは思えない。

「それも問題ありません！確かに今の皆さんはただの人間です。ですが異世界に行けば世界のアシストシステムを受けられます。まあぶっちゃ

けて言えばレベル、スキルなどですね。…ああ、そういえば皆さんの世界にはてれびげーむというものがありませんね、それ風に言えば皆さんが行く異世界はRPGにカテゴライズされます。

蛇足ですが、現在のその世界の人間での最高レベルはなんと178です。オーガも素手で軽く倒せるレベルですね」

横文字を連発しているのに“てれびげーむ”だけたどたどしいところがあるんだか胡散臭い。

しかし発言のたびに突っ込んでしまう私はいったい何様だろう。まあいつか、実害はないし。

ところで皆さんどうやら戸惑いながらも高揚しているようです。あれかな、闘争本能というやつかな。特に男は、人生で一度は“最強”“無敵”を夢見るものだしね。…いいのかなー。みんな一応死にかけ崖つぶちなんだよー。

「では、落ち着いてきたところで詳しい説明をいたしましょう。

元の世界に戻るためにはまず何年かかっても、誰でもいいので『魔王』を倒すことです。これはもうさつき言いましたね。

ここからがある意味重要なものとなります。『魔王』が倒されることで皆さんは無条件で元の世界に帰ることが出来ますが、異世界でのステータスは引き継がれません。ただし、『魔王』を倒した方、あるいはパーティは特典として異世界での成果を持ったまま元の世界に帰ることが出来ます。無論、手にいれた道具の類も数などに制限はありますが持ち帰ることができます。…若返りの薬、限定的に時を止める砂時計、なんでも癒す神薬、所有者の姿を隠す魔剣、願い通りの容姿になる魔法薬：様々な魅力的な道具をお持ち帰りできるわけですね。あ、因みにパーティとは言いましたが、特典を受け取れるのは三人までとします」

…ああ。やっぱり性質が悪い。みんな、目の色を変えてしまったよ。

これで大半の人が『魔王』を倒すことを目指すようになるのだろう。天使（仮）の思惑通りに。

「まず、ここにいる皆さんにスキルをプレゼントいたします。スキル“解析”とスキル“優秀”です。“解析”は大抵の人が持っている、言うならばステータスを見るためのスキルでしょうか。向こうに着きましたらご確認ください。“優秀”は非常にレアなスキルで、経験値の取得効率が普通の人より高くなるというものです。ようはレベルが上がりやすいということですね。今回はこれらのスキルを特別に！差し上げます。

おっと、それでも元から異世界にいる人と比べると初期レベルが低いのではないだろうか…と、不安になっていられる方もいらっしゃるかもしれません。しかしご安心ください。個人差はありますが、既に皆さんはある程度のレベルを持っていらつしやいます。なんと…お！皆さんの中での最高レベルは72ですね！これは優秀です！これに更にスキル“優秀”が加わるわけですから…どれほどになるか今から楽しみですよ」

ざわざわざわと、最初にあつた焦燥感はどこへやら、皆自分こそが最強だと信じて疑わない。…天使（仮）に話術以外に何かの思考誘導でも受けてるんじゃないかな。…いやまあ私もわりとワクテカしてるけどね？ だつてリアルRPGだよリアルRPG。MMORPGとかメじゃないよ。

「さて…説明はこれくらいにして、皆さんを送ることにしましょう。因みに転送はばらばらのランダム転送になります。冒険の最初の目的は仲間捜しになるかもしれませんが…ああ、向こうに着きましたら『冒険者』になることをおススメします。てつとり早く身分が手に入りますし、金稼ぎには持ってこいで、その上高ランクになればそれ相応の権利が得られます。また仲間捜しも少しは楽になるで

しょう。

…最後になりましたが、これから皆さんが行くところは、ファンタジー世界で、ある意味現実世界です。しかし、皆さんには理解できないような法則も多々あることでしょう。そんな目に見えないルールや裏技がたくさんありますので、ご自分で暴いていってみてください。さい。

それでは。ファンタジー世界をお楽しみください

「

天使（仮）の最後の言葉と同時に、この場にいる人の人数分の転移陣が出現し、そして発動した。

ん？ そういえば結局中間管理職風天使（仮）しかしゃべってなかったな

「ほっ。と」

白い空間から転移した先はどこかの森。空中に出てしまったので少し前のめりになるが、すぐに姿勢を立て直す。向こうの世界ではもうあまり見かけない立派な森だ。更に キョロリと少し見回しただけでも少なくとも二十種類はある。何がって…？ キノコだよ、それも色鮮やかな色々なキノコ。なんだろなあ、この異常生態は。こつこつと見ると、ファンタジー世界に来たのだと実感できる。

「あ。スキルもらったんだっけ。早速見てみようか…“解析”」

私は少し期待しながら自分を対象にスキル“解析”を使った。いや、どう使うかは分からなかったので頭でイメージしながら唱えてみる。すると目の前に何かの表示が現れた。どうやら成功したらしい。

「やたー。えーと、どれどれ…」

名前 ナデシコ

種族 人間

レベル 1

筋力 0

耐久力 1

魔力 0

抗魔力 1

感覚 1

スキル “解析”、“優秀”

「…ん？」

レベル 1

「んー？」

レベル 1

「んー………」

レベル 1

「…」

レベ

「ちよ待てや」

「このやり場の無い怒り、どうしてくれよう。」

「いやー、お疲れ様」

「あ、あはは。どうでした？ 初めてなのでかなり緊張してしまいました…」

「なかなか良かったですよ！ でも時々つかえてたよね？」

「か、勘弁してください…正直言うことを言い忘れないように必死だったんですから…」

「ははは。…それはそうと、今回はどうかね？ 確か、新しいテストケースなんだろう？」

「ええ、世界も新しいものを使っていますし、後々『勇者』を送る事になっています」

「そういえば変なのがいたなあ。レベル1の人間」

「ああ、あの長い黒い髪の人間か。容姿はAランクは軽くいく…しかし素質はF、笑えるな」

「また始まったよ、こいつの格付け」

「見込みのない人間なんてどうでもいいですよ。それよりこの初期レベル72の人間！こいつを見てどう思う…？」

「すごく…期待できます…」

「そういえば、『勇者』はその人間よりも上の素質のモノを選抜するんですよね？」

「うむ…しかし候補をわりといての、どの人間にするかまだ決まっておらん」

「いつそのこと、全員にしてみたらどうですか？ どうせ今回はテストなんですから、いいデータが取れるかもしれませんよ」

「いいですね、上に打診してみましようよ。しかし、テストといっても結局大方はいつものようにやるんですよね？」

「ああ。とりあえず戻るとしよう。とにかく、それからだ」

「そうですね」

こんには超展開(後書き)

主人公の設定は秘密にしようかと思ってます。

片鱗は出てきますので、色々と想像してくれたら、とも思いますが。

「んたぢはてヨロ」(前書き)

さらに衝動に身を任せてみた。短いでしょうか。

どうなんでしょう……てかさろそろ現実を見ないと。

「んんんんんんんんんん」

ふんだ。いいもんねー。レベルとか低くても私自身強いから別にいいし！…べ、別に悔しいなんてそんなこと思ってたないんだからね！
はあ…まあレベルぐらい適当に上げればいいか…いや…むしろレベル上げを余計に楽しめる分むしろ得、じゃないだろうか？ いやその通りだ！ふふふ見ているがいい…まずは100越えを目指そうじゃないか。

「とりあえず…まずは力を調整しとかなないといけないかな」

向こうの世界では特に必要なかったし怪しまれても面倒なので一般人レベルまで能力を落としていたが、この世界ならそこまで自重しなくてもいいだろう。

「えーと…」

私は力をぶつける対象を捜しながら、肉体のスペックを適当なところまで押し上げた。

そもそもこの身体は所詮『私』の“端末”、というか一部ですらない、いうならば“影”だろうか。だからこそ、この私が死んだところで『私』は死なないのだ。この身体は人間の限界 だとかそういう制限を無視して強化することができる。限界まで強化したらどうなるだろう…と思わないでもないが、何かやばそうなのでそれは自重しておくことにする。

「よさそうなの、見つけ」

木々の間から見えたのは、私の背より大きい岩。なんでこんなとこ

るにあるのか少々疑問だったけど、都合はいいので使わせてもらおうと思う。表面に薄く緑色の植物が色々つついている様は、年代を感じさせる。さぞや長い間ここに居座っていたのだろう…
だがしかあし！ 貴様の岩生もここまでよ！ 私に目をつけられたのが運のツキ！ これからは石として生きるがよい…
とか何とか無責任なことを考えながら、私を岩の前で腰を少し落とし右拳を振りかぶった。

「…ちええい！」

きつと、この生の中で一番気の抜けた掛け声だったと、反省している。次からはもつと気合を込めるので勘弁して黒歴史にしないで。しかし、それに反して私の拳を受けた岩は、どかぁん！と凄い音をたてて簡単に砕けてしまった。

「…おお。本当に岩は石になってしまわれた…いや、私の所為だけど」

ちよつと驚く私。りんごを掴んで、ぐしゃあ、とか出来るな！とか強化した当初は考えてたけど、まさかこれほどとは思わなかった。きつと今ならりんごもみかん以下だろう。

なんとなく物悲しくなって、私は砕け散った岩改め石たちを集めて一箇所に固めた。石とは言ってもそこそこ大きい塊もあったが、元あった岩の大きさと比べると、残念…としか言えない大きさだった。いや私の所為だけど。

「ん？ 何これ」

石たちを拝んでいると、ふと石の合間になにか光るものを見つけた。石の山に手をつき込んで取り出してみると、それは直径8センチ程

度の金色に輝く珠だった。

これは…間違いない、あれだ。

「ナデシコは　のたまをてにいれた。」

やっぱり高値で売れるのかな。つんつん」

がつつり左の手のひらで　のたまをつかみ、私は右手の人差し指で珠の表面を突つついた。皮膚に伝わるのは硬質な感触。こつこつ、と鈍い音がする。

「うーん。何で出来てるんだろ。うん、私は金で出来ている、などと安易な解答はしたくない」

コツコツ

「うーん……あれ。私今突いてなかったんだけど」

ピシッ

突然、今までおとなしく　のたまをしていた　のたまに亀裂が走った。見るからに修復不可能な傷…間違はなく価値はただ下がりだろつ。

「ほあああ！　またか！　また私の所為なのか！　なんてこった！　私が強く握っていた所為か、私が強く突いてしまった所為なのか！？　くう…やはり力を強くしすぎたのか…うう。しかし　たまが割れるなんてあまりいいものじゃない……て、何コレ」

見ると、　のたまの内側から何かの先端が飛び出し、　のたまを内側から破壊しはじめたのだ。これには私もビックリしました。

先端といつても、微妙に丸まっていてかろうじて分かるぐらいだ。それは、パリパリと穴を広げてゆく。ぱらぱらと のたまの破片が手のひらをこぼれていくが、私はそれを捨てる気にはなれなかった。いや…私の注意は完全に のたまの中身に向けられていて、他のことを考える余裕はなかった。

ピヨ

果たして。 のたまを破って出てきたのは黄色い小さなヒヨコだった。

「なんてことか… のたまじゃなくて金の卵だったなんて…」

ヒヨコの身体の下半身はまだ金の卵の中にあって、頭には割れた卵の殻をかぶっている。そしてその状態で小さく首をかしげるのだ。その姿はまさに

「可愛い……」

そう形容せざるを得ない。

ピヨ ピヨピヨ ピヨー

「え、ママ？ 刷り込みというやつかな……ん、私についていくと？ 君は生まれたばかりなのに口数が多い上に聡明だね」

私はヒヨコをそのまま持ったまま、一際大きかった石の上に腰を下ろした。

あ、私の名前はナデシコね。さあさあナデちゃんでもナデコたんでも慣れ慣れしく私を呼ぶといい。さあさあさあ」

ピヨー ピヨピヨー

遠慮しとく？ そう…まあ好きに呼んでくれていいんだけどね。

ところで、私が何故ピヨ介の言っていることが分かるのか…不思議に思っているだろうか？

「そういえば、ピヨたんは金の卵から産まれたわけだけど、最終的には金の卵をうむ鶏になるのかな？…わからない、か。え、そもそも だから卵は産めない？ あはは、これは一本とられちゃったか」

秘密にしたいから大きい声では言えないけど…実はピヨ介はテレパシーを送ってきているのだ。私はそれを受け取ってピヨ介の言いたいことを理解しているというわけだ。

ほら、今も。

ピヨ ピヨ ピヨ

>ピヨ ピヨ ピヨ< テレパシー

ふふふ。そうかそうか、お腹が空いたのか。仕方ないなあピヨ介は。

「そういえば、ピヨ介。君は何を食べるのかな。ミミズかな？ トウモロコシかな？ 豆かな？ ブドウかな？ それとも」

私はおもむろに頭の上にあったピヨ介を取って胸に抱え、座っていた石から飛びのいた！

ぐるあああああああつ！！

どぐしゃあつと、一瞬前まで私の座っていた場所がぺしゃんこにされる。そこにいたのは2メートルをゆうに越える、頭に一本の角を持った熊だった。

そして私はそれを見て　口角がつり上がるのを止められなかった。きつと私はすごい笑みを浮かべていることだろう。

「熊かなあああああああつ！！？」

みんなちはピヨロ（後書き）

こういうトリップ主人公は人外パートナーがつきものかと思わないでもないです。ドラゴンとか狼とかすごいのもいるみたいだけど、自分はピヨロにしてみました。だって可愛いでしょっぴヨロ。

あと、これぐらいの文量が主流になるかもです。

…なったらいいなあ。

「みんなちはクマさん（前書き）」

作者未だ現実逃避中……

今回は戦闘シーンです。めっさむずいっすー！
ああ！へたくそって言わないでください！

「んにちはクマさん

ピヨー！ ピヨピヨー！

いつの間にか腕から抜け出し、ちゃっかり私の頭頂に再度陣取ったピヨ介がけたたましく鳴いた。私はといえば、熊、じゃなくて食料から目を離さず前傾姿勢をとっていた。奇しくも、不意打ちを逃れた私を警戒しているらしい熊と同様の体勢だ。ピン と張り詰めた空気の中、ピヨ介の鳴き声だけがピヨピヨと響く。

「馬鹿言っちゃいけないよピヨ介。君のご飯を目の前にして、逃げられようか…いや逃げない」

ピヨ介と話しながらも、熊からは目を逸らさない。一瞬の油断が、捕食者と被食者を逆転させる。…まあ私は殺されようが食べられなわけだね！そこはご愛嬌、あまり言うのは野暮ってもんだ。雰囲気は大事だし、いや、そもそも今は頭の上にピヨ介がいる。ピヨ介は私とは違って、一つしかない命だ。大事な旅の道連れを死なせるわけにはいかない。

このまま膠着状態が続くのは面倒くさい。それに、体力が削られるのは向こうの方なのでこっちの得ではあるのだが、私としては折角なので万全の状態でお相手願いたい。

静寂の中、先に仕掛けたのは もちろん私！

どんっ

地を蹴り一気に熊へと走る。ぱつと見馬鹿の猪突猛進だが、しかし

今の私にはそれを覆す動体視力と反射神経、瞬発力がある。
突進する私に対し、角熊は迎撃の姿勢。体勢の型、左腕の動きから見て、おそらく右腕による薙ぎ払い。

そして、私と角熊が接触する！

がああああああつっ！

予想通りっ！

私はそのとき左足を踏み出そうとしていた。私は、強引に前に傾いていた身体を立て直し、左足を踏みしめ、右足の方の力を強くしながら両足で跳躍した。

無理矢理な体勢からの跳躍。しかし人並み以上の身体能力になっている私の身体は軽々と１メートル半ほどの宙を舞った。

角熊の豪腕は、一瞬前まで私の居た場所を轟と空気を切り裂きながら通り過ぎる。

その一撃で決めるつもりだったのか、角熊の体勢が攻撃とともに崩れた。

チャンス！

右足を意識した跳躍は、心持私の身体を左方向へと運んでいた。

私はぐるりと、空中で時計回りに身体を回転させ、その勢いを以って角熊の右側頭部へと右足の後ろ回し蹴りを叩き込む。

ごん

かなり、鈍い音とともに、体勢が前へと崩れていた角熊は、私の蹴りで今度は右へと傾いた。とはいってもそれも微々たるもの。

私とは言えば、角熊を蹴った反動で角熊から少し離れた場所へと着地した。私は体勢を立て直す角熊を見て、少し手加減しすぎたかと

悔やんだ。

あわよくば。頭を叩き割るつもりだったが、そううまくはいかないらしい。それに手加減したことを除いても、角熊の頭蓋骨は角がある所為かかなり強固らしい。

踵落としをしたかったが、止めたのもあの角の所為だ。わざわざ傷を作る戦い方をするつもりは私にはない。

蹴った右足は大丈夫か、だって？ 大丈夫だ問題ない。私の身体はこれぐらいでは傷つかない。…でもあの角には刺さりそうだったんだよ！ぐさつと。ぐさつと！

ところでピヨ介だけど、相変わらず私の頭の上にいる。かなり激しく動いたつもりだったが、ピヨ介はがっしりと私の頭をつかみGに抵抗しているらしい。ちなみに強くつかまれているのに痛くない。どうやってるんだらう。

ぐるあああああああつ！

先ほどの意趣返しか、今度は角熊が突っ込んできた。怒っているのか、かなりのスピードで、だ。

ウェイトの差から、私は迎撃するのには向いていない。が、あの勢いで突進ならば、次の行動に移るには相当なブランクがあるだろう。

よって、私は角熊の真上を跳んで回避することにした。

両膝を折り先ほどよりも高く跳び上がり、角熊の上を通過する。

が、私は跳んだことの失策を悟った。

どんつと、角熊が私の後ろにあつたらしい大木に激突し、しかし奴は大木に当たった衝撃を利用して方向転換し、まだ空中にいる私をしとめに来たのだ。

そもそも私は忘れていた。実は元々岩のあつた場所は、少々開けて

はいたが、その所為で私はここが森だということを失念していたのだ。この場はむしろ野生の角熊のフィールド。どうやら私は、最初から少々不利だったらしい。

空中にある私の身体はむろん自由に動かせない。さてどうしようかと、いつそのことやってしまおうかと高速で思案していると、突然私の視界が朱色に染まった。それも血でも出たのかと一瞬思ったが、なんと、私の頭から炎が出たらしい。

それも角熊に向かって。

ピヨピヨ ピヨっふ

「君はさながらビツクリ箱だよ、ピヨたん。ただのヒヨコではないとは思っていたけど」

原因はピヨ介。というかピヨ介が火を噴いた。

しかも私に熱を感じさせない炎だ。角熊にはしっかり効いているのか、火に対する恐怖のためか急制動をかけたようだが間に合わず、炎に巻かれごろごろと転げ回っている。

「できれば前もって言って欲しかったんだけど…え、自分も無我夢中でやったからはじめて知った？ それなら仕方ないか…」

ピヨ介もピヨ介自身のこととはあまり知らないらしい。まあ、それが普通だよ。生まれたばかりの雛なのだし。

しかしこの小さな身体であれだけの火を噴くとは。それも一番近くにいた私になんの害もなかったことから、もしかすると任意の対象以外燃やさない炎なのかもしれない。なんて便利な炎だろう…雛からこれとは…君の将来を期待するとともに心配してしまうよ、ピヨ

介也。

ぐるああああああああああああああ！！

つぐまは とても おこっている！

どうやら火をもみ消したらしい角熊が、（多分）怒声をあげた。その巨体からはぶすぶすと煙が燻っていて、ところどころ毛が禿げている気がする。

そんな怒り心頭の角熊を見て、私はもう我慢できなかった。生焼けの肉を見て！それを見て私が我慢できようか？ いや出来ない！頭の上にいるピヨ介を、私は今度は服の中に押し込んだ。そしておとなしくしているように言い聞かせる。ピヨ介は、ピヨピヨ>ピヨピヨく、と返事をしたのでとりあえずは大丈夫だと思う。そして私は角熊へと向き直り、右手へと力を込めた。

「さあ…決着をつけよう」

言葉が通じるはずも無いが、しかし私はあえて角熊に言葉を投げかけた。

生死を賭けた、この戦い、確かに通じ合うものが、あるのではないだろうか？……私は死なないけどな！
結局野暮なことを言ってしまった。

がああああああああ！！

果たして角熊は、そんな私に咆哮を以って応える。

ピン と、再び空気が極限まで張り詰める。緊張が、私と角熊の空間を支配していた。双方ともに次が必殺。次の衝突こそが決着の時。

そして先に仕掛けたのは　　いや、その瞬間、私と角熊は確かに同時に動いていた。

ぐるあああああああああああつっ！！

「あああああああつっ！」

双方ともお互いに向かつて一直線に駆ける。
死線は一瞬でゼロまで収束する。

先攻は角熊、再び爪がギリリと光る右の豪腕が私に迫る。
しかし、私は更に角熊の懐に飛び込み、それを無力化する。

だが、角熊も次の手を既に打っていた。

ぐわっ、と角熊の顎が開かれ、私の頭部に迫る。鋭利な牙がずらりと並んだ口内は、さながら冥府への門か、地獄への扉か。

が、私も負けてはいない。ぶっちゃけそれは読んでいた。

あの右腕の一撃、一度目と比べて明らかに力が乗っていなかった。ならばこれは次の行動に繋げるための布石…私が防ぐかわすかしたところで、角熊の追撃が飛ぶのだろう。

しかし。来るのが分かっていたらどうとでもなる。

私は遊ばせていた左の拳を握り締め、角熊のあごへと叩き込んだ。
ぶぎゅっ、と角熊の口が強制的に閉じられる。

そして、私は間髪を入れずに必殺の右の抜き手を高速で突き出した。

頭部？ 否。むしろ論外、抜き手で破壊できるはずもない。

心臓？ 否。少し禿げてはいるが、角熊の胸板は特別厚い。

腹部？ 否。貫けるが、必殺には程遠い。

答えは無論 首だ！

ズブツ

必殺の一撃は、角熊の皮を破り、肉を裂き、頸椎すらも破壊し、反対側へと突き抜けた。

びくびくと、角熊の身体が痙攣する。押し潰そうとしていたのか、私に遅れて迫っていた両腕も停止した。

「なかなか 楽しかったよ、熊くん。でも残念、捕食者は私（とピヨ介）。来世では、うん、

蜂蜜でも食べてなさい」

ぐづぶづ

角熊は大量の血を口から吐き、程なく絶命した。

「みんなちはクマさん（後書き）」

動くな！ 少しでも動けばピヨ介が火を噴くぜ…！

どっちらつちのパートナーもすごいモノみたいです。

みんなちはレベル概念(前書き)

現実と(r y

今回は話は進みません。説明回?でしょうか。
というか短くなりました。なんかすみません。

みんなにはレベル概念

テイローン

角熊の首から右腕を抜き、倒れ付す角熊を眺めていると、どこからか奇妙な音が聞こえた。それはまるで、ゲームなどでレベルが上がった時に鳴るような効果音

「まさか！ “解析”！」

再び、“解析”を使って私は自分のステータスを見た。私の目に映るそれは、確かに以前のモノとは少し変わっていた。

名前	ナデシコ
種族	人間
レベル	1
筋力	0
耐久力	1
魔力	0
抗魔力	1
感覚	1
スキル	“解析”、“優秀”

「おお…すごく、上がってる…角熊万歳」

何と言うか。楽しい。このレベルが上がった時の達成感…やはりR

PGはこうでなくてはいけないね。ゲームじゃなくて現実？なんだけれども。

ピヨピヨ

「え？ 自分のも見てくれって？ えーと、“解析”…おお」

名前 ピヨ介

種族 ヒヨコ？

レベル 3 9

筋力 1 4

耐久力 1 3

魔力 3 8

抗魔力 2 6

感覚 2 6

スキル なし

ピヨッピヨー

「ほほう…ピヨたんにもレベルがあったのか…ん？ もしかしてモンスターとかにも普通にあるのかな。今度試してみようか」

ピヨ ピヨピヨピヨー

「それはともかく食べようって…もちかけたのはピヨ介じゃないか…まあいいや」

パチ パチ

肉の焼けた、香ばしい匂いが辺りに漂っている。
火はピヨ介が点けてくれたが、捌くのは私がやった。

ナイフは持っていたけど捌くとかやったことないからーっ。ナイフ？
ガ に襲われた日から携帯するようにしてたんだよ。深い理由は無いけどねー！

それはともかく、私は熊の身体をずたずたにしなげらな何とか肉を取り出したわけだけど、ああ、熊さんが見るも無残な姿に…

あ、角取っところ。何かに使えるかもしれないし。毛皮…は無理だなあ。今回で大体分かったし、毛皮は次回に期待ということにしよう。ふわふわの毛皮、今は血でべちょべちょになってます。

ピヨ ピヨ ピヨ

ピヨ介は地面に降りて焼けた肉をつついていて。どうやら肉食でよかったらしい。

私はピヨ介を眺めながら、そういえばと考え事をしていた。

天使（仮）は、レベルやスキルを世界のアシストシステムと言った。なるほどその通りなのだろう。レベルは、本人の力量で決まるわけではないし、また絶対的に本人の力量を決めるものでもない。そうでなければ、一応強いという自信がある私がレベル1であるはずがなかったのだ。初期レベルに個人差があるのは、世界側システムに何らかの基準があるのだろう。生まれたばかりのピヨ介の初期レベルも、1ではなく3だった。

例えば、だ。感謝の腕立て伏せ1万回を毎日、一ヶ月続けたとする。

しかし、それでレベルや筋力ステータスが上昇するというわけではないだろう。上昇するのは、おそらく少量の経験値と自分自身の筋力のみ。

つまり、レベルが劣るからといって相手の方が強い、というわけではないし、まして総合的な能力で劣る、というわけではないということだ。

ひよろひよろの、たまたま初期レベルが20なだけの引きこもりと、ムキムキの、己が力で鍛え上げた肉体をもつレベル5のスポーツマンが筋力を競えば、仮に筋力ステータスで上回ってもレベル20の引きこもりが負けるだろう。…もしもレベル100だとか絶望的な差であれば、その限りではないだろうが。

結局のところ何が言いたいかと言えば、レベルの大小で相手の力量を測ってはいけないということだ。私のような外見詐欺な実例もある。種族による肉体スペックの強弱もあるだろう。もしかすると、もう死んでしまっただけかめられなかったが、角熊も実はレベル1だったという可能性もないのではないだろうか。

そんなことを考えながら、私は焼けた肉にかぶりついた。

「熊肉…うまいねなかなか。」

あ、そういえば他の人はどうしてるのかな。運が悪い人は死んでるだろーな…特にレベルの高い人はむしろ自分の力を勘違いして犬死しそうだし」

こんにちはレベル概念（後書き）

主人公以外の人の視点を入れないと、こつこつ作品って世界が広がらないですよね。

でも難しいです。戦闘描写以上に。
単発なら簡単なんですけどね…

みんなちはギルド（前書き）

ああ…ようやくここまで来ました…

とても、疲れました。力を入れるところが違う気がしないでもないですが。

今回は長々と書いたせいで描写が変なところがあるかもしれません。

みんなちはギルド

「はあ…よつやくすつきりした…」

ピヨピヨー

私は、人里の中央にある井戸でとりあえず目に見える部分の血を洗い流していた。

村人の視線なんてキナラナイ！ 村人のヒソヒソなんてキナシナイ！

言わずもがな、熊を素手で貫いておいて血がつかないわけがない。それに腕だけでなく、私の表面積の少なくとも半分は返り血で染まっていた。熊の解体の際に、雑な作業な所為で大量についたのだ。

今まで考えないようにしていたものの、さすがに我慢が出来なくなってきたので、私は水場を捜して森の中を早足で彷徨っていたのだが、突然視界が開けたのだ。森を抜けたのだと、すぐに気づいた。その上、運よく村？を見つけて今に至るわけだ。

村の門番に、驚かれたり心配されたり不振がられたりしたが、ようやく井戸を借りることができた。私の服はほとんど血に染まってしまっている上に、既にほとんど乾いている。

代わりの服はないし、『最初からこういう色の服でした！』で通してしまおう。

…因みに門番は日本語を話していた。翻訳されているとかそんなものじゃ断じてないよ。どうやら天使（仮）はそこまでハードモード

にする気はなかったらしい。言葉が通じるといふのは、いいものだ…好奇心から、『私の身長はどれぐらいに見えますか?』と聞いてみると、『160…弱ってところかな』普通にセンチ単位で答えられていささかびびったのは内緒だ。新しい単位を覚える必要がなくて楽だからいいんだけど。

そういえば門番がこぼしていたが、どうやらあの森はこの村の採取地みたいなものらしい。なんでもキノコやらなんやらをとって食べたり、ギルドに卸したりしているんだとか。最初にこの森に来た時に見つけたようなキノコの群生地はもう見かけなかったものの、それでも所々に危なそうなキノコや危ないキノコが生えていた。

危ないキノコ…赤と白の斑模様のキノコんだけど、私は一度近くで見てもよ々と近寄ったんだ…しかし、突然そのキノコが襲い掛かってきた。ぱかっと口が開いてこっちに飛びかかってきたんだ。正直言って気持悪かったね。結局　ピヨ介の火炎放射であっさりと返り討ちにあっただけど。他の木々にも直撃していたものの、流石ピヨ介の炎、被害はゼロだった。キノコ以外。きいいと不自然に開いた口から耳障りな断末魔をあげていてうるさかったので、私は転げ回るそれを踏み潰した。ぐにやりと、かなり嫌な感触だったよ…匂いも最悪だったしね。

というわけで、キノコには基本的に近寄らないようにしていたんだけど…あんなものなんに使うんだろう…

「そういえば、こんな村にもギルドってあるんだね」

ピヨピヨ

ついでに聞いておいた、冒険者ギルドの場所である。こつこつ町と

いうほどの規模がない人里では、運搬や護衛といった依頼が主流らしい。また、モンスター（ヒトに敵対的なものを指すらしい）の特定部位、素材として使えるようなものは買い取ってもらえることも聞きだしている。何事にも先立つものは必要だと、私は思うよ…

「さすがRPG…風世界。角を持ってきて正解だったかな…。…買い取って、くれるかな」

「いいとも…これはー、ホーンベアの角ですねー。はい、銀貨二枚にてー買い取らせて頂いておりますー」

村の一角にあった他の家より少し大きな建物、冒険者ギルドの受付で、私は間延びした口調の受付嬢に角熊（正式名称ホーンベアというらしい）の角を見せていた。茶色い髪綺麗なお姉さん風のヒトだ。ところでこの受付嬢、頭に獣耳がある！ そういえば亜人の有無とかは聞いてなかったなー。最初に少し顔をしかめていたような気がしたけど、今は普通に應對してくれている。

銀貨二枚がどれぐらいの価値があるのかは知らないけど、宿一泊分はあると思う。多分。

「あ、すみません。冒険者登録をしたいのですけど…」

私は結局角を売り、銀貨二枚を受け取った。ところで、彼女の頭の上でピクピクと動く獣耳が目がいってしまう私は、むしろ正常だと思っ。

「はーいー。冒険者登録ですかー。かしこまりましたー。少々

お待ちくださいーいー」

S i d e ・ 受付嬢

私はーアリエラー。ギルドでー受付をしていますー。ちなみに人間じゃなくて獣人ですよー。

その日もー、私はいつも通りギルドの受付で仕事をしていましたー。そんなところにー、彼女が入ってきたのは昼過ぎのことでしたー。

ニコニコ笑っている長い黒髪の綺麗な女の子だったんですー。頭の上に黄色いヒヨコを乗せていてー、変わっている子だなーが第一印象でしたー。

ところで彼女は赤い、真っ赤な服を着ていたんですよー。いえー、赤いだけの服だったら似合っていますねーだけですませられたんですけどー、

彼女私の受付まで来たんですよー。そしたらっ血生臭い匂いがぶんぶんしたんですっ。

うっかり顔をしかめてしまいましたー。鼻が利くのもホント考えものですよねー。慌てて接客スマイルに戻したんですけどー、気づかれてしまったみたいでしたー。気にしてないようでしたので、別にいいですよねー？

因みにー、なんだか不気味な子だなーに評価は変わりましたねー。

「どうやらー、ホーンベアの角を換金しに来たらしくー、そういうこととあまり慣れていない風なのが印象的でしたー。ホーンベアは確かCランクの下位 血まみれなのは気になりますけどー、彼女がしとめられるとは思えませんねー。」

「あ、すいません。冒険者登録をしたいのですけど…。」

「えー、冒険者登録ですかー。まあ冒険者ライセンスは身分証としても使えますしー、作っておいて損はないですねー。」

「はいー。冒険者登録ですかー。かしこまりましたー。少々お待ちくださーいー。」

「何十回と繰り返してきた冒険者登録、今更手間取ることは何もないですねー。」

「ということー、私は奥からギルドカード（しらっぺ）と記入用紙を一枚ずつ取ってきましたー。」

「それではー、まずこの記入用紙に必要な事項を記入してくださいー。名前、種族、年齢、職種、力量、特技。これらが記入してもらおう項目になるのですねー。あ、書けましたかー。」

「あー…この力量って何ですか？」

「あ、それですかー。」

「それはですねー、文字通りその人の力量を見る基準なんですけどー、FSSで分けられていますー。最初の冒険者ランクもー、こ

れを参考にして決定されるんですよー。

あなたの力量はー…こちらの水晶に手を置いて下さればー、すぐに分かりますよー」

受付にいつも置いてあるギルド水晶。名前の通りギルドには欠かせないものですー。えーと、黒色…Fランクですかー。まあ順当なところですかねー。

やはり彼女がホーンベアーをしとめたわけではないようですねー。Fランクの彼女が、下位とはいえCランクのモンスターを倒すなんてまずありませんしねー。…そうなるにあの角はどうやって手に入れたのでしょうか…：気になりますねー。

ああーまた、深く踏み入りそうになってしまいましたー。受付嬢の私に、それはご法度ですからねー。

「あなたの力量ランクはー、Fランクになりますー」

「あー、はい。…やっぱり最低かあ。1000がどれぐらいかは知らないけど、長くなりそう…」

「え、なんですかー？」

「いえ！ なんでもありませんよ！ それよりも、記入項目、埋まりましたよ」

はいー、ありがとうございます。拝見いたしますねー。

えーと、ナデシコさん 人間 17歳…17歳？ もう少し若いかと思いましたがー。職種は…未定。まあこれは後々でいいですかー。力量Fの特技なし…とー。

「はいー、結構ですー。それではー、冒険者カードを発行しますねー」

これで役に立つのもー、なんとまたギルド水晶なのですー。こうやって用紙とギルドカード（しらっぺ）を重ねて持ってー

「全てを束ねる水晶よー 彼の者を導きたまえー 冒険者新規登録ー」

ぽふんっ

何度見ても不思議ですねー。私の手から用紙が消えて、カードもしらっぺから様変わりしていますー。ナデシコさんも少し驚いているみたいですねー。

やっぱりこの水晶はいいですねー。何がいつって私の間延びした口調にも反応してくれるところでしょうかー。

「えーとー、こちらのカードがナデシコさんの冒険者としての身分を証明するものになりますのでー、くれぐれもご注意くださいー。もしも紛失した場合はー、再発行は受け付けておりますがー、銀貨一枚を費用としていただきますので失くさないようにしてくださいねー」

ナデシコさんの冒険者ランクは、やっぱりFになりますー。ビギナーランクとはいえー、新しい冒険者の誕生ですー。なんだか感無量ですー。

S i d e ・ ナ デ シ コ

私は受付嬢から受け取ったギルドカードをちらりと見た。彼女が水晶にカードを掲げるまでは確かに何も書かれていなかったはずなのに、黒い縁取りのカードへとそれは変わっていた。

冒険者ランク F

名前 ナデシコ

種族 人間

力量 F

書かれているものはとても簡素だ。正直寂しいと言わざるを得ない。やっぱり職種とか特技とか、適当に書くべきだったか…

「ナデシコさんー、ナデシコさんー？ 詳しい説明はお聞きになりますかー？」

「聞きます聞きます」

情報は貴重だ。この世界にきてまだ一日も経っていない（多分）よ
うな私には特に。

それから受付嬢は長々と話してくれたけど、まとめるとつまりこ
うだ。

- ・ 冒険者ランクも F S S で分けられている。
- ・ 依頼はランク分けされ、自分より上のランクのものを受けるこ

とも可能。

- ・ 依頼をキャンセルする場合は、ものによって違約金が発生する。
- ・ 依頼をこなすことでポイントがたまり、一定量を越えると次のランクへと昇格される。
- ・ ただし力量ランクが必要な場合もあり、随時カードを更新することをオススメする。
- ・ 討伐依頼の場合、指定された部位を持ち帰りのこと。

「とまあこんなところでしょうか。質問も随時受け付けておりますので、分からないことがございましたら、遠慮なくいらしてくださいー」

「なるほどなるほど。ありがとうございました」

私は受付嬢に小さく頭を下げて、冒険者ギルドを後にした。まだ依頼をとるつもりはない。とりあえずのお金は手に入ったので、それで宿をとることにする。
まずは屋根とベッドの確保なのさあ！

「さーピヨたん！ 宿を探すとしようか」

ピヨ

ギルドに入ってから口を開かなかったピヨ介、少し心配したが特に問題はないようだ…もしかや空気を読んだのだろうか…？ …読むよ
うな空気だったかなあ。

ピヨ ピヨ ピヨ

「え？ …あー。そっか。さっきのお姉さんに聞けばよかったね…」

ピヨ一

今さっき出て行っておいて、すぐにまた戻るのなかなか気恥ずかしい。しかし私はピヨ介に急かされて突っつかれて、渋々Uターンするのだった。

みんなちはギルド（後書き）

アリエラさん。名前を出した意味は特にありません。多分。

こんにちは只者じゃない人(前書き)

テスト間近で何やってるし自分。

今回は会話を結構入れてみました。どうでしょうか。

こんにちは只者じゃない人

二日目の朝。

「えーと、向こうだっけ…」

小さな宿屋で夜を明かして次の朝、私は服飾屋に向かっていた。こつこつという町ほどもない人里では、副業として商売をやっているところもあるのだとか。実際、宿屋は副業だった。ギルドの受付嬢に場所を聞かなければ分からなかっただろう、小さな看板があるだけのまるきり民家だったのだ。

因みに、一泊銅貨五十枚でした。相場は銀貨一枚らしいけど。残り、銀貨一枚銅貨五十枚。やばいとしか言いようがない。

民家的宿屋の女将さんは結構フレンドリーだった。赤い服を見て驚いていたけど、汚れているということを知ると、なんと服をくれたのだ。

今着ている服は、そのもらった服である。

しかし女将さん、私は旅をしているんだけど、村娘の服装はどうだろう…もらっておいて文句は言いたくないけど。

元々来ていた服は抱えて持っている。バッグの類が欲しいと思いつうにかならないか女将さんに聞いたところ服飾屋を紹介され、今向かっているということだ。

ピエロ。ピエロ

「え？ あ、あつた。…相変わらず分かりにくい…」

ピヨ介が突いた方向にはやはり民家。しかしその戸口には服を描いた木の看板がぶら下がっていた。

「すみませーん」

「はいはい…どちらさんかねえ…おや、見ない顔だね。旅人さんかい…にしては服装がそれらしくないねえ…」

入った先に居たのは少し歳のいった老婆だった。私を見て少々怪訝な顔をしているが、仕方ないだろう。今の私はぱつと見はただの村娘なのだ。それに武器も持っていない。むしろ初見で冒険者と見抜いたら、私はその人を尊敬する。

店内はそれほど広くなく、やはり民家とくつついている感が否めない。一応棚や机はあり、いくつか商品が置かれている。

「いえ、旅人であつてます、というより冒険者でしょうか。まだ新人ですが…それでえーと、実は物を入れる袋が欲しいんですけど」

「ああ、荷袋かい。丁度冒険者用の丈夫なやつがあるよ」

そう言つて、老婆は黒い皮の袋を取り出してきた。紐で頭を締め、ぶら下げて持つタイプの袋だ。そこそこ大きく、今の荷物を入れてもスペースはまだ余るだろう。しかし…

やばい。よく考えたらお金全然ないじゃん。黒皮とかなんか高そうだし…

「銀貨一枚ね」

え！？

「えー！？ …あ、あの、安くないですか？」

「この店も趣味でやってるようなもんだしねえ…それにお前さん、駆けだしと言ったろう。さっきあからさまに顔色が変わったしねえ。手持ちがあまりないんだらう？」

「ええ…」

「それとお前さん…武器がないようだけどどうするんだい」

「あー。私は今のところ素手が主体です…この先どうなるかは分かりませんが」

「ほほっ、素手とな…そこそこやれるようだね。姿勢を見れば分かる…おまけだよ、こいつを持っていきな」

そして、老婆が差し出したのは黒い手袋だった。見ただけなら皮のようにも見えるが、しかし違う。不思議な光沢を放っている。…言うならば、何かの鉱石に近いような。手袋でありながらそれは硬質的な何かを思わせた。

「これは…」

「手袋に見えるだらう？ だけどそうじゃない。これは武具さ。拳を使う者のね…素手よりはマシになるだらう。使ってみて、いらないければ返品すればいいし、いっそのこと捨てても構わないよ。どうせお下がりのようなものだしね…」

投げやりに言うような老婆に私は慌てて首を振った。荷袋を安くしてもらってその上武具？までもらうなんて、流石の私でも申し訳ないと思っただからだ。

そんな私に老婆は、先行投資だから出世払いしてくれたらいいと言った。

そこまで押されて断っては、というより遠慮しては流石に失礼かと私は黒い手袋をもらうことにした。なんだかんだと断っていても、実のところ私はこの手袋に惹かれていたのだ。

「ありがとよ。これで受け取ってくれなかったら、荷袋の値段を二倍にするところだったよ」

ぶーっ

老婆の爆弾発言に思わず私はふいてしまった。そこまでして渡したかったのだろうか。しかし横暴とも言えない。元々荷袋もまけてもらっていたのだ。それに、無理矢理渡されたところで私には損はなく、得しかない。

「荷袋と手袋、ありがとございました」

私は銀貨一枚を老婆に払って品を受け取り、老婆に頭を下げた。…これで残りはあと銅貨五十枚…すっかり稼がないと…頭を下げた私を見て、老婆は笑って首を振った。

「いいよいいよ。そもそもそっちの武具の方は無理矢理渡したようなもんだしねえ。かっかっか」

「それでも、ありがとございました。あの…名前を聞いてもいいですか？ 私はナデシコっていいいます」

「私かい？ 私はレーリだよ。村の連中にはレーリ婆さんと呼ばれてる。…一人前になったらまた来な、ナデシコちゃん」

「はい、レーリさん。」

「ん？ なんだって？ 歳の所為か、最近耳も少し遠くなってね…」

「いえなんでも。それでは、また、来ますね」

「そうかい、それじゃあ、また…」

ぎゅっぎゅっ

店を出て、私は早速手袋を手に嵌めた。そして、少し驚いた。全く違和感がなく、まるで何も嵌めてはいないようなほどに手に馴染んだのだ。

老婆の言っていた機能も本当だとすると、老婆の態度とはむしろ反対に、これは大した代物だろう。

「すごいもの、もらっちゃったかな…」

ピヨ

すると、いつの間にか首の後ろ辺りの服の中に隠れていたピヨ介が

出てきて、ぼぼんと私の頭の上に戻っていった。

「何やってるのピヨたん…また何も言わないと思ったたらそんなところぢ…」

ピヨピヨ

「動物の本能って…もしかしてレーリさんのこと言ってる？」

ピヨ

「そっかー…ピヨたんも気づいてたんだ」

始めに会った時から、私はレーリさんの纏う濃い気に気づいていた。彼女はかなり、やると。さらに老婆は、この手袋を“差し出した”のだ。これは私が自分の戦闘スタイルを言う前から見抜き、荷袋と一緒に持ってきていたということ。

そして、最後に私はレーリさんに対し“解析”を使った。結果は名前以外全て『？』だ。おそらく、ある一定以上の力量差の相手の情報は見れないのだろう。しかし私が最低ランクであることを入れても、おそらく彼女のレベルはかなり高い。

「まあ…確かにレーリさんは只者ではなさそうだったけど、いい人だったよ」

それは、いい物を貰ったから、だとかそういう理由じゃない。私はそこそこ人を見る目があると自負している。その私から見て、彼女は『いい人』だった。

ピヨピヨ

「それは自分も思った…って？ ふふ、隠れてたのに」

ピヨ… ピヨピヨ…

本能だから仕方ないと鳴くピヨ介をからかいながら、私は笑った。いつも笑ってはいるけど、それはもう少し自然な笑みだったと思う。なんとなく、ピヨ介と意見が合ったのが嬉しかった。

レリーさんの店で買い物をした後、私はまた冒険者ギルドへ来ていた。私は今日のうちにこの村を出て、近場の適当な町あるいは街に向かうつもりなのだ。

保存食？ 私は趣向で食事をするだけで、数日食べなくても死なないよ。あ、元々死なないっけ。ピヨ介？ 炎さえ吐かなければ、とても低燃費らしいよ。基本私の頭の上に座ってピヨピヨ鳴いてるだけだしね。

「そうですねー、この村から北へ真っ直ぐー…草原ひとつと山ひとつ越えたところにー、ソレスティという町がありますよー。そうですねー…徒歩だと三日から四日といったところでしょうかー」

「そうですね。ありがとうございます」

「もうー、行くんですかー？」

受付嬢は心配そうに首を傾げた。私は相変わらず軽装な上に今は村

娘姿だ。心配になるのも仕方ない。その上私は冒険者ランク、力量ともにFランクだ。

実際はこの身こそが凶器なので軽装で全く問題ないし、実力は十分あるつもりなのだが、彼女は知る由もないだろう。

「大丈夫です。…ところで、配達依頼とかはないんですか？ ついでにやっておきたいんですけど」

「あるにはあるんですけどー、定期的にこの村にいらっしやる冒険者の方がいてー、その人に大体頼んでるんですー。先日いらして、今日は用があつていらっしやらないんですけどー」

なんでもあまり冒険者の来ないこのギルドでは、定期的に冒険者に来てもらつて配達をまとめて頼んでいるそうだ。その人はなんでもBランクらしく、ギルド本部も専属を特別に許可しているのだとなるほど、通りでここのギルドに彼女以外誰もいないと思つた…。イメージとしては、ギルドに突然入ってきた小娘に屈強な冒険者達がギロリ、だったのだが。昨日はそれで落胆したものだよ…。

「そうですか…。分かりました、それじゃ私はもう行きますね」

「はいー、お気をつけてー」

受付嬢に手を振つて、私は扉に向かった。

ああ、これで彼女の獣耳もしばらく見納めか…。いや！ きつと町ではさらなる出会いがあるはずだ！

そんなことを考えながら私はギルドの扉を開いた。

「ん？」

「おっと」

その所為で外にいた男とぶつかりそうになった。

「すみません」

「いいけどよ、それよりどいてくれないか？ 中に用があるんだが」

「あ、はい。どうぞ」

「どーも、っと」

男は横へどいた私の前を通って、ギルドに入っていった。

背には大きな剣を吊るしている。そして彼のその身のこなしから分かる、実力。おそらく彼が、受付嬢の言っていたBランクの冒険者なのだろう。

けど、多分それだけじゃない。

「ふ、ふ、ふ。面白いね、面白いな。一日に二人も出会うなんて…
そう思わない？ ピヨたん」

ピヨ ピヨ ピヨ

ピヨ介の返事に、私はまた笑っていた。しかしそれは先刻のような笑みではなく、口角のつり上がった笑い方だった。

「アリエラ、受けてた依頼だけだよ」

「あー、バックスさんー、お帰りなさいー。ママツシユの森の調査でしたよねー。どうでしたかー？」

「村のすぐ近くにホーンベアがいやがった」

「な！ そ、それでしとめてくれたんですよね!？」

「それが、既に死んでたんだ。ありや魔物の仕業じゃねえ、そもそもあの森にいる魔物はフランクばかりだ。それに、キノコどもが貪っていたが、それ以前にかなり乱雑に一部の皮がはがされていた。その上角も折れていたぜ。間違はなく人間の仕業だ。それもおそらく素人」

「まさか…そんな、でも…彼女はF…でもでも、そういうば」

「おいどうした。なんか心当たりでもあんのか？」

「そ、それが昨日、ホーンベアの角を持ち込んだ子がいたんです。

ま、まさかママツシユの森にホーンベアがいるなんて思わなくてでもそういうばあの子の服血の臭いが」

「とりあえず落ち着け。断定は出来ん。だが、そいつが一番くさいで、昨日持ち込んだ、と。そしてホーンベアも最近死んだものだった。……待て。あの“子”つつつたか？ まさかさつき出て行った小娘……」

「は、はいー、その子ですー…。でもナデシコさんはまだフランクで」

「…なにい？」

「ナデシコ、だと？」

こんにちは只者じゃない人（後書き）

只者じゃない老人って、定番だと思います。

因みに、『只者じゃない人』はナデシコさんも含みます。

次の更新はしばらくあとになりそうです。

お気に入りを入れてくださった方、ありがとうございます。そして
ごめんなさい。

みんなちはトリッパー（前書き）

何やってるし自分。

思った、この衝動がいけないんだ。

今回は短いです。

みんなちはトリッパー

俺は、転生者だ。

前の世界では普通の学生をしていたが、突然歩道に突っ込んできたトラックに轢かれ、俺は呆気なく死んでしまった。

すると、死んだ、と思った次の瞬間俺は白い空間にいた。

上も下も白い、自分が立っているかも危うい、そんな場所だった。死後の世界なんて信じちゃいなかったが、そのときは一瞬ここがあの世かと思ってしまうものだ。

そんなところで半ば途方にくれていると、目の前に突然翼の生えた子供が現れた。

そいつは、自分を天使だと言った。

俺は死んだ、そして規則に従い異世界に転生させる、とそうも言っていた。規則とやらがなんなのか、気になって聞いてみたものの、自称天使は適当にはぐらかして俺の質問に答えることはなかった。

そして、俺を送る前にとつてつけたかのようにこんなことも言っていた。

胡散臭い自称天使曰く、俺を轢いたトラックの運転手は、轢いた後にさらに事故つてそのままこの世界にトリップしているらしい。俺を轢いた奴を特定できるような名前は教えてくれなかったが、なんでも俺のような転生者ではなくトリッパーは、全員そういうことをしでかした人間らしい。つまり、複数いる。“解析”を使えば、日

本人名になっているので分かる、と言っていたが…今まで『イアン』だとか『グスタフ』だとか『ソフィア』だとか『アリエラ』だとか、そう言う名前ばかりで、少なくともまだ見つけたことはなかった。だが俺にはそんなことはどうでもよかった。あの時口には出さなかったが、自称天使にこの話を聞いて、こいつのことを俺はさらに疑わしく思った。

あの時、あのトラックに轢かれる瞬間、運転席を見ることが出来ていたのだ。

そして、一瞬しか見えなかったが、トラックは確かに無人だった。

それを見ていたからこそ、口ではそうかと言ったが本心では全く信じていなかった。

もしも死の瞬間何も見ていなかったら、俺は信じていただろう。

知っていてなお、何故か俺は信じようとしていたのだ、こいつの話を。まるで何かに引っ張られるかのように。

運転手がいなかったにも関わらず、“俺はトラックを運転していた人間に殺された”のだと。

自称天使は、信用できない。

…それでも俺は、念のためにと条件に該当する人間を探していた。

そういう名前の少数民族が暮らす集落があったという話を数年前に聞いたが、既に過去形だった。

その集落は、おかしな集団に襲われ壊滅したのだとか。…そのおかしな集団がなんなのか、あまり考えたくはなかったが、俺は正体が予想はできていた。

その話以来、俺は日本人名の人間を見つけることはなく数年が経過

し、俺はそのことをほとんど忘れ、Bランク冒険者としての仕事を全うしていた。

そして、見つけた。

『ナデシコ』。

典型的な、母音の多い日本語名だ。

ようやく見つけた該当者。

が、俺はすぐに接触するつもりはなかった。

自称天使の話しを信じるわけではない、しかし彼女は警戒するに値した。

一見ただけでは、ただ楽しそうに笑っているだけの頭にヒヨコを乗せたおかしな少女だったが、俺はホーンベアを倒したのは彼女だと半ば確信していた。

ホーンベアは、首を貫かれ頸椎を破壊されて死んでいた。

そしてアリエラは、一番右腕からが血の臭いが濃かった、と証言している。

あらゆる状況が、少女を指している。

だが、彼女はFランクらしい。間違ってもCランクのモンスターを倒せるとは思えない。その得体の知れなさが、俺の一步を踏みとどまらせていた。

ただ普通に出会っただけだったならば、俺は彼女の見た目に流されほいほいと接触をはかっていたことだろう。

しかし…。ようやく見つけた、あの世界からのトリッパー。このまま逃すつもりはなかった。

「アリエラ、ナデシコとやらはこの村に滞在しているのか？」

「い、いえー。すぐに発つと言っていましたー。ソレスティに向かうみたいですよー」

「…そうか。俺も、直ぐに発つ。届け物があつたらさっさと出してくれ」

「は、はいー」

人の多いソレスティならば、監視し、見極めるのにむしろ好都合だ。俺は彼女を追いかけたく、しかし見つからないようになりに遅れて村を出た。

「つついた先は鬼か蛇か…どちらにしろ、逃がしはしない」

このとき俺は、妙に彼女に固執していたように思う。

自称天使の意図に逆らっているつもりで、実は流されていたのかも、しれない。

いんにちはトリッパー（後書き）

複数のトリッパーや転生者。テンプレすぎでしょうか。

補足的な設定。

水晶でわかるレベル区分。なお、これが直接冒険者ランクになるわけではない。反映はされるけど。

黒F	1	20	紫E	21	35	青D	36	50	藤C	51
白B	61	70	灰A	71	90	銀S	91	120	金	SS121

冒険者ランクは適当にこんな感じ。

Fで駆け出し、Eで半人前、D〜Cでようやく一人前、B〜Aで一流、S〜SSで一握り。

こういう設定はバランスが難しいと思う。後々悩む事になるかも。

みんなには面倒事（前書き）

結局、書いてしまいました。

WARNING！ WARNING！

今回は暴力シーンがあります。

ナデシコさんがやっちゃいます。

ご注意ください。

…もっとのほほんやったほうがいいのかな。

「んんんには面倒事」

ブンッ ーッ

ギャウンッ

「聞いてなかったんだけど。草原に狼が出るなんて」

私は次々に襲いかかってくる狼を殴り飛ばしながら、溜息をつきぼやいた。

草原を歩いて二日目、太陽の照る中絶賛狼に襲われ中だ。

一日目はのんびりまったりと風景を見ながら歩いていたが、今はそれほどのんびりはしてられない。走りながら闘っているため、景色もぐんぐん後ろに流れていってしまう。

倒しても倒しても、いずこから湧いてくるのだ。立ち止まっていればキリがなくなる。

「正直めんどい。…他の人はどうしてるのかな、これ」

私はこのとき知る由もなかったが、狼の縄張りのど真ん中を突っ切っていた。

また、この草原に出る狼は一応モンスターには分類されるものの、魔物といえるほど強力ではなく、普通の獣だったため魔法、特に火炎系のものに弱かった。火球を飛ばせば、しり込みし襲い掛かってこなくなるぐらいだ。私はまだ使えないわけだが。

「解析」

名前
種族 ウルフ
レベル 3
筋力 4
耐久力 2
魔力 0
抗魔力 0
感覚 3
スキル

私は狼と負けず劣らずの速さで走りながら、隙を見てスキルを使った。予想通り、人間でなくとも普通にステータスを閲覧することができるらしい。一頭一頭のステータスは大体似通っていて、どの個体も足の速さこそ優れているものの、実際のところかなり弱い。私はかなり手加減した拳一発で呆気なく吹き飛んでゆく。そして一撃くれば、しばらくは立ち上がっては来ない。村で貰った手袋
武器を使うまでもない。

テイローン

また飛びかかってきた狼を殴り飛ばしたところで、あの音があった。今日聞くのはこれで二回目だ。今回は狼を殺していないのだが、どうやら倒すだけでもいいらしい。おそらく殺したほうが経験値の取得効率はいいのだろうが。

「…ん？」

気がつけば、いつの間にか私は狼の縄張りを抜け山に入っていた。木々があちらこちらに生え、日の光を遮っている。

山の傾斜は大して急でもないのに、それほど苦労せずに向こう側まで行けそう。それにここからは煩わしい狼もいないので落ち着いて移動できる。

「何かお金になるものを採取しようか。ギルドで買い取ってくれるだろうし」

ピヨピヨ

「ん、そういえば：“解析”」

私はレベルが上がったのを思い出して、スキルを使った。

名前	ナデシコ								
種族	人間								
レベル	17		19						
筋力	12		14						
耐久力	9		10						
魔力	10		11						
抗魔力	6		6						
感覚	14		16						
スキル	“解析”	“優秀”							

「こんなもんか。もっとドカンと上げられないかなあ…この山にいるモンスター適当に狩ろうか？ 素材部位もあるかも知れないし」

村のギルドで宿屋の場所を聞いたとき、私は念のため素材部位のこ
となどについて尋ねていた。アリエラは、私の話しを聞いて奥から
分厚いカタログを持ってきて貸してくれたので、私はこれ幸いとそ
の中の知識を大方頭の中に叩き込んだ。宿屋ではこれを読むことに
ほとんど従事してしまったが。

ピヨー ピヨー

「え…？ “解析”」

名前	ピヨ介
種族	ヒヨコ？
レベル	9 10
筋力	4 4
耐久力	3 4
魔力	8 9
抗魔力	6 6
感覚	6 7
スキル	なし

「何故に…？」

ピヨ介に言われ“解析”を使ってみると、なんとピヨ介のレベルも
上がっていた。

私は狼と戦っているときに、火を噴かないように言うておき、実際
ピヨ介が戦うことはなかった。

だが戦っていないはずのピヨ介にもレベルは入っていた。

「戦っていないくとも、仲間にも経験値が入るといことかな…？でもゲームじゃあるまいし…ってああ、ここRPG風世界だったっけ…」

こんなところにもあった、隠しルールである。今回は簡単に見つかったものの、これではもっと私達の常識では気づきにくいルールもあるのではないだろうか。

例えば、まだ私は見たことがないのでよく分からないが、魔法の法則も私達には理解しがたいものだろう。この世界の人間は『当たり前』として認識していてもだ。

「まあ…天使（仮）も言ってたしね、ルールや裏技を見つけて楽しめって」

ピヨ？

「ん、何でもないよ。行こっか」

ピヨ

S i d e . . . ? ? ?

「……………はあ、はあはあっ」

熱い。喉から血が出そうなほど熱い。

心臓が破裂しそうなほど鼓動を打っている。

手を振れないので、何度もこけそうになる。

足の感覚も薄れてきてしまった。

それでも。それでもとまれない。

後ろから、連中の声が足音が迫っている。

お父さんも、私を庇って死んでしまった。

だから、とまれない。とまればきつと終わってしまう。

お父さんにもらった命を、無駄になんてできない。

「だ、だれ、つか　　っはあ、助けて……」

こんな山の中に、あんな連中以外に誰かいるとは思えないけれど、私は諦めたくはなかった。

そうして、我武者羅に走っているうちに、奇跡が起きた。希望が見えた。

木々の向こうに人影が見えたのだ。

「た、助けてっ!」

だが、それはすぐに絶望に変わった。

そこにいたのは、何故か楽しそうに笑っている、ヒヨコを頭に乗せた少女だった。

自分より少し年上ぐらいで、村娘のようだった。

何故ここに村娘がいるのか疑問に思う余裕なんてなくて。

そして絶望希望絶望を一気に味わい、私の足は、ついにもつれてしまった。

どしゃりと、地面に倒れる。

両手は動かない。両足ももう動かせない。もう、逃げられない。

「逃げて!」

それでも、知らない人を巻き込みなくて、私は声をあげた。

S i d e ・ ナ デ シ コ

「助けてと言ったり逃げてと言ったり、ずいぶんと忙しいね」

突然飛び出してきた少女に向かって、私は声をかけた。

短く切った綺麗な金髪はほつれにほつれ、あと数年も経てば美人になるであろう整った顔立ちも土で汚れていた。

そして、後ろ手に縛られている。

さらに少女の後ろから迫る複数の気配。どうやら本当に忙しいらしい。

「ふふ、面倒ごとみたいだよ。ピヨたん」

ピヨ

私は倒れ付している少女に歩み寄って、ピヨ介に声をかけた。ピヨ介は一つ頷いて、私の頭の上から少女の頭の上に移った。

「な、なんで逃げないんですか！」

少女が泣きそうな顔で私に言うが、私は相変わらずの笑顔を彼女に向けて軽く言った。

「まあまあ。何とかなるよ。」

その言葉を言うと同時に、迫ってきていた複数の気配 盗賊あるいは山賊が私達を取り囲んだ。

全員が全員剣を手に持ち、にやにやと笑っている。

全部で七人。弓矢を背負っている者が二人。隠れている者なし。

数人の剣に相当量の血が付着している。私はくりりと見回してそれを確認し、目を細めた。

「ひっ」

囲まれていることを知った少女が、小さく悲鳴を漏らす。

「おい、今日はついてると思ったけどよぉ、本当についてるなぁおい！」

「まったくだぜ、上玉を一日に二人も手に入るとはよぉ。そいつに逃げられた時にゃあいつそ殺してやるうかと思っただけどよ、今じゃ感謝しなけりやなぁ」

「よお嬢ちゃん、駄目だぜこんな所に一人でいちゃぁ。なんせ、俺達みたいなのがいるからなぁ」

物騒な会話にぎゃははと下品な笑い声をあげる盗賊を無視して、私は彼らにこやかに声をかけた。

「こんにちは。早速で悪いんですけど、早々に帰ってくれませんか？」

盗賊たちははあ？と目を見合わせて、さっき以上の笑い声を上げた。

「おいおいおい、本気で言ってるのか嬢ちゃん。逃がすわけねえだろ」

余裕綽々に、その手に持つ剣をちらつかせて盗賊が言った。

『逃がしてあげる、だったんだけど』 私はその言葉をのみこんで、

口角をつり下げた。

盗賊達はナデシコの表情には気づかずに、拘束するべく彼女に近寄った。

最初の盗賊がナデシコの手に触れ

ばきやつ

る前にぎゅるぎゅると回転しながら宙を舞い、地面に落下した。そして、彼が起き上がってくる気配はない。

一時停止していた仲間の一人が不審に思い覗き込むと、

「し、死んでる…」

そこにいたのは、首をあらぬ方向に向け白目を向いて絶命している、かつては仲間だったものだった。

そこで、恐怖に駆られて逃げていれば、彼らは生き残ることができただろう。

ナデシコも、まだ追いかけてまで始末するつもりはなかった。

だが彼らは、現実から目を背けたのか先の光景が信じられなかったのか、怒りの感情を選んでしまった。

そして、引き金を引いたのはナデシコの言葉だった。

「脆いんだね」

怒りが、爆発する。

「てっ、てめええええええっ！」

「ちくしょう！ ぶっ殺してやる！」

盗賊達は激昂し、ナデシコに向かって襲い掛かった。

ナデシコはと言えば、避けようともせず、黒い手袋に覆われた拳を構えただけだった。

構わず、まずは三人の盗賊の剣がナデシコに肉薄する。

パアアアアアッ

が、その全てがナデシコの肉を裂く前に甲高い音を立てて砕け散った。

ナデシコが村でレーリに貰った黒い手袋 武具、名を『大喰ら^{ホルイ}い』^{イター}と言う。大層な名称がついているだけあって、その性能、能力は強力。

この世界では魔導具と総称されるもので、持ち主の魔力を喰らいその性質を変える。具体的に言えば、硬化するなど。さらに魔力の量に応じ、持ち主の意思通りの形状となる。“大喰らい”という名の通りその量にはおよそ限界はなく、自由自在に、際限なく巨大化することすら可能である。∴それをなす為の魔力量もとんでもないものとなるが。

今回ナデシコはその性能を確かめるため、しかしまだそれほど魔力

があるわけではないので、硬化だけを使った。
結果的に、『ホーリイター大喰らい』に包まれた彼女の拳は迫りくる剣を容易に打ち砕いてしまう。

（おそらく魔力によるこの脱力感は微々たるものなのに、この硬化度。ほんとレーリさんって何者だろう）

そう考えている間にも、ナデシコは剣が急に折れて呆然としている盗賊三人に攻撃を開始した。

しかし、それも一瞬で終わる。

一人の胸を強打し、二人の首をそれぞれ片手だけでへし折る。
硬化された拳は紙の如く肋骨を、枝の如く頸椎を、粉々にしてしま
った。

あと、三人。

変わらぬ思考で、ナデシコは残りの人数をカウントする。

先ほどまでの怒りはどこへやら、残り三人も啞然と固まってしまっ
ていた。

が、一番近くの一人を葬ったところで残り二人のうち一人が再起動
を果たす。

「ち、ちくしょう！」

彼は、人質にするべく最初に追いかけていた少女の方に走った。

それはある意味正しかったが、しかしナデシコの方が上手だった。

ピヨーーーーッ！

「ぎっ　　ぎいやあああああつあああああああつ！」

少女の頭の上にいたピヨ介が、強力な炎を噴いたのだ。

火にまかれ、ごろごろと転がる盗賊だったもの。彼の命も、数秒とはもたないだろう。

それは一番酷い死に様だったかもしれない。

それは、人質をとろうとした盗賊へのナデシコからの意趣返しか。

「ひ、ひいいいっつっ！！」

最後に残った一人も再起動を果たし、しかし彼は脱兎の如く逃げ出した。

それも、当然かもしれない。

目の前で五人の仲間が死んだ。

そして、一人は火にまかれ転げ回っている。

だが

ひゅっ　　どすっ

「……………」

硬化した人差し指の部位が伸びて、逃げようとした盗賊の胸を貫いたのだ。

最初とは、状況が違う。

戦端は開かれていた。

たとえその原因が、ナデシコの一撃だったとしても、ナデシコの一言だったとしても、

ナデシコには、既に一人として逃がすつもりはなかった。

自分たち以外に動く者はいなくなって、ナデシコは自分の拳を見つめてつぶやいた。

「つまんないな」

その表情にいつもの笑顔はどこにもなく、どこまでもつまらなそうだった。

こんにちは面倒事（後書き）

今回の補足。というかナデシコさんの心情。

一方的に殺すという行為が、あまり好きではありません。
ちなみに、普通の人ならば忌避感を感じますが、彼女の場合は空虚感を感じます。

最後に、

ナデシコさんは少々お人よしなところはありますが、甘くはありません。

ごんにちは強い人（前書き）

CAUTION…？

どうしよう…めっさ迷走してる気がします…最初の作風はどこ行っ
たし。

それに、今回は文章構成がいつにも増してあまい気がします。どう
しよう…投稿して大丈夫だろうか…

けど、こんな世界だってことと、こんな主人公だってことを知って
欲しかったのです。

いいよ許す、なんて心の広い方は どうぞ！

くんには強い人

「さて…」

「ひっ」

事を終えたあと例のテイローン が鳴ったけど、今はこちらの方が先だと少女の方を向くと、怯えられてしまいました。いやまあ仕方ないけどね。

相手は少女を害した盗賊でも、腐っても人間だ。その虐殺シーンを見たのだから怯えるのも当然だろう。

一応できるだけ血が飛び散らないようにしていたものの、あらぬ方向に曲がる首や燃え盛る人間を見ていい気分はしないだろう。

「ピヨたん」

ピヨ

それはともかくこうしていても話が進まないし、私は彼女の手を縛っていた縄を解き、ピヨ介が頭に戻ったのを確認して口を開

「あの！ あ、ありがとうございます…」

こうしたら少女に先手を取られてしまった。

「どういたしました。余計なお節介じゃなかったみたいで、安心してよ」

彼女は少し青い顔をしているものの、それでも先ほどの怯えはどこへやら、今は私を毅然として見つめていた。

それを見て、同時に私の口がまた曲がりそうになる。

しかしそれを押さえつけて、私は改めて彼女のことを聞いてみることにした。

「それで、あなたはこれからどうするの？　どういう状況だったのか詳しいことは分からないんだよね、私には」

すると、彼女は顔をうつむけて重そうに口を開いた。

何でも、彼女は父親と二人で各地を転々と旅していたらしく、今度はこの先の村に滞在するつもりだったらしい。しかしその途中で盗賊に襲われ、父親は死んで彼女も連れて行かれるところだったとか、父親は腕の立つ冒険者だったらしいが、彼女を守りながら五人と戦っている時に、二本の矢が同時に彼女に向かって放たれ、それを庇って死んでしまったらしい。しばらく大人しくしていたが隙を見て逃げ出し、死ぬ気で走っているうちに私を見つけた、ということだ。

母親はなし。親戚はなし。家はなし。

結論。どうやら彼女にこれからの当てはないらしい。

重い空気を纏って途方にくれている彼女に向かって、私は選択肢を持ちかけた。

「ねえ。」

私はさ、あなたを助けようと思って助けた。
だから、私にはあなたを手助けする責任があると思うんだ。持論だ
けどね。

けど、まあ一方的に決めさせるつもりはないよ。
このまま一人で自由に、死ぬ気で生きるか、それとも、私について
来るか」

彼女は私に驚いた、そして少し不安の混じった表情を向けた。

「助けて、くれるんですか…？」

「言ったよ？ 私はあなたを勝手に助けた。
ならば私には、私の助けが必要なくなるまで、あなたを助ける義務
がある。」

さあ、選んで。あなたは、どうやって生きたい？」

「
う
う
う
」

私は、父親の墓の前で泣く彼女の泣き声を聞きながら、彼女とは背
を背ける方向の木にもたれて空を見ていた。

私が出した選択肢で、彼女は私について行くことを選んだ。

彼女に言ったこと。それが、彼女を助ける理由になったことは本当だが、しかしそれ以外にも私には少し理由があった。

私は強い人間が好きだ。

彼女は父親が殺されても、一人になってしまっても、それでも決して諦めずに生きようとした。

逃げ出して、私を見つけて、彼女はそんな時でも村娘私に対して『逃げて』と言った。

私による虐殺場面を見ても、怯えを飲み込んで私にお礼を言った。

力が無くても、私はそんな人間が好きだ。だから余計に、彼女の助けになろうと思えた。

彼女が私についていくことを選んだあと、私達は彼女の父親が殺された場所に向かった。

道中は私が口を開くことは無かった。彼女も何もいわなかったし、彼女が何かを堪えているようだったから、というのもある。

彼女は父親の死体を見て、何かが崩れそうになっていたが、それでも必死にそれを押さえ込んでいるようだった。

それから、二人で彼の墓を作った。

私は墓を作り終えたあと墓から少し離れて、適当な木を選んでそれにもたれかかり、

今こうして空を見ながら彼女の泣き声を聞いているということである。

私に彼女を慰めることはできない。

私は、誰かが死んでしまってもきつと泣かないから。彼女がどれほど悲しいのか、私には分からないから。

きつと、私にはいつまで経っても理解することはできないことだろう。

大切な誰かが死んでしまっても、人はいつか死ぬから、いつか別れることになるから、だから仕方ない。

私は、そう思ってしまう。私の中で完結してしまう。

それは、未来永劫『私』で在り続ける、私の宿命なのだろうか。

「ねえピヨたん」

ピヨ？

「君が、もしも死んでしまったら、もしもいなくなってしまうたら、私は泣くのかな」

…………… ピヨ ピヨ ピヨ

「 ……ありがとう」

ピヨ介の返した言葉が嬉しくて、申し訳なくて、だから私は小さな声でお礼を言った。

それは僕には分からないけど、母さんが死んでしまったら、
いなくなってしまうたら、僕は泣いちゃうよ

こんにちは強い人（後書き）

初めてですね、ピヨ介の言葉が出てきたのは。

ピヨ介はテレパシーでもまだ「ピヨピヨ」としか言いませんが、言葉では伝わらない意思のようなものがテレパシーを通じてナデシコさんに伝わっています。

ナデシコさんはいつも脳内変換でおおまかに言葉にしていますが、今回は特に明確な意思が伝わったので、明確な言葉に変換されました。

こんにはアルパーグ（前書き）

最後の方にこの世界についての設定を少々。 疲れました。

そのあとは少しだけ彼ら視点。

こんにちはアルパーク

「あの、お待たせしました」

数十分後、泣きやんだらしい少女が木にもたれていた私のところにやって来た。

「もういいの？」

ここは山の中で、おそらくこれから旅をする自分たちには、この場所へは来れないところになる。

それでも、彼女は首を振って私に笑顔を向けた。

「いいんです。それにあまり泣いてたら、父さんきつと怒りますから」

「そ」

やせ我慢していることに気づいてはいたが、それをここで口にするのは野暮というものだろう。

だから私は、この話しはここまでにして話題を変えることにしたのだ。むしろもう少し早くに聞いていてもおかしくないことだったが…

「あのさ。あなたの名前、そういえば聞いてなかった。私はナデシコ。あなたは？」

そう自己紹介。ここまでずっと『少女』だとか『彼女』だとかを使

っていたが、そろそろ名前を聞いてもいいころではないだろうか。

「あ、あ、わ、私は、ファナっていいます！　よろしくお願いします、ナデイスコさん！」

「……ナデシコ」

「…ナデイシコさん？」

「ナデシコ」

「ナドウスコさん」

「酷くなってるよ…ナ・デ・シ・コ」

「ナ・デ・シ・コ…さん」

「うん、そつそつ、ナデシコ」

「はい！　ナデイシコさん！」

「…もういいよ。でも『ナデイシコ』って呼ばれるとなんか腹立つから、『ナデイ』って呼んで」

「は、はい、すみません、ナデイさん…？」

「うん、よろしく、ファナ」

何故か私の名前を言えないファナに、私は妥協点を見出しながら少し溜息をついた。あの村ではみな普通に呼んでいたはずだが、彼女

には日本人名は難しいらしい。

そして、私は今まで片方の手に持っていた剣をファナに差し出した。私が始末した盗賊達からパチったものだ。無論、金目の物もしっかり回収してある。金貨三枚に銀貨三枚、銅貨数十枚といったところだ。財布ごと持ってきてやった。ふふ、なかなか持っていていやがる。きつとあの時の私は悪い表情を浮かべていたことだろう。

「あ、あの、この剣は？」

「連中から取ったやつ。あなたも、少しは使えるんでしょ？ ある程度自分の身は自分で守ってね」

「あ、はい。父さんに少し型というか、基本を教わってました。実戦経験はあまりありませんが…」

私の差し出した剣を受け取って、ファナは一つ頷いた。だが、また暗い表情をしたと思うと顔を俯けてしまう。

「…私が、私がもっと強かったら、父さんも死ななかつたかもしれないのに…父さんはいつも私を守ってくれました。あの時も…ナディさん、私、強く、なりたいです」

しかし、すぐにファナは顔を上げ、真っ直ぐと私を見つめた。その目は少し濡れていたけれど、とても澄んだ青色をしていた。

元々、私は彼女を鍛えるつもりだった。剣を渡したのも自衛のためということもあるが、一人で生きられるぐらいに強くすること、それも目的の一つだ。

今回も彼女に先んじられて言われてしまったが、私はそんなことはどうでもよく、むしろ嬉しかった。やはり私は間違っていないかった

と、そう思えるから。

確かに、別に力が強くなる以外に生きる道など山ほどあるが、私はこちらの道をファナに提示しようとしたことには理由がある。彼女には素質がある。それも曖昧なものではなく、もっと明確なものが「うん、うん、うん。誰にも負けなくなるぐらい、がっつり強くしてあげるよ。私は剣は使わないから、戦い方を教えると思う。あと実戦かな、ハードになりそうだよ」

少し脅すようなことを言ってみたが、彼女の瞳は揺るがない。私は自分の顔が笑むのを自覚しながら、またそれに目を向けた。

先刻使った“解析”の効果はまだ残っている。つまり、私の目にはまだ彼女のステータスが映っていた。

名前	ファナ
種族	人間
レベル	22
筋力	15
耐久力	18
魔力	12
抗魔力	14
感覚	17
スキル	“天才”、“祝福”、“奇運 正”、“×× L V・2”

システム
世界に愛されているとでもいうのだろうか？

サワサワと流れる小川の側を今日の野営地にして、私は早速特訓を始めた。とはいっても、ファナの実力がまだ分からなかったので、まず基本を口頭で伝えて軽く組み手をした。

「たあっ」

「ふっ」

ファナの一振り一振りを捌きながら、私は彼女を観察していた。ちなみに今は、途中で拾った木を『ホルイター大喰らい』で削って、彼女の体格に合わせて作った木剣を使わせている。

見たところ彼女の太刀筋はなかなか綺麗で、確かな才能を感じさせる。彼女の父親はずいぶん丁寧に教えたらしい。…冒険者が使うものにしてはやけに綺麗すぎると、思わないでもないが。

が、まだまだ実戦で使うには型にはまりすぎている。これでは簡単なことですぐに足元をすくわれてしまうだろう。

右、下、切り払うように上に行って、横に振る、容易に先が読めてしまう。

「はっ」

「わっ」

ファナの斬撃をかいくぐり、私は顔面目掛けて拳を突き出した。やはり、彼女はそこで戦いにおいてもっとも致命的なことをしてしま

「111」

どぶっ

「くふっ…」

「最初に言ったでしょ、相手から絶対に注意をそらしちゃいけないって。ファナの場合、今は視覚に八割九分頼ってるんだから、目を閉じちゃ駄目でしょ、目を閉じちゃあ」

「す、すみません」

とは言ったものの、最初からできることでもないだろう。これからゆっくり慣れさせていけばいい。そもそも、顔面に拳が迫ってきていきなり対処できるようなら、あの盗賊連中と戦うこともできただろう。

「ピヨたん」

ピヨ

相変わらず、ピヨ介は私の言いたいことをすぐに理解してくれる。ポンとピヨ介は私の頭から降りて、うずくまっているファナの頭の上に陣取った。

「私は、これから夕食その他もろもろを取ってくるから。今まで何にも遭わなかったけど、この山にも動物はいるはずだし、山菜やなんかもあるだろうし。ファナは罰として、私が帰ってくるまで素振りね。まあ、だいたい百回毎に休憩を挟むようにね。適度な運動（？）適度な休憩、これ大事。あ、ピヨたん残していくからサボろう

なんて考えようだね」

ピヨ一

「は、はい、分かりました」

ぱち、ぱち、ぱち。目の前で焚き火が燃えている。太陽も沈んで、辺りもすっかり暗くなっている。

今日の私の成果はホーンラビットとリュズラクーンでした。ちなみにリュズラクーンとは下半身に比重が行っているような、後ろ足で歩く狸でした。ポコポコ歩いているところを見つけたと思ったら、石を投げてきたり尖った枝で刺そうとしてきたり、なかなかアグレッシブだった。体型のわりに身軽で、そこは純粹に驚いてしまった。

名前	ナデシコ	
種族	人間	
レベル	19	26
筋力	14	19
耐久力	10	15
魔力	11	15
抗魔力	6	11
感覚	16	18
スキル	“解析”	“優秀”

ふふふ、私もそこそこ成長してきたな。…そういえば、人間を殺すと経験値の取得率がいいのだろうか。盗賊達のレベルは20〜30だった。正直、結構高いと言える。私のレベルの上がり方からみても、そんな気がしてきた。いい気分はしないが、どうやらこれも隠しルールらしい。

「そういえば、ファナは冒険者カードは持つてるの？」

私はもぎゅもぎゅと肉を頬張っているファナに声をかけた。ファナはごくりと肉を飲み込むと、はいと頷いて黒い縁取りのカードを取り出した。

冒険者ランク F

名前 ファナ

種族 人間

力量 E

ふんふんと眺めて、私はファナにカードを返した。

「父さんにそろそろ作ったほうがいいだろうって言われて、最近作ったものなんです」

力量 Eの冒険者ランク F、なるほど最初はFになるのが基本的なのだろうか。それに彼女もまだ職種は未定らしい。

「そういえば、ファナって何歳？」

「え、十四ですけど。ナデイさんは何歳なんですか？」

「……十七？」

「なんで疑問形なんですか……」

正直何歳でもいいのだが、一応前の世界の時の歳を言った。外見的に不自然に見えることは無いだろう。

それから、色々と話し合った。

ファナは旅してきただけあって色々なことを知っていた。

まず、この世界の名前はアルパグという。激しく突っ込みたい衝動に駆られたが、私はようようその衝動を押さえ込んだ。ファナに突っ込んで理解できないだろう。

この世界には四つの国があって、この山も、あの村も、これから行くソレスティもそのうちの一つに属しているらしい。この国はリーディアナ王国といい、王都はソレスティから西に、いくつか町を隔ててずつと行ったところにあるという。商業が盛んで、貨幣もこの国が中心になっている。一応、王国という以上、王や貴族がいるということだが、ファナはまだ見たことは無いらしい。まあこの先見ることも無いだろう。

リーディアナ王国をさらに北に行くと、今度はルナファス王国がある。こちらは魔法が盛んで、この国には魔法学校もあるらしい。リーディアナとはわりと親密な関係らしく、リーディアナから魔法学校に通う貴族子女も数多くいるのだとか。国土はリーディアナほどはなく、しかし優秀な魔法使いを数多く抱えているということ。戦力としては十分らしい。

ルナファス王国の西方向にはダグラント帝国があり、こちらとは牽制しあっているらしい。基本的に皇帝一人が国を治め、貴族もいるが王国ほど力はないようだ。この国にも魔法学校があるらしいが、ルナファスよりは進んでいないのだとか。そのかわり冒険者が多く、傭兵として使うには事欠かない。また、所有する軍隊の個々の力量が高く、戦力ではこの世界一というのがもっぱらの噂だ。

さらにルナファス王国の東方向にはアディアン皇国があり、ここは帝国を何故か敵視している。ルナファス王国とは同盟を結んでいて、親密ではないものの共通の敵を見る事で一応協力関係にはなっているらしい。それでも帝国を攻めきれないところが、帝国の力を如実に表している。

またこの三国が取り囲むようにして、巨大な緩衝地帯、というよりどこの国にも明確には属さない地がある。この地には巨大な大穴があり、その中は巨大なダンジョンになっているのだとか。さらにこの大穴を中心として大小様々なダンジョンがあり、それこそ冒険者の聖地のようなものらしい。大穴はダグラント帝国よりの位置にあり、それが帝国に冒険者が集い、また軍隊が強力である理由だった。逆にリーディアナ王国は最も遠い位置にあり、ある意味貨幣を握る事で力を維持しているような風だ。ルナファス王国と親密な関係にあることも大きいだろうが。今までダンジョンらしきものを見た事も聞いたこともなかったのも、そういう理由だろう。

なるほど、この世界のことについてはおおまかに理解できた。

しかし私は気になっていた事があったため、彼女に聞いた。

「ねえ…『魔王』って知ってる？」

「え、何ですか？ それ」

いるにしては平和すぎると、空気も大して淀んでいないと、思っ
ていたが、やはり私達の討伐対象『魔王』はこの世界にはいないら
しい。元々積極的に倒すつもりは無かったが、あの連中はいつた
私達に何をさせるつもりだろうか？

「今回の代表の準備はもう出来ておるのか。もうあと×××で時間
じやろう。それに世界の解析は進んでおるのか」

「その、そちらは問題はないのですが、実はトリッパの件で…」

「何かあったのか」

「あの、やはりランダム転送では座標だけではなく、じ、時間にも
ずれが生じたようです…」

「それはいつものことじやろう。世界と世界は、明確に繋がらな
ければ同じ時間概念の中にあることはできん。ずれといっても、修正
が必要な段階ではないのじやろう」

「い、いえ、それが不具合があったらしく、纏めて跳ばされたせいで大幅なずれがあったらしいグループがありました。そ、そのグループは予定の三十年前に跳ばされています。次点からは二年前ですので、修正が必要なのは、そ、そのグループだけになるかと……」

「……」

「か、完全に跳ばされてしまっていますので、その、既にその改竄は不可能で……」

「人数は」

「は、はい」

「そのグループは、全体の何パーセントじゃ」

「に、27パーセントです……」

「……それぐらいならば、改竄できずとも修正はできるじゃろう。どちらにしろ、早々に対処せねばならん」

「も、申し訳ございません」

「ふん……いや、これも一興かも知れぬな。いつそのこと、あの案も混ぜてしまったほうがいいデータが取れるかもしれないの。……しかし、うーむ、ごちゃ混ぜになってきたのう。今回のデータは慎重にとらなければならんか……何にせよ、まずは転生装置の準備からじやな。よいか、二度目のミスは許されんぞ」

「10」

こんにちはアルパーグ（後書き）

トリッパーが彼女以外出てこないのは、死んでるからとまだ来てないからでした。ちなみに『魔王』さまもまだ表に出てません。

ところでこんにちはでサブタイ統一してますけど、なんだか自分でやって地味にうざくなって来ました。

じんばんは私の弱さ（前書き）

難産な回でした。

今回もセンチメンタルですかね。ホント最初の雰囲気どこいった。早く主人公無双がしたい。

めっさ短いような気がします。すみません。でも必要な回だったようにも思います。

じんばんは私の弱さ

フアナ！ 逃げるんだ！ …がふっ

いや！ 父さん 死なないで！ いや いやあああああつっ！

「あああああああつっ！」

夜。小川の側で、私は目を覚ました。チリチリと鳴る虫の声も、サラサラと流れる小川も今の私には聞こえず、父さんがいつてしまう時の声が、情景が、幾度となく私の中で繰り返される。

私に、矢が飛んできて。私は、何も出来なくて。そしたら、父さんが私を庇ってくれて。それから、それから

「ああ、う ううううう」

意味もない呻き声が、涙を押し殺した私の喉から勝手に漏れ出しに行く。

あの時、私が矢を自分で避ける事が出来ていれば。

あの時、私が父さんの負担を少しでも減らすことが出来ていれば。

『もしも』になんて、今更なんの意味もない。それでも、それでも『もしもあの時』などと考えてしまうのは、私が弱いからなのだろうか。

父さんはいつも私を守ってくれていた。私はそれを甘受しすぎている。不器用な父さんが何故私に剣を教えてくれたのか、もっと

真剣に考えて、真剣に取り組んでいればよかった。

やっぱり、考えてしまう。私は、こんなにも弱いよ、父さん

「眠れないの？」

見張りをしてくれていたナデイさんが、私に声をかけてくれた。私の体力が万全になったら、寝ていても危険が感知できるような特訓をするって言うってたけど、本当にできるのかなそんなこと。…そういえば、ナデイさんっていつ寝てるんだろう。

「あ、あのナデイさん、私、見張り代わります」

ナデイさんは私がまた捕まりそうになったときに助けってくれた人。サラサラの綺麗な長い黒髪を背中まで流していて、いつも楽しそうにニコニコと笑っている。肌も白くて、腕も足も細いのに、数に勝る盗賊達を格闘で倒してしまった。旅をしているはずなのに、どうして村娘の格好をしているのかは良く分からないけれど。何を考えられているのか分からないけれど、さりげなく私を気遣ってくれる。

少し怖くて、でもそれ以上にとっても強くて優しい人。

「大丈夫だよ。それより、ファナにはしっかりと休んでもらわないと。今までよりハードな旅になるだろうし」

私とは、正反対の人。

「それより、悪い夢でも見た？ 気づいてないかもしれないけど、顔色も悪いし汗もかなり出てるよ」

「え……」

本当だ……。額も汗に濡れ、私の着ていた旅服も汗を吸って少し重くなっているように感じた。

けれど、私は夢のことを思い出して、知らず知らずのうちに膝を抱えていた。服とともに、心もどんどん重くなつてゆく。私は、いつしかひとり言のようにナデイさんに向けて言葉を漏らしていた。

「私は、ナデイさんと違って、全然弱いです。人に剣を向けたこともないですし、あの時も、私は何も出来なかった。私がナデイさんぐらい強かったら、きつと父さんは死ななかつた。それなのに、私はこんなにも弱い……。あの時からずっと、ずっと後悔してる！こんなことなら、父さんじゃなくて、私が死ねば良かった……！」

ボコ

「たっ」

私の口から勝手に出てくる弱音を、ナデイさんは黙って静かに聞いてくれていたけれど、突然拳を上げて私の頭を叩いた。

ナデイさんを見ると、相変わらず笑顔のままだったけど、いつもの楽しそうな笑顔とは違った。多分、怒ってるわけではないと思うし、嘲笑っているわけでもないと思う。なんだか、微笑ましい子供を見て笑っているようだった。

「それは、絶対に言っちゃ駄目だよ、ファナ。

今、あなたはどうして生きているの？ それはあなたの父親が守ってくれたからでしょう？ あなたはお父さんを信じていなかったの？ あなたのお父さんは、間違つた事をしたの？」

ナデイさんの口から次々に飛び出した、疑問符。私はまた、思考の泉に沈んだ。

私はどうして生きてるの？ それは、父さんが守ってくれたから。父さんは守ってくれた？ そうだ、父さんは身を賭してまで私を守ってくれた。

父さんを信じてる？ 当たり前だ、私は父さんをこの世の誰よりも信じている。ならば父さんを、間違っていた？ ならば、父さんは間違ってたなんていない。他の誰よりも、私がそれを知っているし、信じている。

ならば、私が、今生きていることに間違いなんて、どこにもない。

父さんはきつと、私に生きていて欲しいと思ってる。私に自由に生きていて欲しいと。

このままどこかの村に行つて、どこにか居場所を作って静かに暮らす、という選択肢も私にはあったと思う。

けれど。私は強くなる道を選んだ。

今更、強くなったところで父さんは戻ってこない。

…違う、そうじゃない！ 確かにどれだけ強くなっても父さんは戻

ってこない！

けど、『今更』なんかじゃない！ここで私が諦めてしまえば、いつかきつと私は力を持っていなかったことを後悔するときがくる。そもそもここで止めてしまえば、結局は『もしも』の繰り返し。

今更じゃない、今から始めるんだ。

それから私は、いつか胸を張って言うんだ。あなたのしたことに、間違いは一つもなかったんだって。あなたの守った娘は、こんなに立派になったんだって。

それから、今までありがとう、おやすみなさいって、言うんだ。

父さんも、胸を張っていられるように。

「やっぱり、君は弱くなんてないよファナ。私が出会ってきた中で、一番強い人間だ」

こんばんは私の弱さ（後書き）

今回は夜だったのでこんばんはになりました。
ファナはとても強い子です。

これから更新は不定期になりそうです。　（　・　・　・　）　シヨボー
ン

こんにちはソレスティ（前書き）

オワタ＼（＾o＾）ノ　なんか色々とおワタ

まあ自業自得なんですけどねえええええ！

今回はのほほん？回でしょうか。

補足　紹介文とかにちよつと追加です。なんか味気ない気がしたので。

こんにちはソレスティ

山で一夜を過ごし、その次の日、私達はソレスティの目の前まで来ていた。山さえ越えればあとは道なりに進めばいいだけで、それほど苦労はしなかった。

ソレスティは外敵を警戒してか壁で囲まれており、中の様子は外からは見えない。

門は四方向にひとつずつ、今居るここは南門とのことだ。正直、この町は町というにはかなり大きい気がするのは気のせいだろうか。

「はい結構です。ご苦労様でした、それからようこそソレスティへ！」

門には当然のごとく門番がいて、門をくぐる冒険者や旅人の相手をしていた。かくいう私達も少し書類に記入をさせられたのだが、それほどの手間もかからずに今手続きを終えた、といったところだ。おそらく冒険者カードがなかったらまだ時間がかかっていただろう。冒険者という身分はまだ下のうちは後ろ盾に乏しいが、それでも身分を証明できるうえに身軽というぶんにはなかなか便利といえる。村娘な私とカードを見比べていたのはご愛嬌、わりとこの格好も便利かもしれないと思いはじめる。普通の相手なら油断してくれる上に、相手が実力者ならばこちらの力量もすぐに見抜くだろうから、こちらもすぐに分かる。なんと。便利ではないか。

「「ありがとうございます」「」ピヨ」

どちらにしろ、もう入っていいのならもう門で立ち往生する理由はない。私とファナと、ついでにピヨ介は門番にへこりとお礼を言っ

て門をくぐりソレスティへと入った。

「えっと、これからどうしましょうか…」

「そだねー、とりあえず適当に歩きながらギルドあるいは宿屋を探そうかな」

フアナは初めてではないからだろう、落ち着いている。で、私はいつと、おのぼりさん丸出しで、キヨロキヨロと周囲に目線をぼんぼん飛ばしている。

はじめにこの世界に来た時に接触した人里は、いわずと知れたあの村だ。そして、このソレスティと比べてみるとその差はまさに歴然。あえて言おう。あの村は過疎っていたと。

道は石畳できていてとても整頓されている。行き交う人も多いが町は清潔のようだ。おそらく、清掃業者のようなものがあるのではないだろうか？

道の両脇にはさまざまな店が立ち並び、私の目を楽しませている。

さらに行き交う人々だが…

人間、獣人、人間、エルフ、人間、人間、獣人、エルフ、エルフ、
獣人、人間、人間…

なんだろうこの混沌は。ソレスティは種族の坩堝だともいうのか。村でアリエラさんと別れてからここソレスティに期待はしていたが、まさかこれほどとは。この世界がこの国かは知らないが、どうやら種族差別だとか人種差別だとか私にはイマイチ理解できなかったよ。うなものはないようだ。

「ナデイさんナデイさん！ そんなキヨロキヨロしないでください、
恥ずかしいじゃないですか…」

と、私が町の風景を楽しんでいるとフアナが水を挿してきた。こやつめ、邪魔をしおつて。

「うりうり」

「ひ、ひひゃいれふー、あふー、なんれれふはー」

テンションの上がった少々おかしな私は誰にも止められないぜ。私はフアナの頬をぐいぐい引っ張りながら、満面の笑みを浮かべていた。楽しいなー。

「おばちゃんー、この串三本、頂戴」

「あいよー、銅貨九枚ねー」

私はいい匂いを漂わせている屋台で、謎の肉の串を三本購入していた。フアナを開放したあと町を相変わらずキヨロキヨロしながら探索していたのだが、ククという音が頭の上と隣から聞こえたのだ。顔を真っ赤にして弁解するフアナの頭をぐりぐりと撫でながら、私は丁度通り過ぎようとしていたこの屋台に寄ったのだ。ちなみにピヨ介はといえば、頭の上で我関せずといった顔をしている。ピヨたん、そんな態度だと串をあげないよ。

ピヨッ。ピヨピヨッ

素直でよろしい。君にはこの謎の串焼きを贈呈しよう。

一本銅貨三枚。この世界の貨幣の価値やら物価やらはよく分からな
いが、多分妥当なところなのだろう。一応、銅貨百枚で銀貨一枚、
銀貨十枚で金貨一枚、金貨十枚で白金貨一枚というのはもう知って
いるのだが、肝心の基準がないということだ。まあこの串からおよ
そで逆算して、大体銅貨一枚約三十円ってところでいいだろう。

そういえば、宿の女将さんは一泊銀貨一枚が相場って言ってたけど、
ちよつとそれ安くはないかな。もしかして、過疎村にすぎたせいで
金銭感覚が狂ってるのかも…

ところで今の持ち金は金貨三枚、銀貨三枚、銅貨を幾枚…というこ
とは大体十万といったところか。

うわお。パチったお金だけど、まあいいや。それにしても盗賊さん
ったらお金持ちー。

「ピヨたん、たれ、落とさないようにね」

おいしそうに焼けている謎のたれがついた謎の肉を、ピヨ介は器用
にかつおいしそうに食べている。なんだろう、余計私も食べたくな
ってきた。

「ま、その前に…ファナも、はいこれ」

「あ、うう、ありがとうございます」

耳を赤くしながら、うつむいて指の先で串焼きをとるファナがなん

だか可愛くて、私はファナのさらさらの金髪を乱さないように今度はそつと撫でた。

まだ、腹の虫が鳴った事を気にしているのか、それとも撫でられていることに照れているのかは知らないが、ファナに抵抗する様子はないので嫌な気分というわけではないだろう。

さて、小動物のようにもくもくと食べるファナをもう少し撫でていたかったが、私もそろそろ串焼きを食べなければ冷めてしまうだろう。こういう焼き物はえてして焼きたてが一番美味しいのであつて、冷めてしまえばものによつては美味しさ半減どころではなくなる。ましてや私は趣向的な意味のみで物を食べるのだから、美味しくなければその食に意味は微塵もなくなってしまう。∴食べ物を買流するつもりはないが、私はできるだけ楽しんでいきたいのだ。

そして、私はファナから少し離れてついに串焼きを口元へと運んだ。

「さ、それじゃ、いただきます」

「おらあつ、糞餓鬼風情が吠えてんじゃねえ!」

どかあんつ どんつ

「ぐあつ」 「あつ……………」

きつと、私はそのとき油断していた。

楽しみを喰らおうとして、間違いなく気が緩んでいた瞬間だった。結果、いつの間にか前まで来ていたギルドハウス、その扉から吹っ飛んできた少年に体当たり？され、私の手に持っていた串焼きは私の手から離れた。

激しくどうでもいいことだが既にピヨ介のやつは自分のぶんの串焼きを食べ終えている。なので、宙を舞っているのは私の串焼きだけだ。ちくしょうめ。

くるり　くるり

尖った先端が、上に、下に、優雅に串焼きは宙を舞い落ちてゆく。たれは串焼きを離れ、茶色い水滴となって周囲に飛び散ってゆく。

くるり　くるり

その光景を、私は走馬灯のようにスローモーションでつぶさに眺めていた。

くるり　くるり

そして、ついに串は地面へと落ちる

「つとあ…」

前に私の手はしっかりと串を捕らえていた。

「落とすとしても、思ったのかな！ 残念！」

「何言ってるんですかナデイさん…というかいつの間にもそんなところ」

ピヨピヨ

串を捕らえた位置、それは私が最初いた場所から二メートル余り離れていた。ファナからしてみれば、どっかの誰かさんにぶつかられた私が瞬間移動したように見えただろうか？

確かにあの時、私は油断していた。

が、一応私にとっての不測の事態に備えて、私は常に保険を施している。

今回の場合は、加速だ。

想定外の事態に陥ったとき、私の五感が自動的に加速される。有体に言えば、情報処理能力の瞬間的な向上だろうか。

串が落ちる光景を眺めていたのは別に串の走馬灯を眺めていたわけではなく、自ずから感覚を加速させた状態で、文字通りスローモーションの世界にいたというわけだ。

身体能力に関しては今回はそのままでも十分だったので強化はしなかったが…

(それにしても、いざというときのための保険がこんなことで発揮されるなんて…)

私はほつとするとともにすこしションボリしていた。ここぞというときに使いたかった、実を言えばこれが本音だ。

「まあ串焼きが助かったからいいとしようか…これもある意味『ここぞというとき』ってことになるのかな」

ところでピヨ介はやっぱり私の頭の上にいる。瞬間的に加速した私の身体から振り落とされないとは…相変わらずピヨ介は侮れない。

そんなことを考えながら、私は右手に持っていた串焼きをぱくりと口に入れた。

ちよつと冷めちゃったけど、うん美味しい。

「さて、それじゃあ ギルド入ろうか」

「あ、はい…ええっ。いいんですかこの子」

もうギルドの前にいるのだから丁度いい、と私はギルドに入ろうとしたのだが、ファナが「うう」とかいつて転がっている私にぶつかった少年を指差した。別に私は少年を無視していたわけではない、心の底からどうでもよかつただけだ。

茶色に、少し緑がかっているような妙な髪の色をしている。まあそれとてこの世界では珍しいものでもないけれど。だいたい十代前半といったところだろうか、背に剣を背負ってはいるが、実戦に使われたような気配はない。着ているものも安っぽい革鎧といったところか。外見的には私より冒険者らしいのだろうか。

「『いいんですか』って…何かいけないの？ 怪我もしてないみたいだし、自分ひとりで立てるでしょう。まだ子供みたいだけど、このギルドから出てきたって事は誰かに甘えるつもりはないってことだろうし」

「そ、そうですか、そうですね…」

少し慚然としているようだが、一応納得した様子のファナ。が、そこに声がかかった。

「お、俺は！ 子供じゃない！」

「自分で『子供じゃない』と言う子は大抵子供だから、もう言わない方がいいよ。」

ファナ、行くよー。自分で『子供じゃない』って言ってるんだから、手助けするのは野暮ってものだよー」

「あ、はい…ナディさん、なんだか言ってること矛盾してませんか？」

「してないよー。そもそも私の言った事は、前半と後半で似てるように聞こえるかもしれないけど、内容は全然違うよ。矛盾のしようがない」

ピヨ

「お、お前だって子供じゃないか！」

なんか後ろから声が聞こえるけど、絡まれたところで特に面白くな
さそうなので、私は今度こそ無視してギルドハウスの扉を押し開け
た。

こんにはちほソレスティ（後書き）

ところで、盗賊たちからパチったお金にはファナの父親の所持金も含まれて居ます。だから結構大金を持っていたんですね。ちなみにそのことにはナデシコもファナも気づいていません。ま
い
つか。

こんには本格ギルド（前書き）

今回は題名に困りました。

まあ村のギルドはあんなでしたし、別にいいかな！なんて。

こんにちは本格ギルド

ギロツ

「ひっ」

ギルドに入った途端たたき付けられる数々の視線。ファナは小さく呻いて私の後ろで縮こまった。

「…いいなあ」

そして私は少し感動している。ギルドの屈強な男達、突然入ってきた村娘？+ に怪訝あるいは威圧的な視線を向ける。やはりこうでないとは面白くない。村のギルドは閑散と、というより私以外いなかった。期待には沿えなかったが、このギルドはなるほど私のイメージどおりだ。

屈強な男達、冒険者たちはそここのテーブルに座って、私達が入ってくるまではざわざわとしていたのだろう。しかし今はしんとしている。

「おいおい……またガキかよ……」

誰かのその言葉を皮切りに、ギルド内にまたざわめきが戻った。それは私達の話か、それとももう私達を無視して自分達の冒険の話語り合うか、様々である。

特に何もなかった事に少し拍子抜けしながら、私はギルドの受付に向かおうとした。ここのギルドには複数の受付があるらしく、私は

一番近いところにあつた手前の受付を選んだ。受付には人間の女性
がいて、このギルドの光景は日常茶飯事なのかその顔には揺ぎ無い
営業スマイルを浮かべている。

「おい嬢ちゃん、ここは遊び場じゃねえんだ、さっさと帰んな！」

すると、先ほど一番最初に口を開いた男が話しかけてきた。ニヤニヤと笑っているところを見ると、別に親切心だとかではないらしい。第一印象は柄が悪い、といったところか。いかつい顔つきに、くすんだ灰色の髪をどうやってかつんつんに立てている。身長は大体190と少しか、筋肉質でなかなかガタイがよく、背には大きな剣を一本下げている。しかし服の前を開けてその胸板を見せているのは、あれか、俺の肉体美を見るとかいうやつか。とりあえず鎧とか着ればいいのに…そう思わないでもない。

そこそ腕はたつ…でも私を見抜けないところで底が知れるといったところか。村で出会った冒険者の足元にも及ばないだろう。

「なんなら、俺が送ってやるぜ？ もちろんそつちの子もな」

私の顔やら身体やらにじろじろ、私の後ろで縮こまっているファナにちらちらと下卑た目線を向けながら、そんな事を言ってくる変態^男。所謂身体目当てというやつだろうか、こちらでは初めてなのでなかなか新鮮ではある。しかし

「いえいえ。別に遊びに来たわけじゃありません、冒険者として来ましたので、気を使ってもらわなくて結構ですよ」

特に興味がないので、丁寧^にに返答する。私^はつてばおつとなー。ごほん。

「はあ…？ …く、ははは、あははははっ！」

変態^男は私の返答に突然笑い出した。そして、どうやら興味のない振りをして耳を傾けていた、他の冒険者たちもそれに続いて笑い出す。

変態^男はテーブルから立ち上がり私達に近づいて、タイミングを見計らったように口を開いた。

「嬢ちゃんが冒険者あ〜？ 馬鹿言っちゃいけねえ。さっきのガキにも言ったがな、冒険者なめんなよ？」

少し腰を曲げて、私の顔を見ながら威圧的に言う男。が、やっぱりその口はニヤニヤと笑っている。

他の冒険者たちはうんうんと頷いていて、どうやら男を止める気はないらしい。

「ご心配なく。私、こう見えて結構強いんですよ？」

そんな威圧的な相手に対し、私はやはり大人しい対応をする。猫をかぶっているとも言いかも。

予想通り男はまた大口を開けて笑い、他の冒険者たちもまた私の言葉に大うけしているようだ。

男は笑いが収まったところで、傲岸不遜な顔つきで胸を張り、こう言った。

「笑わせてくれるねえ、嬢ちゃん。それじゃあよう？ その強いところってのをちょっとお兄さんに見せてくれよ。ほれ、パンチでもキックでもやってみな！ ぎゃはははは！」

また爆笑の渦に巻き込まれるギルド、どうやら彼らにはツボだった

を突き破り外へと吹き飛んでいった。他の冒険者から見れば、正に先の少年のときの光景の再現である。吹き飛ばした男が、今度は吹き飛ばされる側ではあったが。フアナも冒険者たちも啞然としているが、まあ私の知った事ではない。

「こんなもんで、どうでしょう？ ってここからじゃ聞こえないか。うん、やっぱりここからなら丁度ピッタリだったな」

私はその出来栄えに満足しながら頷いて、そして何事もなかった風を装いながら受付へと改めて向かった。

受付の女性の営業スマイルが少し強張っているようだが、まあ私の知った事ではない。私はとても朗らかに彼女に挨拶した。

「こんにちはあ」

「……………はっ。は、はい、いらっしやいませ。本日はどのような用件ですか？」

しまった。

私は受付の女性にそう言われ、ようやく自分の愚を悟った。

特に用がない。

素材を売ろうにも、結局ごたごたでモンスター探しと素材回収をしなかったので持つてはいない。臨時収入があったので、というのもあるが。

依頼云々を聞くころにも、このギルドには掲示板という便利なものがある。受付で聞く必要はない。

どうしようと少し悩みながら、私は結局適当な質問でお茶を濁すこ

とにした。

「さっきの少年…というか、さっきギルドで何か騒ぎでもあったんですか？」

一応、興味を少しだけ持っていたので、私は男と少年のいさかいについて尋ねた。

彼女は少し拍子抜けしているようだったが、律儀に私の質問に答えてくれた。

その話は割かし長く、予想以上に込み入った話だったが、こういうことらしい。

なんでも、この町の近くにもレベルは低いがダンジョンがあり、初心者の冒険者たちにとっては絶好の場だとか。しかし、そのダンジョンに数週間前、‘死神’が突如現れたのだ。

‘死神’。ダンジョンにランダムに現れるレアモンスターである。出会ったらラッキーかつアンラッキーなんだとかで、美味しいが人生の終わりも彷彿とさせるモンスター。種類は千差万別、しかしどれも総じて強く、並の冒険者ではまず勝つ事は出来ない。しかし、もしも勝つことが出来れば強力な道具や、また何らかの恩恵が手に入り、熟練の冒険者は‘死神’を嬉々として倒すらしい。

ソレスティの近くのダンジョンに現れた‘死神’はその中でも強力な部類で、話を聞き討伐に向かったAランクの冒険者で構成されたパーティを壊滅させたのだ。

一人だけ逃げ延びた冒険者の証言では、なんとか連携しながら一度は倒したがすぐに復活したそう。そのとき不意打ち気味に一人殺され、そこから一気に瓦解、壊滅といった風だ。『始めて見るタイプのやつだった…なんかわかんねえけどゆらゆらしててその動きも

捉えにくい…しかも死なねえ…ちくしょう！ もうたくさんだ！』
と、こんなことを言っていたらしい。

この話が何故少年と男につながるのか、それはこういうことらしい。
ソレスティギルドは、このままでは初心者ダンジョンが使いえなくなる、ということでSランク討伐依頼として出していたのが、そこにやって来た少年がそれを見て受けると言い出したのだ。
それはどう見ても無謀だ、馬鹿だと冒険者たちが茶化し、それに少年が憤慨してあの男といさかいになったんだとか。
そして、臆病者だとか腰抜けだとか少年が言ったところで、怒った男の拳が飛んだらしい。

あれ。別にあの男悪くない？

まあ蹴ったのは私の都合だったから、少年と男の都合はどつでもいいんだけど。

こんにちは本格ギルド（後書き）

知恵熱出そうです。

あ、私乳児じゃありません。誤用の方の知恵熱です。

え、言わなくても分かりますか。

こんばんはストーカー（前書き）

みんな大好きバックスさんです。

でもつかまっちゃいました。

なんだか怖いナデシコです。

こんばんはストーカー

どうしてこうなった……

ソレスティの一角にある、ムーディーな雰囲気漂う『酒場』ではなく『バー』で、俺は内心頭を抱えていた。

そんな俺の目の前にいるのは、何が楽しいのか目も口も笑っているあの奇妙な娘、ナデシコだ。無論、俺が冷や汗をたらだらかきながら頭を抱えているのは、この少女が原因だ。

普通の人間になれば好印象を与えるだろうその整った顔立ちや穏やかな笑顔も、俺にしてみれば威圧感しか感じない。村で少しすれ違ったときは分からなかったが、こいつやばい。滅茶苦茶強い。

逃げる、の選択肢はない。おそらく『魔王からは逃げられない』並に逃げる事が出来ないだろう。逃げようとすれば途端に足を潰される。そんなことが頭に浮かんで、俺はぶるぶると身体を震わせた。

ちくしょう どうしてこうなったし

またそう思いながら、俺は今日の事を回想した。

草原を抜け山を越え、俺はソレスティにたどり着いていた。顔見知

りの門番に聞いたところ、数時間前に冒険者カードを持ってヒヨコを頭に乗せたおかしな村娘が来たという。金髪の、こちらはちゃんと旅人に見える少女と一緒にだったらしいが、ナデシコで間違いはないだろう。俺はいいタイミングでソレスティに入れた幸運を感謝した。

ソレスティに入り、何気なく聞きこみをしながら道を歩いてゆく。情報はごろごろあった。どうやらナデシコと金髪の少女の二人はずいぶんと人目を惹いていたらしい。

曰く、おのぼりさんがごとくキヨロキヨロしていた。曰く、二人とも可愛かった。曰く、ヒヨコを頭に乗せた変人だった、と証言も様々だ。

少女の二人組みが歩いた道筋を辿りながら、俺はいつしかギルド前まで来ていた。

相変わらず聞きこみをしていると、なんでもギルドに入っていたということなので俺はギルドの方を向いた。と同時に

ドゴオン！ 「おおおぶうつつ！！」

凄まじい音と愉快的な声が同時に、ギルドの扉を突き破って飛んできた。

190強の大的男が軽々と宙を舞い、ずしんと地面にたたきつけられる。なかなかに見ごたえのある光景だった。

ざわざわと倒れている男の周りに通行人もとい野次馬が集まり、ひそひそと話しをしている。俺もその野次馬に紛れ込んだのだが、その男には見覚えがある事に気づいた。

「あいつ…もしかしてCランクのデイヴィッツか…？」

冒険者ランクCのディヴィッツ。腕はたつが素行がいささか悪く、まだ大きな問題は起こしていないがそのうち何かやるんじゃないかと言われているやつだった。

そいつが今、白目をむいて口から泡を吹きながら気絶している。

おそらく、ナデシコともめたのだろう。確証がないながら、俺にはそんな奇妙な確信があった。

しばし、野次馬に混じってこっそりギルドの方を見ていたが、ようやくナデシコがギルドから出てきた。一緒にいる金髪の少女に見覚えはないが、旅の連れか何かだろう。

ナデシコの方はディヴィッツに見向きもせずに、金髪の少女の方はちらちら見ながらナデシコの方に何か話しかけていたが、結局ナデシコに丸め込まれたのか何もせずギルド前から立ち去っていった。俺はあわててその背中を追いかけた。

その後は特に変わったこともなく、二人は町中を観光することごとく歩き回り、甘味を食べ歩くがごとく喫茶などを渡り歩いていた。そして、あたりが暗くなってきたところで近くにあった宿屋へと入っていった。

「さて…どうするか」

しばらく待って俺は宿に入り、部屋をとりながらさりげなく二人のとった部屋を聞いた。直接は言わなかったが、間接的な情報をまとめればこれぐらいはすぐに分かる。

そして俺はまた外に出て、その部屋を外から見張ることにした。根気はあるが、見張るといふ点では効果的だ。

夜も更けてきた頃、俺は物影で夜食を食べていた。

「…ん？」

と、夜闇に不穏な気配を感じる。

「あいつは…ディヴィッツか？」

俺同様、別の物影に隠れているディヴィッツと他数名。どうやら仕返し何からしい。

ついに‘何か’を起こしたか…俺は少々呆れながら、一応ぎりぎりまで見張る事にした。連中とて、まだ彼女達を襲うと決まったわけではない。

しかし、

ばたん

宿の部屋の一つの窓が開き、そこから一人の少女がふわりと舞い降りた。

ナデシコだ。

彼女はふてふてと、気の抜けた歩き方でどうでもよさそうに夜の道を歩いてゆく。

呆然としていた俺と、ディヴィッツたちだったが、慌てて双方ともに彼女のあとを追った。俺はもちろん誰にも気づかれないように、だが。ディヴィッツたちの方はもうばれているのだろう。だからこそ、連中が動きだす前に彼女が先に動いたのだ。

少し、表より奥まった通り。しかし少し開けている場所で、ナデシコはデイヴィッツたちに取り囲まれた。しかし相変わらず余裕の表情で、ニコニコと笑っている。

デイヴィッツはなにやら捲くし立てているが、柳に風なナデシコに業を煮やしたのか、「やつちまえ！」的などこかで聞いたようなやられフラグのセリフとともに、彼女へと仲間とともに一斉に襲い掛かった。

1対5

普通ならば勝てない。しかしこの世界はレベルの大小で歴然たる差が生まれる。数の差も覆すほどの。が、彼女のレベルはそう高くないはず…どうするのか。

これはある意味チャンスだ。そう思いながら、俺は激突の瞬間を見逃すまいと、物影で注視していた。

が、一瞬で終わってしまった。

二人は互いの頭と頭をぶつけあわせられ、一人はひっくり返されて石畳に頭をぶつけ、一人は後頭部に肘撃ちを喰らい、一人は膝を崩されパチンと頭をたたかれた。

これらを、彼女は連中の間をするする縫いながら成し遂げてしまった。それは正に柔の極み、じっと見ていなければ、優雅に歩いているようにしか見えなかっただろう。

どさりどさりと、全員が意識を失い地へと倒れ伏す。誰一人として殺してはいないようだった。

倒れ伏す彼らの間で、ナデシコはぼんやりと突っ立っていた。何か

を考えている風にも見えるが、さて次は何をするのか

ぐるん

「っ！」

突然、彼女が俺の方を向いた。

慌てて背中を隠れていた壁に押し付けて、俺は彼女から視線を外す。
俺は暴れる心臓を押さえつけ

「こんばんは」

外した目線の先に居たのは、先ほど目線を外したはずの、三日月の
ように口を曲げたナデシコだった。

その後、何でもディヴィッツたちを何とかしたいということで、俺
達はギルドへとディヴィッツたちの事を報告した。元々問題を噂さ
れていたやつのことだ、何らかの処分が下るだろう。

そして、お話ししようと言つので、内緒話にうつってつげのニコ、バー、セカンド・ライフ、に連れてきたというわけだ。

(“解析”)

名前 ナデシコ

種族 人間

レベル 26

筋力 19

耐久力 15

魔力 15

抗魔力 11

感覚 18

スキル “解析”、“優秀”

こつそりとナデシコのステータスを盗み見るが、やはりそれほど高くはな

「レベルとはあくまでサポート。その人の地力が強ければ、レベルなんてあてにならないよ」

簡単に見透かされた。

「モスコー・ミュールと、プッシー・キャットです」

彼女に気圧される俺の前にさりげなくグラスを置いたのは、このバ

ーのマスター、空気の読める男レヴァンス。バーの名前から分かるように、彼も俺同様転生者だ。そして数少ない、自称天使に流されていない一人でもある。

俺は前の世界でもバーに行った事はなかったが、ここを見つけたときは驚きとともに安心するような気持ちになったものだ。

「それで、あなた誰。私に何か用？」

カクテルに口をつけたあと、ナデシコが口を開いた。

どうやら俺が転生者なことは気づいていないらしい。つまり、俺が特定されたのはつけていたからか。ならば、ここは嘘についてはぐらかすべきか。

「い、いや、あの村で見かけてからよ、つい目がいつて、ストーキングしてただけだ…」

つてこれもやばくねえか。

ほら彼女も汚物を見るような目で…見てない？

「あなたは、何？」

質問が、少し変わった。やはり見透かされている。どうやら俺を転生者だと気づいてはいないが、普通ではないことには気づいているらしい。

こうなったら、正直に話して味方にしよう…彼女は理性的なタイプの人間だ。落ち着いて話せば分かってくれるだろう。どちらにしろ、これ以上印象を悪くするのはやばい。

「あんだ、地球からのトリッパーだろ？俺はボックス、転生者だ」

こんばんはストーリーカー（後書き）

さてこれからはどうしよう。

じんばんは転生者（前書き）

連続投稿。はっちゃんけちゃんいましたね。

連続ということでは今回は短い？です。ご勘弁のほどを。…自分じゃ
わかんないんですね。

くんばんは転生者

(転、生、者)

普通ではないとは思っていたけど、まさか私達とは別口とはいえ同類とは思わなかった。おそらく、天使(仮)の仕業だろう。いったい何をさせようというのか? 『魔王』もいなければ、今度はあの世界からの転生者だ。それも『転生』ということはずっと前からここにいたということ……ああ、時間軸は世界移動においては意味がない、か。ということは今は『魔王』がもういない、もしくはまだいないということになるのか。いや? あるいは連中が準備期間として故意にずれた時間に送ったという可能性も……

この男、ボックスとやらから色々聞きだした方がいいか。

「最初から、話してもらおうかな」

「あ、ああ。」

俺は、普通の学生をしていたんだが

「

「へえ……自称天使がねえ……」

「ああ。俺は正直信じちゃいねえし、どうもあいつらは胡散臭い」

ボックスの言うとおり、どうもおかしい。わざわざ送り込んだトリッパーを消すとはいかなる理由か……。それも怨敵と思いつまめせると

は。私の知る限り、トリッパーはむしろ被害者だ。彼の死因はバス、そして私達がこちらに来る事になったきっかけも、何故か無理やり突っ込んできたバスだ。彼らによって、私達は道化にしたてあげられた。…傍観して楽しんでる？ それだけじゃないような気がする。どうにもずいぶんと手をかけているように感じられる。楽しむにしても、それは本来の目的のついでのようなものだろう。

「おい、それで、お前はどなんだよ？」

「ん？ ああ私？ 私はね、これこれしかじかくかくうまうまとこついうことだよ」

「なるほどな…って分かんねえよ。こんなときにネタやってんじやねえ」

「一度やってみたかったんだよね…まあいいや。私、というか私達はね」

「そつちも天使ってことかよ…」

「そついうことだね」

これで、私達の経緯は話し終わった。そしてもう一つ気になるのは、転生者たちの動向だ…私のことがばれればすぐに牙を剥いてくるだろう。しかし、この世界では名前は隠しづらい。目立たなくしようとしても、どうせいつかはばれてしまうだろう。…ならば、早いうちに連中の情報を入れて対策をたてる必要がある。

「あなた以外の転生者：天使に踊らされてる連中のことは、分かる？」

「もう十年ほどお前みたいな名前のやつはいなかったからな、あいつらも最近各地に散らばって冒険者やらなんやらをやってるぜ」

「…ちょっと待って。十年ほど前に、何かあったの？」

「…ああ。とある少数民族の暮らす集落に複数人の賊が侵入して、そこに暮らしてた人たちを皆殺しにしたらしい。表じゃ謎の集団ってことになってるけどよ…十中八九そいつらは俺同様転生者で間違いないねえ。なんせ、その集落に暮らしていた民はみな日本名だったって話だからな」

「間違いない、それだ」

「ああ？」

私以外に、ずれた時間軸に飛ばされた人たちがいたのだ。天使どもは「ランダム転送」と言っていた。しかし、それにも関わらず彼らは集落が形成できるほどの人数で飛ばされている…間違ってるって固まって転送されることで私以上に時間軸がずれてしまった…？ そして、それをもみ消すために刺客として転生者を送った……間違いはおそらくない。しかし、まだ足りない。転生者を、新しいものたちを送ってまで消すほどの理由があったのか？

連中の目的がはっきりしない以上、これ以上は無理か。

「だからよお、お前も気をつけるよ。連中、気づいたら十中八九お前を狙ってくるぜ。…いや、もう気づかれてる可能性もある」

「分かったけど…気づかれてるならどうしてまだ私に何もしてこないわけ？」

「その集落を襲ったとき、レベルが低いくせにめっぽう強いやつがいたらしいんだよな。確か…スキル‘刀神’持ちだったか。人質使つてなんとか殺したみたいだけどよ、それでもその前に何人かはやられたつてことで、それ以来連中は結構慎重なんだよ。…正直あいつら手段を選ばねえからキライなんだよな…そのくせ、『これは天註だ！』とか言つてやがんだぜ？ 気持ち悪いったらありやしねえ」

(ほんとに…対策考えないとやばいな…)

転生者は、敵だ。それも螺子が飛んでいるらしい。正直、最初に出会ったのがバックスだったのは幸運だったのだ。

「色々、情報回して欲しいんだけど」

「ん？ ああ、それなら」

すると、バックスはカウンターの方を向いてバーのマスターを呼んだ。マスターは仕事柄かさり気ない仕草で私達の方まで歩いてきた。

「なんですか？」

近くで見ると、なかなか渋いおじさんだ。バーテンダーのユニフォームがこの上なく似合っていて、オールバックの髪型までグッドテイストだ。そして声まで渋いときている。なるほどこれはナイスミドル。

「ああ、こいつが、情報が必要らしい。今じゃねえぜ？ そのうちって事だろ。おい、ナデシコ、だったか？ ここのマスターは俺同様転生者でな、情報にも通じてんのさ。まあ今回は紹介みたいなもんだ」

「それは願ってもない。はじめまして、ナデシコです」

「はは、これはご丁寧に…私はレヴァンスと申します、以後お見知りおきを、ナデシコ嬢」

ここに連れてきたのはこれを見越してのことか、それとも私が万が一敵対したときの保険か…そのあたりは分からないが、ボックスもなかなか抜け目がない。

握手で分かるがこのレヴァンス、ボックス以上にできる。おそらくレベルはボックスのほうが上なのだろうが、間違いなく地力ではレヴァンスのほうが上だ。

向こうも私のことがよく分かっているのか、私と目を合わせて、にっこりと笑う。…やりおるなお主。

「ありがとうございました。またのお越しを…」

話を終え、私とボックスはバー‘セカンド・ライフ’を出た。私に出されたものはノンアルコールだったので特にキテはいないのだが、ボックスの方は足が少しおぼつかないような気がする。まあ、アルコールを飲んだところで、有害物質を任意で分解できるので酔うこ

ともないのだが。∴それだとアルコール飲む意味がないか。

「∴大丈夫なの？」

「ん？ この足のことが。∴俺あーまあこんな風に身体にはくんだけどよ、頭の方ははつきりしてっから問題ねーよ」

「さいで」

身体にきているのは大丈夫と言えるのだろうか。私は野暮な言葉を飲み込んで、当たり前障りなく生返事を返した。

「そっぴやよう、連れの金髪の嬢ちゃんとか∴寝てんだろっけど、一人にしたいのかよ？ それに、いつも頭に乗っけてるピヨコもいねえじゃねえか」

ファナと、ピヨ介のことか。ファナは幸せそうに寝てたから放置しておいたし、万が一のために護衛としてピヨ介を置いてきてある。宿の中で火炎は使えないが、ピヨ介にはそれ以外にもできることはある。

「ピヨ介は、護衛に置いてきたよ」

「護衛って∴あのピヨコをかよ∴」

「別に戦わせるわけじゃないよ（宿じゃなかったら戦っけど）。ピヨ介はテレパシーを使えてね、私とならそれほど離れてない限り、連絡をとれるのさ」

「はぁん。そいつは便利だな」

そんなことを話しているうちに、いつの間にか宿の前まで戻ってきていた。ボックスの足取りはまだよろしくはなかったが、なるほど目つきはしっかりとしている。私は宿の前で一つ思い出して、ボックスに胡乱な視線を向けた。彼はその視線の理由がわからないのか首をかしげている。

「…そういえばボックスもここだっけ」

「ん？ ああ、そっだ」

「ストーカー」

「なあ！ ち、ちげーよ！ お、俺はお前の事が気になったからつけてただけで…」

「それを世間一般ではストーカーという」

「があああああああつ」

はいはい、夜は静かにしようね。

じんばんは転生者（後書き）

ところで、このストーリーでのナデシコの立ち位置は『最強』『トリックスター』です。いたずらをするわけではないですが、基本的に自分の楽しみのために動きます。

もしも他の人を主人公に据えて別視点にすると、もしかすると『悪い奴』『いけ好かない奴』に見えるかもしれませんね。

いつにちはダンジョン(前書き)

え… コレ誰デスカ？

みんなちはダンジョン

「あ、あのナデイさん？」

次の日、ギルドで掲示板を見てみると、どこかに行っていたファナが私に話しかけてきた。視線がこちらに飛んでいてなんだか怪しい。

「何？」

「昨日、このギルドでもめてた男の子がいましたよね？」

「うん。それがどうかしたの？」

「その子が、例の、死神出るダンジョンに行ったらしくて…まだ帰ってないらしいんです…」

「ふーん」

道にでも迷ってるんじゃないかな。うーん。リアルに人生という名の道に迷ってそうだなあ。いや、あの歳ならそこまでは行ってないか。

「ふーんって…心配になりませんか？ 助けに行く気になりませんか？」

「ならないね。自分で行ったってことは、覚悟ぐらいしてるんじゃないかなあ。冒険者してるぐらいなんだから、もう子供じゃないん

だし」

ぶっちゃけ無謀だけどねえ。初期レベルが高かったのか、レベル自体は高かったけど実力はまるでなかったし。あれは己が力を勘違いしたタイプかなあ。

「……子供、ですよ。まだまだ、自分で正確な判断ができないくらいなの……」

…

知らない子供の面倒見ていられるほど、私は暇ではないのだけど。特に少々忙しくなった今は… いや、待てよ？

「そんなことはどうでもいいよ」

「どうでもいいって…！ ナディさん！」

文句を言うファナに、言葉をかぶせながら私は続けた。掲示板に貼られている依頼の一枚に手を伸ばしながら。

「それより今日の予定だけど、今日は外で実戦の訓練するから」

「え…？」

そして、その紙をとりファナに渡した。

「場所は、この近くのダンジョンにしよう。受付に持ってってこの依頼を受けてきて」

ダンジョンのモンスターの、素材部位の調達依頼。おそらく、死神

が現れる以前の依頼だろう。貼っているのだから、まあ受ける事は出来ると思う。向こうがどう思うかは知らないけど。

「！ は、はいっ」

フアナは嬉しそうに紙を受け取って受付に駆けて行った。

はあ

私はその背中を見ながら、溜息をついた。

「なにやってるかなあ…私。これ絶対私のキャラじゃないよね…まあ、‘死神’とやらは気になってたし、メリットがないわけじゃないけど…なんだかなあ」

依頼は一応とることができた。受付の女性も少々渋ったらしいが、もぐるのは上層だけだからと説き伏せた。

それでいいのかギルド職員。こちらとしては都合はいいけど。

そのダンジョン、‘ソレスティの魔窟’というらしいが、はソレスティから歩いて三時間ほどのところにあるらしい。地図をついでにもらったので迷うことはないだろう。

私はフアナを抱えてダンジョンまでの道を高速で駆け抜けていく。何故って？ 暗くなったら帰りが面倒だしねえ。目指せ日帰り。

フアナは私の腕の中で目を白黒させている。この速度は彼女にとってはまだ未知の世界だろう。今のうちから慣れるのも悪くないので、

大して配慮はしていない。ピヨ介はといえば相変わらず私の頭にがっつりつかまっている。やっぱり痛くないんだよねえこれ。

今回の『実戦訓練』はファナと、ついでにピヨ介にやってもらう予定だ。最近私ばかりでピヨ介を戦わせてなかったし。

時速およそ60キロほどを維持して、10分ほどで例のダンジョンにたどり着いた。きっと、私が一人抱えて駆ける様は傍から見れば酷くシユールな光景だっただろう。

ついたダンジョンは‘魔窟’と呼ぶに相応しく、ここ‘ソレステイの魔窟’は鍾乳洞のようだった。しかしダンジョンとしての側面が大きく、内部は傾斜は少なく、まためりや地面で活動が阻害されることは少ないだろう。

「はあ…はあ…じ、ここですか…」

「そうみたいだね。それにしても、何で走ってきた私じゃなくてファナが疲れてるの？」

「あんな速度の中、ナデイさんの腕の中にも体力使うんですよ！ ナデイさんこそ、もしかしていくら運動しても疲れないうんじゃないですか？」

「…まさか」

確信をつかれるとは思わなかった。

「そうですよね…そんな人いるわけないですよね」

「そうそう。まあそれはともかく、本題に入ろうか」

「あ、はい」

私は話を少し切って、ダンジョンの方を見た。なるほど、全体的なレベルは低い。ダンジョンには宝箱があるらしいが、いるモンスターがこの程度では宝とやらもろくなものがないだろう。

しかし一つ、一つ厄介なのがあるのが分かる。やけにぼんやりしていて場所も分からないが、これが生き残りのいつていた『ゆらゆら』というやつだろうか。奴の特殊能力…？ どちらにしる、遭ったら私でも苦戦しそうだ…

「今回は、私は周囲警戒するだけだから。ファナと…ピヨたん？」

ピヨ！

で、モンスターは相手してね。無理そうだったら私がやるから」

「はい！」

少年は、‘ソレスティの魔窟’の中を進んでいた。彼には地図がなかったため、此処にたどり着く前に事実迷ってしまったのだ。そもそも、彼は育った村を飛び出してきたばかりで右も左も分からない。しかし、知らないからこそ無謀を無謀と知らず選択できたのだろうか。

初期レベル、最初に世界に与えられたレベルは、周りのものと比べ

るとかなり高かった。それが彼を冗長させてしまったのだろう。彼には子供はおろか村の大人でもかなわなかった。しかし、村のものは彼が冒険者になることを容認しなかった。村人たちは知っていたのだ、村で一番強くとも、それはまるで何の証明にもならないということ。しかし、子供である少年にそれを教え込む前に、少年は冒険者にさせてくれないことに不満をもって村を飛び出し、ソレステイに単身向かったのだ。彼は、気が急いでいたのだ。村人たちに対して育ててもらった恩はあれど、それでもそれを振り切ってきた。：冒険者になって、その恩を返したい、という気持ちも遭ったのかもしれないが、それでも彼が外の世界に出るには早すぎた。

早く、一流の冒険者になって、俺は…！

精神力、思考力、判断力、経験、彼には何もかもが足りない。なまじっか力を持ったせいで、彼はそれらをおろそかに、あるいは自身自身を過信してしまった。

‘死神’を倒せるなんて、さすがに俺でも思っではない。見るだけ、見るだけだ。

それすら無謀であること。彼はそれに気づかない、気づけない、気づこうとしない。

自分を馬鹿にした、臆病者の冒険者たちを見返すためか、自分を子供呼ばわりした、自分より少し年上ぐらいの少女への意趣返しか。とかく彼は、子供らしく意地っ張りで見栄っ張りで頑固だった。

中途のモンスターたちをずばずばと、軽く倒していけることも少年をさらに冗長させた。

楽勝じゃんか。これなら‘死神’ってやつもこの俺なら…！見て

ろよ腰抜けどもめ！ あの女にも‘死神’の鎌を見せびらかして、あの言葉を撤回させてやる！

そしてついに、雑魚ばかりだったその場へと、傲慢なるものの元へと絶対なる死が迫る。

「な、なんだよこいつ…」

闇から滲み出すようにずるりと、真つ黒いローブを来てフードをかぶった、形は二メートル程度の人型の、しかし間違いなくこれは化け物。

「これが、これが‘死神’だつてのか！？」

黒い渦を巻くような模様が大小で二つついた、白地の不気味な仮面ローブの隙間から黒い手が抜き出され、その手には巨大な死神の鎌

「ひ…っ」

いまだにその姿は揺らめきながら、しかしその圧倒的な死の気配は、傲慢な少年にすらも自身の死を感じさせた。

「あ、ああああ うわああああああああああああっ！
！」

遁走。彼にはもうそれしかない。恐怖で足が動かない？ ‘これ’はそんなレベルではない、もっと圧倒的な何かだ。少年は後ろも見ずに無我夢中で走り出した。

どれほど、走ったのか。道などまるで適当で、どちらに行けば出口なのかなど微塵も考えてはいられない。そしてこの逃走劇は唐突に終りを迎えた。

「み、道が、ない!？」

曲がった先にあつたのは、少し開けてはいるもののそこは紛れもなく袋小路。少年は、知らず知らずのうちに追い込まれていたのだ。後ろを見れば、相変わらずゆらりとうごめく、‘死神’の影。

実のところ、‘死神’はこの場へと、戦いやすいこの場へと少年を誘導していた。それはレアモンスターとしての‘死神’の習性であり、出遭った人にとっては最後のチャンスでもある。

が、少年は剣を握らなかつた。逃げ切れなかつた時点で、彼はもう諦めてしまったのだ。‘死神’はそれを見て戦わないのかと判断し、何の呵責もなくその巨大な鎌を振り上げた。

少年は膝をついて、その迫りくる死をぼんやりと眺めていた。

(何かのお話とかだったら、誰かが助けに来てくれるのかな…)

途端、涙が勝手に流れ出し、そしてその言葉は口を勝手に出てきた。

「助けて…」

死にたくない死にたくない死にたくない。まだ死にたくなんてない。

もうこんなことしない、大人のいうことはちゃんと聞く、もう他の人のことを馬鹿になんてしない、もっと、もっと強くなる、だからだから

「誰か助けてっ！」

そして、鎌は無情にも振り下ろされ、

「はいはい…っ」と

キィッ！

祈りが、届いたのか、それは少年を裂く前に誰かに弾かれる。

黒い髪をなびかせ、少年と‘死神’の間に立ち彼を守っていたのは、彼を子供と言った、そして彼が見返そうとしていた、旅人らしからぬ格好をした少女だった。

みんなちはダンジョン（後書き）

メリット、死神に会える。ファナ&ピヨ介の特訓。ダンジョンの見学。

一番は、死神、だったりします。次回はナデシコ無双かなあ…

さようなら死神 (前書き)

ど、どうしよう。無双させすぎたかな…

今回はナデシコの最強たる所以の能力が出てきます。能力というか特性というか。

夏休みだからって調子の上ってんじゃないかねえぞとか言わないでくださいお願いします。

さようなら死神

「なにやってるかなあ……私。これ絶対私のキャラじゃないよね……
ん、なんかデジヤヴ」

人の気配を頼りに来てみたものこのこは上層、まさかこんなところ
までこんなボスクラスが上ってくるとは思わなかった。しかもなん
だろうこの状況。

後ろには無謀な少年、目の前には濃密な死。本腰入れないと、まず
い。

「フアナ！」

「ナデイさん！？ わっ」

少年を片手でつかみ、離れたところにいるフアナへと投げ渡す。ピ
ヨ介も今はフアナの頭にいるので問題ないだろう。

私は『ホーリイター大喰らい』を硬質化させ受け止めていた鎌を、力任せに弾い
た。‘死神’はその反動で少し離れたところまで下がる。そして、

オ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

初めて、それが言葉を発した。まるで、地の底から響くような深い
叫び。そのあまりの不気味さに、フアナも少年も身をすくめる。し
かし、言葉にもならない雄たけびのようなものだったが、私には確
かに届いた。

歓喜。

私も同様だ。こんなのはホーンベア以来、しかしそれとは比べ物にならないほどの。もしかするとあれを使う事になるかも知れないが、この相手ならばいいのではないだろうかと思わせるほどの、身の毛のよだつ殺気の奔流。

堪らない、ああ堪らないさ。

私が言うには不誠実すぎる言葉ではあるが、あえて言わせてもらおう。

「さあ殺しあおう、‘死神’っ！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

ガギイイイイッン

鎌と、私の『^{ホーリイター}大喰らい』がぶつかり合う。そして妙な武器と武器との連結感。なんとなく分かる。この『^{ホーリイター}大喰らい』と‘死神’の鎌、同じものだ。それが分かると、この‘死神’に対してまで奇妙な親近感を感じるのだから不思議だ。そう、本気で、全力で殺しあいたいほどに！

「はあああっ」

既に『^{ホーリイター}大喰らい』は一回り大きくさせている。ただでさえリーチという面で大きく劣るのだ。‘死神’はこの自分の背丈ほどの巨大な鎌を自由自在に操っている。もしも『^{ホーリイター}大喰らい』が私の片手にしかなかったら、私は既に斬られているだろう。さらにこの‘死神’、武器のとり回しだけでなく自身の速度も相当なものだ。しかも、あの生き残りの言っていた『ゆるらゆる』だが、比喩かと思えば、文字通り‘死神’の身体は揺らめいている。まるでこちらの焦点が少しあっていないかのように。それゆえ奴の動きがいささか捉えにくいのだ。

オオオ 【怨】！

‘死神’の呪文^{ワード}とともに突如私と‘死神’の間に現れる火球。

「！ちいっ」

それを、瞬間的にさらに巨大化させた『^{ホーリイター}大喰らい』で斬り散らす。

そう、捉えにくい上にこの‘死神’、魔法まで使ってくるのだ。

オオオオオオオオツ！

若干体勢の崩れた私に鎌を振り下ろす‘死神’。が、私は巨大化を解除し指をそれぞれ伸ばしそれらを床にさして体勢をかためている。さらにもう一方の手はフリーだ。

ガキイーンツ！

またもや鳴り響くけたたましい金属音。‘死神’の鎌はまだまだ私には届かない。

私は突き刺していた指を繰って後方へ身体を飛ばし、‘死神’から距離を取った。‘死神’も攻めあぐねているのか、私の動向を見守っている。

「 “解析” 」

激戦でする暇がなかったが、一応これをやっておいて損はないだろう。しかし

「 つ！？ 」

unknown

「 はは…さすがにこれは初めてだよ… 」

今までレベル差でステータスを全て隠されたことはあったものの、ここまで何も分からなかったのは初めてだ。
おそらく何かあるはず。スキルか、種族特性か…？

オ【怨】！

「！」

こちらの隙を見取ったのか、再度魔法。今度は炎、じゃない…空気
の揺らぎ？ 衝撃波か！

パアアアアーン！

火炎のとき以上に巨大化させた左手を壁に、これを耐える。まだまだ魔力の仕組みが未知なせいであまりいじる事はできないため、実質私の魔力の総量はそれほど高くはない。『大喰らい』^{ホルイーター}による消費量も、馬鹿みたいに大きくしなれば大して喰われることはないのだが、こう連続で使っているとは思えない。

「っしまった！」

突然、背後から振るわれる‘死神’の鎌。

自分の左手によって視界が塞がれ、‘死神’の接近を許してしまったのだ。まったく、ファナに敵から目を離すなど言ったのは誰だったか…

が、私とて視覚だけで相手を捉えているわけではない。奴の気配は虚ろで捉えにくい、それでもここまで接近されて気づかない道理はない！

「ふっ」

横から振るわれた鎌を右手で上方へと弾く。そして左手を元に戻し、若干隙が出来たのを見逃さず‘死神’へと向けた。

「くらえっ」

オオオオッ

硬質化した指を伸ばし、高速の刺突。

が、奴は鎌が弾かれた時点で既に回避行動をとっていた。読んでいたとでもいうのだろうか、こいつは相当に戦いなれている。

オオオオオオオ

そして繰り出される鎌による数々の斬撃。私は両手をフルに使いその全てを捌いていく。が、‘死神’は既に『詰み』を開始していたことに私は気づかなかった。

(…！ だんだん、速くなってきた！？)

まだ本気でもなかったとでも言うのか、‘死神’の斬撃は一撃ごとに加速してゆく。私も情報の処理速度を加速させながらそれらに対処していった。そんなはずはないのに、身体が筋肉がぎしぎしいうかのような、それほどの速度の中、それでも‘死神’の鎌は私に届かない。

オオツ！

そして、その瞬間が来た。

業を煮やしたのか、‘死神’は一際速く一撃をふるった。そしてその一撃は私にはチャンス。一際速く、そして一際大振りな一撃だったのだ。防ぐか、避けるか、どちらにしる、次の行動まで間があるはず。

そして、私はそれを避けて必殺の一撃を加えることにした。

今っ

しかし、それはすぐに断念させられる。見切ったと思った次の瞬間、それに気づく。

(斬撃が、二つ!?)

同時に振るわれた、別方向からの二つの斬撃。これでは避けられない。仕方なく私は両手でそれらを防ぐ事にした。

ガキイイイイッン

もう幾度も聞いた、武器と武器のぶつかる音。しかし、今回は少し違った。二つの武器と、二つの武器がぶつかる音。そして

ずぶっ

「!?!?!?!?!?」

鎌が肉を裂き突き刺さる音。

さらに三つ目の方向から迫っていた三つ目の斬撃が私の腹を貫通していた。

どこその通り魔に刺された時以来の感覚。刺された場所すら大体同じなのかなぜか滑稽で笑える。‘死神’は私の身体ごと鎌を持ち上げた。

「あああああああああつ!?!」

誰かの悲鳴が聞こえる。きつとファナだ。小さいが、ピヨ介の声も聞こえる。さて、どうしてくれようか。あの時とは違いのんきな頭で私が考えていると、

オ【怨】!

パアアアッ

衝撃波。今度は防ぎようもないのでまともに喰らう。身体が持つていかれると同時にぶぢぶぢと肉を切れきながら鎌が離れ、血を撒き散らしながら私は凄まじいスピードで壁まで飛んで行き、壁と衝突するとともに壁が崩れて、私の身体はその瓦礫の中に埋もれてしまった。

「ああ… あああああ」

ピヨー! ピヨー!

ファナとピヨ介にとっては最強の象徴、ナデシコが、目の前で腹部を切れ裂かれて負けた。その事実をすぐに受け入れることなどは出来なかった。

ナデシコを吹き飛ばした死の塊、‘死神’が彼女達の方を向いた。そして、それに少し異変が起きる。

オオオオオ

ギ ギギギ

ガガガガ

ずるりと、一つだけだった影が、三つに別れたのだ。

死神、アム^{II}デス^{II}ハボリウム。

仮に別名をつけるとすれば三つ子の死神である。三体でありながらアム^{II}デス^{II}ハボリウムという単体種で、普段は一体のみが表に出ており二体はその一体に重なる形で隠れているのだが、非常時には先のように部分的に身体を出したり、別れたりするのだ。さらに一体倒したところで残り二体を倒さねば間を置いて回復し、それが不死身に見えた理由である。

個々の戦闘力はランクづけをするならA上位程度のものだが、所有するスキル、装備品、そしてこの特性から総合的な危険度はSSにも値する真正正銘の化け物である。

「ナディさん！ ナディさん！」

心中を支配するのは絶望。ナデシコが敵わなかったモンスターに自

分達が敵うわけがない。それも、今は三体に増えてしまったのだ。まさに、どうあがいても絶望。

‘死神’に、殺しに呵責などあるわけがない。ゆえに命乞いなど無意味。

少年も、一度は助かったものの再度訪れた死の気配に、心身ともに疲労しきっていた。ファナとともに身を縮めていることしか出来ない。

ずるり ずるりと、死神が、死が迫る。その動きには、さきほどの激戦における疲労などはかけらもなかった。

しかし。しかしそれでもファナは縊らずにはいられなかった。

自分を絶望から救い上げたナデシコに。自らの最強の象徴に。

「ナデイさん！」

がらりと、瓦礫が動く。彼女が再び、しかも無傷で立ち上がる。いつから自分はこんなお人よしになったのかと首をかしげながら。

「そんな叫ばなくても聞こえてるよ、ファナ。それとついでだから言っとくけど、誰かを助けるといっことは他の何かをすり減らすということ。それが自分か他人かは知らないけど、どうでもいいものばかり掬ってたら、本当に大切なものがいつか零れ落ちてしまっつよ？」

今回は死なない私だったからよかったものを。
ナデシコはその言葉を飲み込んで、ファナを見つめた。ファナは目に涙を浮かべて仕切りに頷く。

オオオ

ギギ

ガガガ

起き上がったナデシコに驚いた三体の‘死神’。ハボリユムは声を発しながら、しかし油断なくファナたちから狙いを外しナデシコの方へと向いた。

「ああ、待たせてごめんね。それと、まさか本当にこれを使うことになるとは思わなかった」

その言葉とともに、がらりとナデシコの後ろの瓦礫がまた崩れる。

「これは私というより『私』の領分だからあまり使いたくなくなかったんだけど、まあ」

「いいよね？ そっちも三体なんだし、これで」

瓦礫が崩れた後、そこにいたのは

「『三対三だ』」

顔かたち、着ている服まで全て同じ、三人のナデシコだった。

「「「さあ、第二ラウンドといこうか」「」」

そうナデシコたちが言った途端、目の前の空間がぐにやりと歪む。三人のうち一人が、そこに高速の手刀を振るった。すると、ごうと周辺の空気が渦巻き、それらは一つの形を形成する。

それは刃。ナデシコの手刀とともに、空気の塊でできた刃は宙を凄まじいスピードで走り、ハボリウムへとその身を切り裂かんと迫る。

【怨】 【魏】 【餓】 ！

しかし、ハボリウムとあろうものがただ切裂かれるはずもない。呪^ド文とともに彼らの目前に透明な防御壁が現れ、空刃を防ぎ、散らす。二人のナデシコも既に動いていた。二人は片方の手を巨大化させ、ハボリウムたちを一撃で葬ろうというのだ。防御壁を張っているように、それごと切り裂けばいい。二人のナデシコがハボリウムたちへと突進する。

それに対しハボリウムたちは、防御壁をすぐに解いた。三対二、今の状況はそれである。ならば、迎撃したほうがいい、それがハボリウムたちの判断である。

その判断は正しい。が、それぐらいナデシコとて分かっている。三つの鎌が、高速で二人のナデシコへと振るわれた。突進中のこの状態で、普通に避けることもまともに防ぐことも出来ようはずがな

い。そのはずだった。

しかし、それら鎌が届く前にナデシコたちの姿が掻き消える。そして、次に現れたのはハボリウムたちの背後。高速移動ではなく瞬間移動。これが高速戦闘下でのナデシコの奇策だった。

二人のナデシコは同時に、隙だらけのハボリウムの背中へと、巨大化させていた『大喰らい』^{ホルイーター}を思いっきり振るった。

ギギギギイイイイツ！

ガアアアアアツ！

あれほどの猛威を振るっていたハボリウムが、『大喰らい』^{ホルイーター}の一撃で呆気なく霧散してゆく。しかし、それも当然か。『大喰らい』^{ホルイーター}は『死神』の鎌に通じる武器。むしろ『死神』を葬るには十分すぎる。

オオオオオオオオオツ

最後に残った一体。それは、くしくも最初にナデシコと戦った一体だった。

そして、そのハボリウムに三方向からの同時の攻撃が飛ぶ。

オオオオオオオオオオオツ

それは、ナデシコからのハボリウムへの意趣返しか。どちらにしろ、ハボリウムに避ける術などないし、ナデシコのように戻ってくることもできない。

無情に、まさに悪魔の手のような巨大な黒い手が二本、ハボリウム

へと振り下ろされる。

ハボリユムの振るった鎌はそのうちのひとつだけを防ぎ、彼の身体は残り二本の黒い手にずたずたに引き裂かれた。

「悪いけど、私も負けるわけにはいかなくてね」

誰かを殺すときに、決して謝らないナデシコが言った、遠まわしなれど謝罪の言葉。
そして、

オ オオオオオ……

消え行くハボリユムの、仮面の向こうから響く深い声は、どこか満
足そうであった。

さようなら死神（後書き）

分身 空間干渉 瞬間移動 って感じですか。まあ空間干渉と瞬間移動はある意味同じものですけど。因みに、オリジナル以外の『大喰らい』はナデシコから離れたら消えちゃいます。影のようなものですし。

追記

ところで、いい加減（仮）になってる題名を決定しようと思います。明日あたりに変わるかもしれないので、あしからず。

いんばんは、死神、殺し（前書き）

題名変えましたー

どうでしょう？ 不満等意見も受け付けております。

「こんばんは、死神、殺し」

「おい、ナデシコ　ヒヨコを頭に乗せた奴知らないか？」

「あ？　ああ…昨日のとんでもないのか…」

ボックスは日が沈みそうな夕方ごろ、ギルドでナデシコのことを聞きまわっていた。アルコールは予想以上に効いていたらしく、昼過ぎまで寝込んでいたのだ。起きてみれば当然ながらナデシコはおらず、慌てて捜していたのだ。町中を駆け、ギルドのことに先ほどようやく気づいたのである。既に追いかける必要もないのだが、何故か相変わらず彼女のことは気になっていた。

「知ってるのか？」

「ああ、確か朝方ギルドに来て、『ソレスティの魔窟』の依頼を受けてさっさと出てったぜ」

「おいおいおい…『ソレスティの魔窟』っていやあ今は例の『死神』いるってんで、S以上のパーティが来るまで放置ってことになっ
てんじゃなかったのかよ」

「あんだ、あいつの知りあいなのか　い、いや、知らねえよ…そんなことは、受付に聞いてくれよ…」

「ちっ」

冒険者はボックスの突然増した威圧に身をすくませながら、受付の

ほうを指差した。

この冒険者として実はBランクのやり手の冒険者なのだが、最近なつたばかりな上、バックスはBでありながらレベルはSに近いAという規格外である。そんなバックスに、新人Bランクが敵うはずもない。

バックスは冒険者から視線を外し、どすどす足音を鳴らしながらと受付へと向かった。それを見た受付嬢も思わず営業スマイルを引きつらせる。

「おい、今日『ソレスティの魔窟』の依頼を受領したらしいじゃねえか。どういうことだ？」

「あ、あの、えーと…だ、だって、上層だけにしか行かないって言うし…」

受付嬢はおろおろしながら、普段の落ち着いた様子はどこへやら切れ切れに言い訳をはじめた。それにバックスは頭を抱えながら言い募る。

「『死神』は、絶対にダンジョンを出ない代わりに、ダンジョン内では神出鬼没にどこにでも出現するのは常識だろうが…確かに下層の方に居やすい傾向はあるが、上層だけだから、の理由にはならねえだろ…」

「う、うう、だって、あ、あの人の楽しそうな目に見つめられてたら、な、なんだか断れなくて…」

「……………」

それなら仕方ない。

そう思ってしまったボックスを誰が責められよう。ナデシコはいつも楽しそうに笑っているが、その顔にも起伏というものがある。

威圧感が込められたときの雰囲気は、熟練の冒険者であるはずの自分すら身を震わせてしまう。その気あたりを受けるのがただの受付であつたのならば、その結果はまさに言うに及ばず。

「はあ……まあ、あいつなら大丈夫、か？」

ボックスは受付にもたれ、頭を抱えた。受付嬢も眉尻を下げて、そんなボックスを見つめた。

自分よりもずっと強い。それは分かっている。本気で戦っているとこころは見た事はないが、それでもなんとなく感じた力は自分よりも上だった。

が、何故そこまで強い？ そう思わずにもいられない。この世界はレベルというものによって、ただの人間であつても超人になれる可能性を持っている。言わば、高いレベルがあつてようやく人間は一段階上へと昇れるのだ。

なるほどナデシコが言っていたようにレベルより地力、というものもあるだろう。実際、レヴァンスはボックスよりレベルが低いながら、ボックスはレヴァンスに勝った事はなかった。

しかし、しかしだ。それにも限度があるう。ナデシコを“解析”で調べたとき、ステータスはレベル26で、筋力のみの特化されているとかそういうこともなかった。それならば、何故自分よりも強いのか？ ボックスのレベルは既に88だ。地力で埋めるには大き

すぎる差であるはず。なのに、ナデシコの力はバックスを大きく凌駕する。これは、矛盾だ。

が、この矛盾には前提条件に抜け道がある。つまり

(ナデシコは元から人間じゃない…?)

「こんばんは？」

「ぎゃあああああああつ!？」

ほんと、そこまで考えたところで突然肩を叩かれた。いつかの再現のような、しかし今度はピンポイントな考え事をしていたため、悲鳴が飛び出してしまった。また暴れる心臓を押さえつけながら、バックスは慌てて後ろを向いた。

やはり、そこにいたのはナデシコだった。いつもと変わらない笑顔を浮かべながら、いや、少し顔をしかめながら耳を押さえている。

「そんな大声出さなくてもいいじゃん…私はただでさえ耳がいいんだから…」

「わ、わりい…って、じゃあ驚かすなよ!」

驚かすつもりはなかったんだけど。ぶつぶつ言っているナデシコを、思わずバックスはじっと見つめた。…断じて見とれていたわけではなく。

彼女の頭には相変わらずヒヨコがいて、ナデシコの言葉に対してピヨピヨと返事をしている。そして、何故か以前以上に彼女に密着している金髪の少女。さらに、その少女の反対側には見覚えのない二人よりも少し小さな少年がいて、こちらもナデシコにぴたりとくっついている。

それを少し忌々しげに確認して、しかしバックスの視線は本題へと移った。そう、目が行ったのはこちらが原因である。

ナデシコの肩に担がれている、彼女の背丈より大きな禍々しい鎌。その鎌が示すところは、それは、つまり、そういうことなのだろう。

ギルドに集まっていた冒険者たちの間でも、その鎌を持ったナデシコが入ってきたときからざわめきが加速していた。無論その話題はナデシコと鎌である。それぞれ話しながら冒険者同士で目を合わせているが、たびたびチラチラとナデシコと鎌へと視線が飛んでいる。

‘死神’は倒されたとき、持っていた鎌を必ず残して消え、さらにその‘死神’の位階に応じて魔導具や恩恵を、倒したものと与える。

つまり、鎌は‘死神’殺しの証なのだ。鎌が‘死神’の象徴とも言われ、鎌そのものも‘死神’同様濃い空気を纏っているため、偽物などを用意するのは不可能。

その上。

「 解析 ”」

名前 ナデシコ

種族 人間

レベル 62

筋力 48

耐久力 29

魔力 42

抗魔力 28

感覚 39

スキル “ 解析 L V ・ 3 ” 、 “ 天才 ” 、 “ 死神 L V ・ 3 ”

昨日は26だったはずのレベルはありえないほどに跳ね上がり、スキルのレベルも変化している。おそらくは、これが恩恵とやらなのだろう。

そして何よりも、スキル“死神”。全ての‘死神’が持つ殺しの特権であり、このスキルを持つものが殺されたとき、スキルは殺したものにへと受け継がれる。

もう疑いようがない。ナデシコは殺ってきたのだ、あのAランクパ―ティを壊滅させた‘死神’を、おそらく一人で。

「 えーと 」

「ひっ」

ごとりと無造作に、ナデシコが受付に長大な鎌を置いた。受付嬢はさっとそれから身を引く。バックスはその様子に呆れながら頭を抱えてナデシコをたしなめた。

「もちつと気い使つてやれよ……」

「？ 何を？」

本気で分かっている風には首をかしげるナデシコ。その様子にさらに頭を痛めながら、バックスは受付に置かれた鎌をとった。

持つとさらに分かる禍々しい気配。それに溜息をつきながら、バックスはナデシコに聞いた。

「つかお前、何しに来たんだ…？」

「何しにつて、『死神』の鎌って確かギルドで高値で売れるでしょう？ だから売りに来たんだけど」

その余りに軽い様に、幾度目かの、そして最大級の溜息を漏らした。いつか本当に幸せが出て行くのではないか、というほどの空気がバックスの口から吐き出される。

確かに『死神』の鎌は相当な高値となる。武器として扱える者は一握りしかいないが、『死神』の鎌は素材として非常に優秀なのだ。加工がしやすい、そういう意味ではないが、人では理解のできないような金属、それで構築されている鎌は溶かされ他の武器に造り変えられる。その武器はとも頑丈で、時折鎌の時に持っていた特性を残していたり、優秀な能力を宿したりと非常に強力な武器となる

のだ。

しかも今回の鎌は中でも特級の代物、軽々しく扱っていいようなものではないのだが……呑気なナデシコの顔を見てみると、バックスの緊張感も抜けてゆく。

ナデシコの雰囲気は苛烈な時もあるが基本的には穏やかである方が多く、見るものを安心させる。あまり分かっていなさそうなナデシコの今の顔は、そういうことだ。

「確かにギルドは買い取るけどよ、『死神』の鎌はそう軽々しく取引できるようなもんじゃねえんだぜ？ 特に、その鎌はな」

「ふーん。で、高いの？ これ」

「お前な……今のお前、なんか馬鹿っぽいぞ……」

結局、鎌は金貨十二枚で取引された。本当はもっと高くなるのだが、ナデシコが『めんどくさい』と主張したためにこの値で手が打たれたのだ。バックスが『安すぎる！』と文句を言ったものの、自分のことでもなく、本人がいいのならいいかということ引き下がった。

金貨を受け取ったナデシコは本来の依頼の素材部位を提出した後、変わらずくっついていて二人を引き連れて去っていった。

バックスは、まるで荒らしてはいないのに嵐のごとく来て去って行ったナデシコに半ば呆れていた。なにせ、ギルドの中は騒然たる有様なのである。

やれあり得ないだの、やれ新しい『死神』殺しだの、様々な言葉が

飛び交う。受付嬢さえも、『あーっ、死神』討伐依頼のこと忘れてたーどうしようー』と騒いでいる。

「あいつも、そのうち二つ名で呼ばれることになんのか…」

二つ名は最初は冒険者同士の情報交換で暗号のごとく使われていたが、今では一般にまで広がってしまった慣習のようなものだ。普通はA上位あたりからつけられ始めるものだが、高位の竜だったり、死神、だったりと強力なモンスターを倒したものは、徐々にその話は広まり、『殺しの』などと呼ばれるようになる。

つまり、有名になるということだ。

「大丈夫なのかね…」

ばれることはもう諦め、気狂い転生者連中に対し力を示しけん制にするつもりなのか。

どちらにしろ、連中の情報を集めてやらないとな。

そう考え、ざわめくギルドを後にする。

いつの間にかナデシコのことを心配しているボックスであった。

「じんばんは、死神、殺し（後書き）」

ボックスはナデシコのことをどう思ってるのでしょうね？

作者にもよく分かりません。書いてたらはっきりしてくるかも。

さよなら少年（前書き）

題名悩みました。結局これで妥協な感じに。

前半ですがまたもやセンチメンタルな空気が。後半のほづが長いですけど。

ナデシコは合理的なものの考え方をしますが、だから考え込むことになるんですかね。

さよなら少年

「それで、君はこれからどうするの？ ラルド」

ソレスティの一角にある喫茶。そこで私達はケーキを注文して食べていた。向こうのものに味は劣るため、私としては少々不満なのがファナと少年はご満悦らしい。

ケーキの定番、ショートケーキのイチゴをつつきながら、私はダンジョンで助けてからずっと私に引っ付いていた少年、ラルドに尋ねた。

「俺は…一度村に帰ります。何も言わず、出てきましたから」

そう落ち着いて言うラルドは、初めて会った時とはずいぶん雰囲気が変わっていた。最初は外見通りだったというのに、今はもう少し大人に見える。男子三日会わざれば刮目せよ、だろうか。一日しか経ってないけど。私を見る目もかなり変わっている気がする。私この子に何かしたっけ？ いや、一応助けたんだけど、それだけだよ。

「村から出てきたっていうと、家出みたいなもの？」

「そう、かも。俺、小さい頃に拾われて村長のところで育てられてたんですけど、どうしても冒険者になりたくて…」

そこでラルドは少しうつむいた。ファナがどうしたのと聞くと、ぽつぽつとこう語った。

「俺、昔から力だけは周りの人より強かったんです。それで、色々

と勘違いしてた。大人たちのことも、俺より弱いのになんで『ラルドにはまだ早い』なんて言うのか、って文句ばかり言っていました。でも、今日自分の行動のせいで死にかけて、それから助けてくれたナデイさんを見てなんだか分かった気がするんです。だから、これからは村のみんなと真剣に向きあって話せます。まずは、謝ってからですけど……」

私はナデシコなんだけどな。まあ呼び名ぐらいなんでもいいんだけど。

しかしファナの時も思ったが、この子達はいったい私のどこに強さを見出しているのだろうか。私とて人より力がある自覚は十分にあるが、どうも力が強いという意味ではないらしい。

「そうだよ！ ナデイさんは強くて優しいんだよ！ 私の時もね」

ピヨピヨ

私同様ショートケーキを食べていたファナが、ラルドの話に乗っかり私との出会いの時の事を語り始めた。記憶から削除されているのか故意なのか、私が盗賊を皆殺しにしたことはうまく省かれている。珍しく私の頭から降りたピヨ介も、こくこく頷きながら私から奪ったイチゴを食んでいる。

特に取り返すつもりもない私は、しかしピヨ介の頭をぐりぐり指で撫でながら首をかしげた。

はて、私が優しいとはなんだろう。私は甘くはないつもりだが、別に甘い＝優しいというわけではないのでこれは直結しない。今まで私が優しさを見せる要素はあったらどうか、いや無い、私は私のメリットのみで行動してきたのだから。他者に対していたずらに危害を加えるつもりこそないが、真面目に生きるものたちから見れば私

はこの上なく不愉快な存在ではないだろうか？

たとえば、‘死神’の時もであったが、『殺しあい』。死なない私が言うには不誠実すぎる言葉。いくら殺しても死なない私と相對する相手にしてみれば、それは『一方的な殺戮』だ。：むしろ、だからこそだろうか、私がぎりぎりを出し切る事を求め、死を身近に感じる事を望む。だからこそ、私は分体や空間干渉もあまり使うことはなくこの身体のみで戦ってきたのだろう。きっと、私は一方的であることを死を感じることで紛らわしているのだと思う。

別に、私は死なないから死にたいと思っっているわけでは決してない。そうでなければ、私がここに在る意味はまるでなくなってしまう。

ここに在る時にしかできない様々なことは、私をいつも楽しませる。

戦う、食べる、聞く、話す、見る。

こうしてファナやラルド、ついでにピヨ介が楽しそうに話し合っている光景を見る事。それも、とても楽しい。だから二人を助けたことは、私にとってはきつとメリットとなるのだろう。

門の前で、私とファナは門に向かうラルドへと手を振った。振り返りこちらに手を振るラルドの手には、今までなかった腕輪があった。さきほど私がなくなく渡した腕輪だ。

白地に、青い線が一本入っているもので、その色合い自体は少し気に入っていた。

別に、腕輪には何か特別な力があるというわけではない。ダンジョンでラルドのところに行く前に宝箱を見つけ、ついつい誘惑に負けてふらふらと開けたその中に入っていたものだ。ダンジョンのものということで普通の腕輪ではないが、そこは初級のダンジョンにあった宝箱の中身である。上で言ったように『特別』といえるほどの力ではない。精々微量の魔力を吸って所有者の防御力を上げるものだが、本当に微量で吸われた方はまず気づかないし、ステータスに影響するほどのものではない。正に、『枯れ木も山の賑わい』といえる装備品である。

しかし、ラルドはとても喜んでいたので私は少し後ろめたかった。

そして、ラルドは『今よりずっと強くなったら、会いに行きます。渡したい物もありますし』とか言って去っていった。何かのフラグのような気がするのは私の気のせいだろうか。

「行っちゃいましたね…」

「そだね」

「心配なんですか？ ラルド君のこと」

「何で？」

「いえ、やけに言葉少なですし…腕輪あげたりしてましたし」

「…最初に会った時のラルドはともかく、今のラルドはフアナにどこか似てるし」

「え、それって私のことも心配してくれてるってことですよね？」

「何笑ってるの…最初に言ったじゃん、私は強い人間が好きだって」

「ありがとうございます。私も、ナディさんのこと好きですよ？」

「…ありがとう」

フアナはとても嬉しそうに笑っていた。

大切に思っている人の幸せそうな笑顔を見られることは、とても幸せなことだと、私は思う。

用事があると言って、私はフアナをピヨ介に任せて一人バー、セカンド・ライフ、まで来ていた。

転生者連中のことを聞きに来たわけではなく、それ以外に早めに詳しく知っておきたい事があったのだ。

「こんばんはー」

「おや、ナデシコ嬢でしたか。いらっしやい」

「…昨日も思ったんだけど、何で他に客いないの？」

店内ではレヴァンスが静かにグラスを拭いているが、他には誰もいない。これでこのバーは成り立っていているのだろうか？

「俺が、貸切にしてもらってんだ」

と、意識的に無視していたボックスが手を振って私にそう言った。なんとなく彼は苛めたくなる。

「あれ、いたのボックス」

「いたよ…つか気づいてただろ」

「それにしてもいいの？ 一人のためにこんな貸しきり状態にさせといて。しかも二日連続じゃないの？」

「構いませんよ。バーの方は、不定期に休みにしているんです」

「ここは色々と特殊でな、知る人ぞ知るってやつかね？ 特定の層にはそのレア度もあつて結構人気なんだが。どちらかといえば情報屋の方が本懐らしいんだよな、レヴァンスの場合。情報網は謎だが」

「まあ、そんなところです」

「ふーん。まあいいや、とにかくなんか頂戴」

繁盛していようが閑散としていようが私には関係ない。いや、むしろ閑散としている方が内緒話をする側としては都合がいいのか。今日は内緒話をしに来たわけでもないが。

「今日はオレンジジュースにでもしましょうか。とはいっても、『オレンジのようなもの』ですけどね」

あれ。ってことはもしかしてショートケーキに乗っていたイチゴも『イチゴのようなもの』だったんだろうか。イチゴと同じ味だったんだけど。

「それで、今日は何しに来たんだ？」

「ああ、そうだった。今日は『魔法』について色々と聞きたくて」

‘死神’の使った『魔法』。戦闘下での研ぎ澄まされた感覚は冷静な対処をしたものの、実は魔法を見るのはあれが初めてだった。

そして‘死神’を倒した後フアナに色々と聞かれたのだが、とりあえず魔法だと答えてみると彼女は納得したのだ。どうやらこの世界の魔法は、分体生成やら瞬間移動やら空刃やらができるらしい。

「『魔法』ですか…『魔法』の、どんなことが知りたいのですか？」

「正直、最初から全部知りたいのだけど」

「分かりました。それでは、分かりやすく説明しましょう」

『魔法』。

『可能であればどんなことでも出来る』という妙な格言で知られるこの世界の術である。

最低限発動に必要なものは‘魔力’と‘イメージ’で、それに付随するかたちで‘適性’や‘呪文’、‘理論’などがある。魔法学校というものもあるが、ここはあくまで‘理論’や魔力の練り方を教

える場所で、必ずしも魔法を使うのに必要な過程ではない。この世界の魔法においては‘理論’とはあくまで‘イメージ’の助けになる程度のもだからだ。‘呪文’にしても同様で、本人が一番イメージしやすいものを勝手に唱えるかたちになるため、‘呪文’は正に無限にあるといつてよい。仮に唱える‘呪文’の文節が同じになったところで、例えば【火炎】、想像に差があれば、火の渦、あるいは火球、あるいは火柱と現象すら千差万別だ。‘適性’によつて魔法の優劣は決まるが、しかし魔力さえあれば實質誰でも魔法を使うことは可能だ。

が、効率を考えると実際は魔法を使うより地力で動いたほうがよい時も多い。例えば一メートル先に瞬間移動するぐらいならば、歩いた方が手っ取り早い。百メートル先に瞬間移動できればその限りではないが、それほどのことを誰でもできるわけではない。

結局そういうイメージがくることで、魔法は誰でも扱える術にも関わらず、魔法を使うのは才能のあるもの、魔法学校に行っているものという考え方が一般的には広がっている。

「かく言う俺も適性がなくてな、魔力はあるが魔法は使わん。剣振つてモンスター斬ったほうがぶっちゃけ早いからな。しかしな、なんでも戦っているうちに気分が高揚したりするとより強い自分を無意識下でイメージするらしいが、そのイメージが魔力による身体強化として現れることもあるって話でもあるぜ。俺もそれで、アドレナリン分泌かとか馬鹿なこと思ってたこともあった。体内分泌物だけでそこまで強くなるかつての」

「ふうんなるほど…それでか」

フアナが魔法の一言で納得した理由は分かったが、この説明で他の疑問も氷解した。それは私が‘死神’に使った空刃。実はあれ、私にとつては予想外だったのだ。

真空空間を構え、そこに高速で空気を送る事で一定方向に向けられた空気の流れをつくり、さらに空間干渉で調整しながら、‘死神’に飛ばし怯ませることが最初のプランだったのだが、それは途中で頓挫した。私が手刀を振るったあたりから、勝手に空気が渦巻いて空刃を形成したのだ。あの時はその突然の現象に驚きながらも利用させてもらったが、今覚えればあれは魔法に準ずるものだったのだろう。魔法をよく理解していなかった私の暴走のようなものだったのかも知れないが、私はバックス同様無意識下であんなものをイメージしていたのだろう。面倒なところを私自身が負担したためか、使用された魔力は微々たるもので空刃をつくった時はそのことには気づかなかった。

あるいは、私には魔法の適性があるのかも知れない。

「あなたのその手袋。それは魔導具ですよ？ なかなか上等なものようですが…魔導具もある意味魔法を体現しているんですよ」

「それは…ああ、これもそういえば私の魔力を吸って私のイメージ通りにその形態を変えるんだっけ」

「魔導具は、その能力もですが魔力を吸う限界度、魔力量に対する能力の発現率などでランク分けされているんですよ。そういえば、この世界のものは大抵ランク分けされていますね。世界システムの法則でしょうか？」

(…“解析”　　うわあ)

名前 『ホルイーター大喰らい』

ランク SS

前身は‘死神’の鎌、『ハアル・ゼブル気高き者の腕』。所有者の魔力を吸い、任意の形、形質に変化する。ただし、『手』の形から大きく逸脱する事は無い。半永久的に魔力を吸うことが可能。魔力さえあれば変形限界は無い。

‘死神’を倒して手に入れた“解析 L V . 3”だが、これはわりととんでもない。レベル差に関係なく情報を閲覧でき、スキルの詳しい説明も確認することが出来る。その上、このように道具ですら解析できるようになっている。

因みに、おかしな効果音とともに手に入れた新しいスキルを確かめるとこんな風だった。

“死神 L V . 3”

システム世界より与えられた殺しの特権。

殺しが前提の戦闘において、このスキルの保持者のステータスは大幅に強化される。

またこのスキル保持者が殺された時、殺したものにスキルは譲渡される。

どうやらあの‘死神’の能力はこれで底上げされていたらしい。道理で強いはずだ。

「そついやお前、これからどうすんだ？」

私が『ホルイーター大喰らい』のランクに仰天していると、ボックスがそう聞い

てきた。またストーキングでもするつもりだろうか。

「…これからって？」

「だからよ、ずっとソレステイにいるわけじゃねえんだろ？ ソレステイを出たあとはどこ行くんだ？」

「ああ…そだね、一応、この世界にある最大のダンジョン、大穴を
目指そうと思ってるけど」

「『奈落』か。ってことはルナファス王国の方に行くのか。まあ…
妥当といえば妥当だが」

目的は、パワーレベリングである。私のレベルはもうそこそこ高くなったが、ファナとピヨ介はまだまだだ。一人と一羽の強化を最大ダンジョン『奈落』とやらでやること。気狂い連中がちよっかいを出してくる前にできることはできるだけしておきたい。『死神』殺し』がどれほどの印象を連中に与えるかは分からないが、私の得体の知れなさもあってそれなりの時間は稼げるはず。目標は半年。これからは、知られる情報は制限しなければならぬ。まだ気づかれていないことが一番なのだが…どちらにせよもうあとには引けない。

「それじゃ。またいつか」

きいと扉を押して、ナデシコはバーから出て行った。店内に残った

男二人はまた語り合う。今度はナデシコについてだった。

「心配じゃないんですか？」

「まさか…あいつは単身で、死神、倒したんだぜ？ あんだけ強いのに俺が心配する余地なんてあるかよ。…そーいやお前、情報料とってなかったじゃねえか。お前こそどうなんだよ」

「初回限定ですよ…料金をとるほどの情報でもありませんでしたし。そもそも、私が教えなかったらあなたが教えてでしょう？ バックス。ところで、外から見て強いと思える女性ほど、内は弱いものなんですよ？ ましてや彼女は这个世界に来たばかり、強がっているだけかもしれませぬ。彼女が折れてしまった時は、いったい誰が支えるんでしょうか？」

「……俺ももう帰るわ。じゃあな」

「はいはい。素直じゃありませんね」

ボックスはそう言い捨てて、早足でバーを出て行った。レヴァンスは苦笑しながら彼を見送った。

バーの中で一人、レヴァンスはグラスを磨きながらつぶやいた。

「まあ彼女に限ってそれはなさそうですが」

ボックスは空回りしそうな気がする。

さようなら少年（後書き）

見て分かる通り、ナデシコには妙に鈍いところが結構あります。フアナの強さに気づいていて自分の強さの在り方に気づいていないところとか。精神構造が普通の人とは異なることが原因なんですけど、直に変わっていくかもしれませんね。神のみぞ知るですか。因みに作者は神様じゃありません。

あ、ガールズラブには行きませんか？ これは絶対です。親愛〃恋愛なわけがありません。親愛 恋愛、こんな感じ。これあってますっけ？

こんには隣にいる人（前書き）

わーい、（^ ^*）ノ お気に入り件数が百件になりましたね。
一流どころにはまるでかありませんが、やはり嬉しいです。

少しでも楽しんでもらえるようがんばります。

ナデシコは深く関わった人には妙に好かれます。そんな設定？ そ
ういうと生々しいですね。

ごんにちは隣にいる人

「今日も用事があるって… ナデイさんなんだか忙しそうだったな。ピヨ介は何か知らないの？」

…ピヨ

太陽が燦燦と程よく私を照らす中、けれど私の心は少し重たく今日もピヨ介とソレスティの町中を歩いてきた。本当はナデイさんも一緒がいいのだけれど、邪魔はできない。

少し気になってピヨ介に聞いても、以前より私に返事を返してくれるものの、私には何を言っているのか分からない。ナデイさんはどうやってピヨ介と意思疎通をはかっているんだろう？

今朝のナデイさんは何かを急いでいるような気がした。ソレスティも明日には発つと言っていたし。今日の用事は明日の準備？…でもそれに私を連れていけない理由があるだろうか。そういえば父さんもギルドだとかそういうところに行く時は、私を宿に置いてから行っていた。一応登録する時は連れて行ってもらったけれど。

初めてギルドに入った時はついつい怖くなって飛び出してしまったものだ。ナデイさんと一緒に入った時は少しましだったけれど、それでも背中に隠れてしまった。

ともあれ、今の私はとても暇をしてる。昨日は少しうるついたあとすぐに宿に戻った。けど今日は時間がたっぷりある、ありすぎる。何をしたらいいのか分からず、私はあてどもなくフラフラと出店の間を歩いてきた。

「ね、ピヨ介、お腹空かない？ ナデイさんにお金もらってるから、

何か一緒に食べよ」

ピヨピヨ

「んうー、やっぱり何言ってるか分かんない…」

暇を持て余しながらピヨ介との会話を敢行するも、やはり何を言っているか分からない。ピヨ介の方はこちらの言っている事が分かっているようなのが救いか…どちらにせよ一方通行では続かない。

とりあえず、なんとなく首肯したような気がしたので私は何か買って食べる事にした。

ふと一つの屋台に目がいつて、それに近づいてみる事にした。そこはどつやら串焼きの屋台だったらしい。一昨日ナデイさんと食べたものとは別のもののようにだけれど、これでもいいだろうか？これにしようと、屋台で串を焼いているおじさんの方に私は声をかけようとした。

「すみませーん、これ」

ピヨー！ ピヨー！

つんつんつんつん！

と、唐突に頭の上でピヨ介が騒ぎ出し私の頭に攻撃を開始した。正直言って地味に痛い。手加減はしているようだけれど明らかに何かに怒っている。

「痛い！ 痛いよう！ ううー ピヨ介が虐める！ ナデイさん助けて〜！」

半ば口癖のようにナデイさんに助けを求めながら、私は頭の上にいるピヨ介の攻撃から逃れようと、しかし意味もなくまたふらふらと移動を開始した。するとピタリとピヨ介の攻撃がやんだ。それを疑問に思いながら、ふと気づけばいつの間にか私は屋台から離れた位置にいた。…もしかしてあれがピヨ介の気に食わなかったのだろうか。

「…ねえピヨ介、もしかしてあれが嫌なの？」

ピヨー ピヨピヨー

またなんとなく首肯する気配。いったい何が気に食わなかったんだろう？ 一昨日と違ってナデイさんがいないからかな？

あとでナデイさんに聞いたところ、あの串肉は鳥肉だったらしい。同種というわけではないけどそのことがピヨ介の琴線に触れたんだとか。ナデイさんはまだ若いから仕方無いと笑っていたけど、それは同じ鳥でも同種じゃなかったら喰えってことなのかな？

どんっ

「っ たっ！」

「ああ？」

ピヨ介にバツシングを受けた後、キョロキョロと出店を覗きながら歩いていたら私は道の真ん中で固まっていた柄の悪い男たちに気づか

ずいぶつかってしまった。ぶつちやけ向こうの方が悪いと思わないでもないのだけど、怖かったので私は即座に謝って逃げようとした。

「ごめんなさいっさよならっ」

「待てよおい」

が、腕をつかまれ捕まってしまう。

「ぶつかって詫びも入れずさよならたあふてえ野郎だ」

「おいおい、野郎じゃねえだろ」

謝ったのに…きつとこういう人たちにはまともな話は通じないのだろう。一昨日ギルドで絡んできた男の人のような目で、私をニヤニヤしながら見ている。あの時はナデイさんがいたから怖くてもそれ以上にはならなかったけど、今はいない。背筋がすつと寒くなって、足が知らず震えだす。私は、ナデイさんがいないと何も出来ないのだろうか。

「そうだな…ちょっと俺らに付き合ってもらおうか？」

強張った私の肩に別の男の手が伸びる。腕をつかまれている私はそれから逃れることは出来なかった。

ピヨー！

「あっちーっ！ なんだこのピヨ」は！

でも私の肩に届く前に、ピヨ介が火を噴いた。ちなみにそれは低音

の不思議な炎である。ものにあたっても燃やすほどの火力がないものだ。つまり、男が感じるのは高熱程度のもので火に身体がまかれることはなかった。町中ということですがにピヨ介も自重しているのだろうか。

「おい！ 何やってる！」

と、今まで遠巻きに見ているだけだった人ごみの中から、一人の男が周囲の人をかき分け現れた。精悍な顔つき、体つきに、しかし若々しく、また背中に大剣を背負っている事から冒険者であることが知れた。

「あ、ああ？ 何だよ、こいつがぶつかってきたんだよ。詫び入れさせるのは当然だろ？」

私に絡んできた男たちは、新しく男、冒険者に少ししり込みしながら、しかし男としてのプライドが高圧的に対する。冒険者はそれに呆れたのか頭をかいて男達をぎろりと睨んだ。

「ガキかお前ら…あ、あ、あ？」

「っ！ だーつくそっ、やるぞお前ら！」

「「おうっ！」」

男達は私を放し、逃げればいいものを無謀にもその冒険者へと喧嘩を売った。普通に考えれば町のチンピラが冒険者に敵うわけが無い。数の差から気が大きくなったのか、どちらにせよ男達は冒険者に殴りかかった。そして結果は

「畜生っ！ 覚えてろよ！」

「あてて」

ごらんの有様である。男達はお決まりのセリフを言いながら逃げ去った。冒険者はそれにやはり呆れた視線を向けながら、ポツリとつぶやいた。

「まったく、呑気なもんだ。俺じゃなくてあいつだったらこんなもんじゃすまなかつたぞ」

「あ、あの、ありがとございました。…？ あれ、もしかして…」

振り向いた冒険者の顔に、私は見覚えがあつた。ギルドでナディさんと親しげに話していた冒険者、ボックスだった。

ボックスは、その日は特に用もなく町中をぶらついていた。冒険者として、日がな冒険を繰り返しているわけでは無い。といつても、そういう冒険者がいるのも確かではあるが、ボックスはどちらかといえば拠点を構えるタイプだった。

出店を冷やかしていたのだが不自然な炎が一瞬巻き上がるのが見え、不審に思いそちらに向かつてみると、ナデシコの連れの少女が絡まれているのが見え間に入ったのだった。

ボックスは少女、ファナの礼に答えながら少し首をひねって尋ねた。

「それはいいんだけどよ、嬢ちゃん。あの程度の連中なら嬢ちゃんの力量でなんとかなったんじゃないかねえか？」

そう、実のところファナの方が彼らより強かった。その上ピヨ介と連携すれば、撃退することは容易かつただらう。

「う、その、身体が強張ってしまって…」

が、強いからといって威圧に負ければそこまでだ。場数を踏んでいないファナには少し荷が重かった。特にファナはあの手の人間が苦手だった。それは、盗賊に襲われた時のトラウマかもしれない。

「はあ…このことはナデシコに言っとくぜ」

それは聞き、ファナは慌てた。あんな男達にも勝てない自分を、ナデシコは見捨てないだろうか？ そんな想像が浮かんでくるほどに気づけばファナはバックスに突っかかっていた。

「止めてください！ …大体あなたはナディさんとどういう関係なんですか！」

思わずついて出たバックスにむけての文句。脈絡のない文句だったが、実のところファナが気になっていたことである。そしてバックスにとつても、その言葉は自身を揺らがせるものだった。

「ど、どんな関係って…？ なんだらな…？ 会って数日だしよ…」

村ですれ違い、ソレスティであとを追い、捕まり、境遇を打ち明けた。言うならば同郷同士といったところだが、何故あつたばかりの相手に自分はこんなにも入れ込んでいるのだろうか？ そう思わ

ずにはいられない。しかし彼女に会えば会うほどに、バックスは彼女に惹かれていた。それを否定できないほどにバックスはナデシコに入れ込んでいた。

「なんですか！ それじゃなんであんなに親しそうだったんですか！？」

会って数日、なら何故そんなに親しげなのか。ファナはなおも言い募る。が、バックスもただ言われるばかりではいられない。

「なんだよ、そりゃ嬢ちゃんも一緒だよ」

そう、それを言うならファナもバックスも同じである。会って数日、むしろバックスよりも会った時期は遅い。にも関わらずファナはかなりのところをナデシコに依存していた。一緒にいればいるほど、何故か惹かれる、それが彼女から見てのナデシコだった。

確かに、父親を失いそんな自分を拾い上げたナデシコはファナにとって、バックスがナデシコに感じるもの以上に執着している存在だった。それゆえ、ファナはナデシコと親しげに話していたバックスに、どこか気に入らないものを感じている。

「う…私は！ ナデイさんと一緒に旅してるんですよ？ だからあなたより一緒にいた期間は長いんです」

その差とて大したものではないが、一応ともに旅をしているということはアドバンテージではあった。それを思い出して、ファナはつつましい胸を少し張る。

バックスはといえば、一応は助けた少女にここまで言われて少しかちんときていた。そして普段は言わないような事を、ファナには一番言っではいけないことを言ってしまった。

「一緒に旅してるからって、嬢ちゃん、ナデシコの役に立ててんのか？ あいつ結構合理的な性格してるから、そんなだと置いてかれちまうぞ」

が。言葉で殴られというのはこういうことか。それほどの衝撃がファナを襲う。最もファナの恐れていた事を、バックスは言ってしまった。

置いていかないで置いていかないで置いていかないで。置いていかれたくない。それは一度は父親の死を乗り切ったファナの、しかし偽らざる本音だった。

「うう…えうつ、えぐつ」

涙が盛り上がり、ファナの頬を濡らす。

バックスはと言えば予想以上の反応に慌てていた。自分の言葉が原因なのだからその焦りも相当のものだ。少女に泣かれることには慣れていない上に、こんなところをあいつにでも見られたら…そんなことも考えてしまう始末。

「え、ちょ、その、」

なんとか何かを言おうにも、意味のある言葉が口から出てこない。

「ううううううーっ」

。うーっ…

しかも何を言うべきか考えているうちに、ファナは泣きながら走り去ってしまった。ピヨ介の非難するような言葉を残して、である。ボックスはそこはかとなく悪い気分になりながらうな垂れた。

と、うな垂れるボックスに聞き覚えのある声がかかる。

「あれー。ねえボックス、ファナ知らない？」

そこに現れたのは、いつかのようにふてふてと気の抜けた歩き方をしているナデシコだった。

突然のナデシコの登場にボックスは慌てたが、ナデシコの言葉から先の光景を見られたわけでは無い事に気づいた。そしてもうひとつ気にかかり、彼女に尋ねる。

「おまえ、どこ行ってんだ？」

ファナが此処にいた事を知っていながら、ナデシコは先の光景を見ていない。つまり、此処にいながら何らかの理由で離れ、今此処に戻ってきたということだ。

ナデシコは相変わらずニコニコ笑いながら、指を唇にあてて首を傾げた。

「…私ね、三下の『覚えてる』ってセリフ、大っ嫌いなんだ」

それで全てを察したボックスは、顔を青くしながらそれ以上を聞くことはやめた。もう、彼らの無事を祈るばかりである。ボックスは必死でナデシコの、見た目だけは可愛らしい仕草から目をそらした。

「それで、ファナは？」

「あ、ああ、さっき向こうに行ったが…」

ボックスはさっきのことは無かった事にして、ファナの走り去った方を指さした。

ナデシコはそちらの方を向いたが、しかし唐突にあらぬ方向を向いたかと思うと幾度か頷き、そしてボックスのほうを振り向いた。

「ボックス、私達は明日にはソレスティを発つから。じゃね」

そう言い捨て、ふっとナデシコの姿は消えた。

「あ、おい…行っちゃまった…てか瞬間移動かよ？ 魔法については昨日教えたばっかじゃねえか…相変わらず得体が知れんな…」

この世界では、瞬間移動はそう簡単なものではない。そもそもその概念自体を一部の者しか知らないのだが、ナデシコはやすやすと使ってしまった。ボックスが驚くのも無理は無い。…ナデシコの場合は魔法ではなく固有技能のようなものだが、それをボックスが知る由も無い。

ナデシコもいなくなって、ボックスはファナと会う前よりなんとなく寂しく思いながらまた出店を冷やかし始めた。

そんなボックスの前に、泣くファナを見てピヨ介から一部の話聞いたナデシコが現れたのは数分後のことだった。

その後の結果は言つに及ばず。

こんには隣にいる人（後書き）

そういえば、戦闘シーンって結構多いですよね…それがテーマみたいなもんですから仕方ないんですけど。

今回は少し飛ばして、また旅中の戦闘かもしれないです。

こんにちは私の悩み（前書き）

あるえー。戦闘じゃなくなっしまいました。

なんだか今回は重い話？な気もしないでもないです。

思い悩むナデシコの図。おかしいなあ、もっとあっけらかんとした人かと思っていました。

みんなには私の悩み

その日、私はギルドに依頼を取りに来ていた。ルナファスに向かうついでに何か依頼を消化しようという考えもあったが、‘奈落’とやらに行く前にファナに実戦を経験して欲しいというのもあった。結局‘死神’は私が相手をしていたし、ファナは今日まであまり極限での戦闘をしていない。厳しくすると言っておきながらこの様だ。早すぎるか？ そう思わないでもないが、ファナも14だ。それに父親のおかげか、辛口評価をしたが基本もしっかりしている。ピヨ介と組ませれば死角はなくなるだろう。とはいっても、さすがにまだボスクラスをぶつけるつもりはないが。

ギルドに入った私は、すぐに受付嬢に呼ばれた。なんでも昨日の‘死神’討伐の件で話がしたいということだった。私が依頼を受けていないことも問題だったらしいが、それよりも私がFランクであったことがまずかったようだ。‘死神’討伐はSランク依頼、そしてギルドの依頼とはCランク依頼までは誰でも受けられるが、B以上は少なくとも一つ下の冒険者ランクを持っている者でないと受けられないらしい。つまり、‘死神’討伐依頼は少なくとも冒険者ランクA以上が最低条件だったのだ。当たり前のことながら前代未聞で、あまりにも非常識すぎて、‘死神’の鎌という証拠品を持参しながら討伐は認められないと言ってきたのだ。

が、それではあんまりだとギルドの方でも色々揉めたようで、私のレベルを水晶ではかったところ白（力量B）になっていたため、特例として私の冒険者ランクCへの特進が許可されることとなったらしい。それにあわせ宙に浮くことになった依頼報酬のおよそ三割が、‘死神’の鎌を持ち込んだ功績、という形で私に受け渡される

こととなり、私としては嬉しい誤算となった。

冒険者ランク C

名前 ナデシコ

種族 人間

職種 拳闘士

力量 B

更新された冒険者カードを見てほくそ笑みながら、私は掲示板で無難な依頼を探していた。ちなみに、今掲示板の前には私しかない。私が行くと同時に掲示板の前にはいた冒険者たちは蜘蛛の子を散らすように他所に行ったのだ。どうやら私は避けられているらしい。何だろうか？

「あ、これいいかも」

私に手を取ったのはBランクの依頼。どうせなら私がCに上がった祝いに受けてみるのもいいかもしれない。

とあるモンスターの調査、あるいは討伐。調査のみの場合はCランクの任務になるようだ。場所はソレスティと、ルナファスの南西にある町、ウエルザスの間にある森になる。ついでは申し分ない場所だ。

「すみませーん、これ受けますー」

>ピヨピヨ<

「ん…？」

依頼を受けて意気揚々ギルドを出た私に届くピヨ介からのテレパシ
ー。切羽詰った空気はなく、念のため、というのがむしろ気になっ
た。

跳んだ先で見たのは数人の男につかまれているファナと、それと言
い争っているバックス。私が突然現れても誰も気づいておらず、人
だかりは手を出しもしないがそろいもそろって全員静観している。
どうやらファナに絡んでいる男たちも大して強そうでも無いし、私
が出る幕はないかととりあえず私も静観することにした。私が出る
と余計面倒なことになりそうという自覚もあったが。

そして無謀にもつつかかっていった男達は、バックスの一人一発の
拳で崩れ去る。弱すぎる。そう思わずにはいられない。そもそもチ
ンピラであろうと一般人が冒険者とやりあおうなんて無茶なのだ。
外でモンスターと殺り合う冒険者は、内で暮らす町人とレベルにお
いて歴然たる差がある。例外もいるだろうが、町のチンピラなどし
よせん一桁、10台がいいところだ、Bランク冒険者のバックスに
逆立ちしても勝てようはずが無い。

ふと視線を戻して見ると、男達は互いを支えつつ逃げ去るところだ
った。

「畜生っ！ 覚えてろよ！」

ピキ

私の頭の血管からそんな音が聞こえた気がする。なんだろう、ものすごくむかついた。バックスは放置するようだから、私が始末をつけるでしょう。あ、殺すなんて短絡的なことはしないよ。でも、今回は脅かすついでに実験台になってもらおうと思う。普通の一般人には結構きついだろうなあ。

「はあつ、はあつ、畜生、あの野郎！ このままじゃおかねえ！」

「おい！ 仲間集めろ！ あいつに思い知らせてやらねえと気がすまねえ！」

「あのガキだ…あいつを捕まえて誘い出すぞ」

「ああ、人質と、あと仲間も十人もいりゃ楽勝だろ」

逃げた先、路地裏で彼らはそんなことを話し合っていた。ああ、やっぱりこの手の人間の仕返しはつまらない。まあ、以前の盗賊の時は仕返しに人死が出る可能性も考えて残さず殺ってしまったけど、今回の連中はまだそこまで犯っていないみたいだし、最初のプラン通り脅すぐらいで大丈夫だろう。

ああ、『リベンジだ！』とか言ってくるような男気あふれる敵と出会えないかな…そしたらきつと楽しい仕返しなのに。

「それじゃ行く」

「こんにちは」

「　　なんだてめえ」

動きだす前に、私は彼らの会話に割り込んだ。先手を打たれても面倒だ、ここでやってしまおう。

「私、あの金髪の子の保護者なんです。手を出すのはやめてくれませんか？」

言外にボックスはどうでもいいと言っているんだけど、まあボックスなら罠を仕掛けられても問題ないだろう、多分。どちらにしろ、彼らを見逃したのはボックスの裁量だ。後々どうなるかと、私は知らない。私に責任があるのはファナの安否だけだ。

「んだとお…？」

「いや待て。今日の前にいんだから丁度いいだろ、こいつ捕まえて人質にしようぜ」

「…そうだな。へへへ」

話し合いは通じないらしい。元から期待してなかったから、前座みたいなものなのだけれど。先のことで懲りていないらしい彼らは、私を取り囲んだ。が、十人いても何もできないような連中が四人いたところで何が出来ようか？

というわけで、私は構わず実験を開始する事にした。

今回はつまるどころ魔法だ。

以前空刃を使えた事から、多分炎だとか水だとか雷だとか、そうい

う具体的な現象はそれほど苦も無く扱うことが出来るだろう。
だから彼らに使うのはもう少し別種のものだ。これが成功すれば、
これから雑魚とは戦わなくても良くなる。戦わずして勝つ、それが、
今から使う魔法の主題だ。

魔法とはすなわちイメージの顕現、想像の創造。そして呪文によつてイメージは拡大され魔法として発動する。慣れば呪文は必要なくなるらしいが、まだ私にそれはできない。空刃は偶然の産物なのでノーカウントだ。とはいっても、この世界の呪文は単音キーでもいいようなので詠唱破棄する意義が少ないような気はする。呪文は人の数だけある、つまり長い呪文の人もいるということだろうか？

いや、他人の事はこの際どうでもいい。それより今から使う魔法だ。

私のイメージの詰まった呪文、それは

「【怨】」

最大級の、殺気。

ぶわっ

呪文とともに、私の身体から発散される禍々しい空気。殺気など、
本来は曖昧なものだ。

しかし、魔法によって顕現した殺気は私のイメージ。私が、そう感じたもの。かなり弱めにしてこれなのだ。本気でやれば物理的な現

象すら引き起こすほどの力を発するのではないだろうか？

増してや今の私は、‘死神’殺しの“死神”持ち。これほどにじっくり来るものはない。

「ひい…あ…あ…あ」

「はっ…っ…は」

「」

私を囲んでいた男達は、全員私の魔法にあてられ腰を抜かしていた。目を見開き、口は過呼吸を繰り返している。失禁してしまったのか、股は濡れて異臭が漂っていた。濃密な死の空気も、それに対する恐怖も、彼らはまだ知らないのだろう。だからあれほど手加減をしてもこれほどの反応をしてしまう。

脅しが目的だったとはいえ、やりすぎたか。

彼らのこれからの夢見を少し心配してやりながら、しかしやることは済ませようと一人の男、一番偉そうにしていた男に私は近づいた。そして、腰を曲げて顔を近づけ目を合わせる。

目が乾燥したせいかわ、それとも他の理由かぼろぼろと涙をこぼし始めた男に構わず、私は口を開いた。

「二度とあの子や私の前にその面見せたら、こんなじゃすまないから」

それだけ言った後、彼に裂けるような笑みをおまけで見せて、私は魔法を解除すると同時に彼らの前から瞬間移動で姿を消した。

「よっ…と」

跳んだ先は、ボックスとファナの居た場所の近く。

脅しには、やはり演出は必要だと思う。これで、彼らが私達の前に現れる事は二度と無いだろう。誰が好き好んで死神に首を切られに行くだろうか？ 一般人である彼らに、それは酷な話だ。

「えーと」

それはもういい。もう済んだことだ。

私はファナとボックスのところへ戻った。しかし、どういうわけかそこにいたのはうな垂れたボックスだけでファナの姿は無かった。

「あれー」

私は首をかしげながら、とりあえずここにいるボックスに話を聞いてみる事にした。

「ねえボックス、ファナ知らない？」

声をかけると、ボックスはびくりと痙攣してどこか焦ったような表情を私に向けた。しかし少し何かを考えると、私の質問には答ええず質問で返してきた。

「おまえ、どこ行ってんだ？」

…どうやら私がさっきまで此処に居た事に気づいたらしい。

とりあえず私はとぼけながら、しかし私の感じた核心を口にする。

「…私ね、三下の『覚えてる』ってセリフ、大っ嫌いなんだ」

顔を青くしながら私から顔を背けるボックス。

失礼な奴め、脅かしただけだ。

失礼な態度のボックスに憤慨しながら、私は質問を繰り返した。今度質問を質問で返したら足を踏んでやる。

「それで、ファナは？」

「あ、ああ、さっき向こうに行ったが…」

さつきとな。どうやらすれ違いだったらしい。用事はさつきと終わらせるべきだったか…

と、ボックスの指差した方向を向くと同時に、またピヨ介からテレパシーが来た。

>ピヨー ピヨピヨー<

今度は少々火急の用らしい。ファナのフォローをして欲しいとのことだ。…何があったのか謎過ぎる。とりあえず、ファナとピヨ介のところに向かうことにした。

ついでに、私はボックスにソレスティを発つ旨を伝えることにした。どうせ今日はもう会うことは無いだろうし、明日は直ぐに発つことにしている。おそらくしばらくは会うことは無いだろう。

「ボックス、私達は明日にはソレスティを発つから。じゃね」

と、思いきやピヨ介にファナの涙の理由を聞いてボックスの元へと急行する私だった。

ピヨー ピヨピヨー

「はあ…そんなことで悩んでたの…私が面倒見るって、約束したはずなんだけどなあ…」

ボックスをぼこぼこにした後、私はファナとピヨ介のいる宿屋に戻っていた。ファナはどうやら一室に閉じこもっているらしい。さつきは詳しい事を聞かずにボックスのところに行っていたため、私はあつたことの核心を今ピヨ介に聞いていた。役に立てていない。

それはファナの鬼門だったらしい。別に私はファナを役立たせるために助けたのではないのだけれど。ファナには重要な事のようにだ。

やっぱり、人間って難しい。

そして、私も人間だ。それゆえ自分自身のこと時々分からなくなる。何故そんなことをするのか？ そんな場面は今までも幾度かあつたはずだ。答えはいつも出せなかったが。

以前、私とファナが初めて会った日の夜、ファナが泣いていたあの時。実のところ私は必死だった。ファナが泣く理由は何か？ いったいなんと言つてやればいいのか？ 自分なりに答えを出して言葉は出せたものの、ファナは結局ほとんど自分で立ち直った。

今度は、いったいなんと言つてやればいいだろう？ …いや、私がすることはまずファナの心配を解きほぐすことじゃないか？ きっかけさえ与えれば、ファナは自分で立ち直る。だからこそ、私は彼女のことが気に入つたのだ。

「ファナー、入るよー」

部屋の扉をとんとんと叩く。返事は聞かない、とにかく入る。鍵はかかつていなかったなので、私はそつと扉を開いて部屋の中へと入りと入つた。

部屋の中は真つ暗で、しかし夜目も利く私の目にはベッドで丸まるファナの姿が見えた。布団をかぶっているのでどんな顔をしているのかは見えないが、私が入ってきたことで慌ててかぶったらしく、布団はかなり乱れている。

とりあえず私はそれには突っ込まず、ベッドに腰をかけて布団の山の、ファナの肩辺りに手を置いた。それと同時に、ぴくりと小さな振動が手を介して私に伝わつた。

「ピヨさんに、話は聞いたよ」

ぴくりと、今度はあからさまな振動。恐れているのだろうか、私に捨てられることに。そんなことはありえないのに。

山がもぞもぞと動いて、おそらく顔の部分が私の近くまで近寄ってきた。そこからくぐもつた、ファナの小さな声がする。

「置いて、いかないで」

いつもの初々しい敬語はどこへやら、縋るような言葉が、布団の向こうから聞こえた。私は笑いながら、布団をめくって直接ファナの頭を撫でた。

ファナの顔は、ずいぶんと泣いていたのか酷いものになっている。

「置いてかないよ。最初に約束したはずだよ？　ちゃんと面倒見ろって」

「でも…」

「でももへちまも無いよ。私は一度した約束は相手が破らない限り絶対に破らない。ファナは、私とした約束を破るの？」

「しない！　そんなこと、しない…」

「じゃ、いいじゃん」

「…っん」

結局、交わした言葉なんてこれだけ。やっぱりファナは、もう落ち着いていた。

ぱたりと、後ろ手に部屋の扉を閉じる。ファナは泣き疲れていたのか、撫でているうちに眠ってしまったていた。

私はそこで、笑みを消した。扉の前にずるずると座り込む。きっ

と今の私は、困惑した表情を浮かべていることだろう。

「違う」

違う、違う、違う。これは違う。

もたれかかられるぐらいなら、私は喜んで支えよう。人は独りでは生きてはいけない。きつとみなそうなのだろう、私はそれを否定はしない。

でもこれは違う。依存じゃ、駄目なんだ。

まだ、数日しか経っていないはずなのに。今日初めて気づいたが、いったいいつからだっただろうか？

フアナは忘れていないだろうか。私がフアナとずっと一緒にいるわけじゃないことを。

『君が一人で生きられるようになるまで』。それが、私がフアナとした約束だ。…このままでは、私はフアナとの約束を果たせない。

そもそも、私はどうだ？

どうしてここまでフアナに入れ込んでいる？ まだ、会って数日。

私は確かにフアナを気に入っている。しかしそれだけじゃなかったのか？

いったい私はどうなっている？

「あ」

そうだ。

忘れてた。

今の今までずっと。

向こうの世界にいた時、浅い付き合いばかりしていた私に、唯一懐いてくっついてた少女。私も存外悪い気はしていなかった。

彼女はファナに似ている。いや、私からしてみれば、ファナが彼女に似ていたのだろう。

「はは…やっぱり私は度し難い」

今の今まで、忘れていたなんて。

けれど、

答えに気づいた私はもう落ち着いてしまっていた。

やっぱり私は

みんなには私の悩み（後書き）

最後に出てきた少女とやらはとりあえずどうでもいいので忘れてください。ナデシコも忘れてみたいですし。

…え、フラグ？ そそそんなことはないですよ。

まあどうにせよ暗い展開にはしませんのであしからず。作者はそういう話は苦手ですし。

こんにちはファナの本気(前書き)

今日から本気出す！ どうもバトル回です。

なんかはっちやけ？ですか。

どうしても似たような表現が時々入ります。すみません。

こんにちはファナの本気

「あ、あのー。昨日も一昨日も思ったんですけど、なんで道を歩かずに森を突っ切るんですか？」

「何事も経験だよ、ファナ。いつも道があるとは限らないんだよ」ソレスティを発つて早数日。私は偏屈にもファナとピヨ吉を連れて森を横断していた。つまるところ、ここが受けた依頼の指定場所なのだ。このあたりのモンスターから慣らした方が、ファナには丁度いい。私も十分フォローが出来る。

昨日一昨日モンスターと戦った限りでは、ファナの実力は十分だった。確かにまだレベルは低いがそれを技量で補っている。それに、無意識のようだったけど昨日使っていたあれもあれば…もしかして意識的にも使えるんじゃないかな？ 今まで使わなかった、使えなかったのは自分に自信がなかったせいか…とにかく一度、ぎりぎりまで追い込んでみようと思う。スキル“天才”もあることだし、これならすぐに強くなれるだろう。

「ファナって、魔法使えないんじゃないかなかったっけ？」

「あ、はい。前少しだけ言いましたっけ。私には魔法の素質がまったくないって父さんが…でも私、魔法が使えないのに魔力だけは普通の人以上多いんですよ」

「ふーん、ボックスと同じタイプ…いや、ちょっと違うか」

「そういえばナディさん、ソレスティを出る時、ボックス、さんで

したっけ？に何か言われていましたけど、なんだっただんですか？あれ」

「さあ。なんかあったら俺を頼れとかなんとか言ってたけど。ボックスは言葉が足りないんだよねえ。私とて万能じゃないんだから、一を聞いて十理解するわけじゃないんだけど」

「えっ…それって結構ストレートじゃありません？ ナデイさん分かっててとぼけてませんか？」

「さあねえ…ともかく、ボックスは苛めたくなるんだよね。なんとなく」

「…ずいぶん気に入ってるんですね」

「否定はしないよ。だからどうなるというわけじゃないしね」

「やっぱり…重要なところは分かってない気がします」

「？」

「いえ、分からなくていいです。ナデイさんはそのままです」

他愛の無い話をしながら、私達は森の中をずんずん進んでいた。太陽は一応見えているので、方角を間違える事は無い。本当に、この世界は前の世界に似ていると思う。太陽が二つだとかそんなことはなく、月も一つしかない。このぶんなら暦まで一緒なのではなからうか。季節までは、さすがにないだろうけど。

んー、そういえば、今日はまだモンスターが出てなかったっけ。ふ
と思いついて、私はファナの方に振り向いて尋ねた。

「今まで出てきたモンスターは何だったっけ？」

「えと…一昨日ホーンラビット狩りましたよ…あれどこにでも出ま
すよね。それと確かニコダマと…昨日はニコダマやシヨウジョウが
出てきましたね」

ニコダマ、ニコダマはそれぞれ二尾と三尾の狐のようなもので、耳
がとても大きい。コダマという種族ではあるが、位階を昇るがごと
く尻尾の数が増えていくたびに強くなっていくらしい。毛色は茶色
がかった橙色で、なかなか美味でありました。鳴き声とともに使っ
てくる魔法は少々面倒だったけれど。

シヨウジョウは名前どおり猿だった。手長猿といえは一番分かりや
すいだろうか。爪による攻撃にファナは苦戦を強いられていたよう
だが、如何せん非力で食らったところで大したダメージはないよう
だった。ピヨ介に手伝わせたなら私の出る幕がなかったほどだ。

ファナの返事を聞きながら、私は手の平を上にしながら肩の下あた
りまで持ち上げた。

丁度『やれやれ』のポーズである。

「？ 何やってるんですか？」

ファナは当然のごとく！私の奇行に首を傾げた。やっぱり、私はフ
アナに対してスパルタで接するべきだろう。まあ、それなら今回の
こともいい経験にはなるのではないだろうか。多分アレを任せても、
ピヨ介もいるし何とかなる。

で、私の行動になんの意味があるかといえは。

「ファナ、昨日シヨウジヨウが出たということはね、」

ピヨトピヨトピヨトピヨ

両側に向けられていた私の十本のうち八本の指部分が瞬時に硬化し、さらに高速で伸びて茂みから飛び出してきたシヨウジヨウたちの胸を貫き木に縫いつける。

「あれは斥候もしくははぐれで、どちらにせよ群れが近くにいらっしゃるっことだよ！」

キイイイイイイイッ

先発を片付けると同時に、さらに続々と森からシヨウジヨウたちが飛び出してきた。いくつかの狼を思い出すが、個体の能力はこちらのほうが上だろう。とにかく、雑魚の相手は私がするでしょう。ファナには、あちらを任せる。

私はこちらに迫るシヨウジヨウたちを「ホルイーター大喰らい」の指で次から次へと屠りながら、武器を構えたファナへと声をかけた。ピヨ介ももうファナの頭の上に移動している。つまり、ピヨ介はもう了解済み

だ。これはファナへのサプライズ。

「ファナ！」

「はい！ やります！」

「あ、シヨウジヨウはいいから、むこうお願い」

「はい！ …え？」

私が首を振ってとある方向を示すと、ファナは怪訝な表情をしながらそちらを向いた。そしてその顔はすぐに凍りつく。

ゴオオオオオオオオツツ

そこにいたのは言うならばゴリラ、シヨウジヨウの群れのボス、ドラミタスだ。

普通ならばシヨウジヨウは猿同様最も強い個体が、群れのリーダーとなる。しかしこのモンスターが入るとそれはがらりと変わる。種族スペックの差は甚大なもので、いくらひっくり返ろうとシヨウジヨウがドラミタスを上回る事は無い。それゆえ問答無用でドラミタスはシヨウジヨウの群れを統率することになる。

また彼らにとっては群れの規模こそがステータスであり、同じドラミタスに出会った時は即座に殺しあいが始まる。たとえ相手がドラミタスの上位種、グランドラミタスでもそれは同じだ。そして勝つ

た方が負けた群れを吸収し、さらに群れは巨大なものとなる。

今回の私の依頼の対象、それがこのドラミタスだ。調査に関してはこのドラミタス自身と群れの規模についてだったが、もう周辺地域に被害が出ているらしいので討伐依頼が下っていたのだ。シヨウジヨウ、及びドラミタスの群れは大きくなれば大きくなるほど行動範囲が広まる。本拠はこの森のようだが、この群れはずいぶんと活発に動いている。

最初に依頼を受けた時はドラミタスは私が相手をするつもりだったが、ファナの予想以上の腕前と群れの規模から、私はシヨウジヨウの相手をする事にした。ファナではこいつら倒しきる前に力尽きてしまう。一体のみに集中、短期決戦で勝負をかければ、ドラミタスにも負けないはず。とにかく、今回はファナには死線というものを体験してもらおう。かなりの荒業だが、これで勝負度胸がついてくれればと思う。…トラウマになったりして。ま、まあファナとピヨ介を信じよう。

「あの、ナデイさん。私の目にはすごいモンスターが映ってるんですが…もしかしなくてもあれじゃないですよね？」

「ん？ あれあれ。いけるよね？」

ファナ、現実を見ようね。きっと私は残酷なのだ。

私は硬指を縦横無尽に操りながら引き攣った笑みを浮かべているファナに爽やかな笑顔を送った。

「むむむ無理ですよ！ あれ、ドラミタスでしたよね！？ クランクのモンスターじゃないですか！ 私は力量Eランクですよ！？ かないっこないです！」

「力量なんて、あくまで尺度みたいなものだよ。その人自身の強さは測れない。」

それに、強くなるんでしょ？」

「…！」

やっぱり私はずるいと思う。ファナにこんなことを言うなんて。けど、私もあまりゆっくりはしてられない。ファナの自立を促す第一歩、自分だけでボスクラスのモンスターを倒す。…いや、今回はピヨ介いるけど。それでも、このギリギリの戦いでならファナも大きく成長するに違いない。

「勝てるよ、ファナなら。今はピヨ介もいるしね。大丈夫、シヨウジヨウは全部私がやるから、ファナのところには一匹たりとも行かせない」

「…はい！」

「うん、いい返事。それじゃ、話はここまで。」

シヨウジヨウの湧出…ってぐらいにぞろぞろ出て来はじめたし、それ

ゴアアアアアアアアアッ！

来ちゃった」

「ああああああああっ！！」

まあ、万が一の時は私がかんとかするし、安心して死線を体験して欲しい。フアナには言わないけどね！

「ああああああああっ！！」

来た！ 来ちゃった！

私の焦りは最高潮にまで達した。迫りくるのは大質量のモンスター。大きいだけじゃない、スピードも相当なもの。あの大きな手に捕まったら、きつと私は一瞬で握り潰されてしまうだろう。それを思うと身体が強張りそうになる。

けど。そんなことは、どうでもいい。

『強くなるんでしょ？』 そんなことよりも、私の心を埋めるのはナデイさんの言葉。そうだ、私は変わるんだ。私は、父さんにもそう誓ったはず。

なら。 今私がすることはこの強敵を倒しきること。Cランク？

関係ない。今の私はきつと何が相手でも勝てる。いや、勝ってみせる。だって、今の私にはピヨ介がいて、その上私の背中を守ってくれているのはナディさんなのだから。だからこそ、今の私に敗走なんて存在しない！

「はあああああつ！」

ドラミタスはなるほどスピードはある。けれど、それは突進に限った話だ。私のように小回りが利く相手にはむしろ相性が悪い。私の戦闘スタイルは攻撃を避ける、あるいは逸らしながら少しずつ相手にダメージを蓄積させていくもの。けれどこの相手にはそれは使えない。何せドラミタスの防御力と比較すると私の攻撃では軽すぎてダメージを与えることすら出来ない。

だから、あれでいく。自信なんて無い。けど、今の私にはそんなものは必要ない。とにかく、やれることをやるだけ。ドラミタスの攻撃を躲しながら、隙を見つけてそこに必殺の一撃を叩きこむ。これしかない！

ゴアアアッ！

「ふっ！」

身体が軽い。心臓がどくどく鳴って、力が次から次へと湧いてくるみたいだ。これが私の、初めての戦闘に対する高揚感。私にこんな一面があつたなんて。

ごおつとドラミタスの拳が私を掠める。

強いっ、余波だけでこれだけの威力！

一撃でも喰らったら：私の負けは確定だ。

けれど、動き出した私はそんなものでは止められない。恐怖なんてほど遠い。

剣を構え、拳を突き出した姿勢のドラミタスへと一撃を振るう。

「はっ ああああっ」

今っ。

ぼんっ

爆発的な加速。視界が歪み景色が変わる。私は高速でドラミタスの脇を駆け抜けた。その瞬間、私の剣閃は確かにドラミタスの堅い防御を貫き、脇腹を深く裂いた。

ガアッアアアアアッ

脆弱な私の、格上に通じる唯一の一手。それが瞬間的な身体強化とそして魔力放出。今までは怖くて使うことなんて出来なかった。けれど、そんなことを考えていた自分が馬鹿らしく思えるほどに今の私は高揚している。

どれほどの魔力があるうと、どれほどのイメージを重ねようとして、どれほどの呪文を並べようと、私には魔法を発動させることはできない。一応使える身体強化ですら持続性はまるで無い。けれど、私には唯一つ、魔力放出という得意分野がある。

今の一撃は少しでも近くにいるとどうなるか想像もつかない。そう考え、私は大きく後ろへと飛びのいた。追撃を防ぐためか、今まで沈黙していたピヨ介が炎を噴いた。

ピヨーーーーッ！

グ、ガアアアアッ

私を追いかけようとしていたドラミタスは、高熱の炎に押されて逆に一步後退した。

「あ、ありがとう、ピヨ介」

ピヨっふ

しかし、失敗した。さっきの一撃で決めるべきだった。どうする？さすがにもう同じ手など通用しないだろう。この瞬間すらピヨ介のつくってくれた間隙、ゆっくり思考する暇なんてない。でも…

私は、ちらりとナディイさんの方へと目を向けた。

そこにあっただのは、正に殺戮の嵐。

十匹か、二十匹か、それこそ数え切れないほどのシヨウジヨウウの中をまるで舞うように武器を振るっている。

黒いものが自由自在に飛びまわり、それが通り過ぎたあとに咲くのは真っ赤な華だ。

その殺戮劇を、その舞うような体捌きを、私はその刹那見とれていった。

この大量のシヨウジョウの中、もちろん私のほうに向かうものもある。しかし私の半径五メートル以内に近づけるものはいない。

ナデイさんは、己の役目を全うしている。こんな私を守ってくれている。

「…！」

何を悩んでいるのか！ 私の敵は目の前にいる。そうだ悩みも自信も私には必要ない。私は私の出来る全力を持って眼前の敵を倒すのみ。それが私の役目！

ぼんっ

再度、魔力放出。今度は攻撃のためじゃない、移動のためだ。ドラミタスはまだ立ち止まっている。今度は、私が攻める番だ。

ガアアツアアアアツ！

ドラミタスの目の前まで一秒もかからず辿り着く。咆哮とともに、

ドラミタスが私へと腕を振るった。
ここで、二つ目！

「ピヨ介！」

ピヨーーーーッ！

私の呼びかけとともに、ピヨ介が二度目の炎を噴く。
しかし、ドラミタスの方は最初ほどの動揺は無い。炎に構わず攻撃を続行した。

構わない。炎は一瞬の目くらましだ。この火炎の中、無理は通せても目を開けていることなどは不可能だ。

ぱあんっ！

さらに、魔力放出！ これも、攻撃ではない。ここで攻撃したところで、おそらく一度目の繰り返し。もう失敗はできない。
ならばどうするのか…？ 答えは、私の、全力だ。

ぱあんっ ぱあんっ

断続的に、私が空気を叩く音。

確かに私は、身体強化を持続的に使うことは出来ない。なら、隙がないほどに連続的に使うまで！

ぎしりぎしりと、私の身体が悲鳴をあげる。これほどの無理をしているのだから、当然か。けれど私は止まらない。何度も繰り返ししてきた自問自答が、私の中で今この瞬間も木霊する。私を支えてくれ

る人がいるから。私は、私だけで戦ってるわけじゃない。その人も、今この瞬間戦っている。だから私が止まる道理なんて欠片もない。

私の狙うは首ただひとつ。背後に回って今度こそ一撃で決める。

ぼんっ

最後の魔力放出が、私を押しして最高速にのせる。周囲の景色なんてもう見る暇も無いが、きつと止まって見えると思う。

そして、剣を構え、まるで止まっているかのような私の敵の首を、さつと薙いだ。

ずざっ

断続的な魔力放出の加速が切れ、私は地面へと勢いよく倒れこんだ。大きな隙ではあるけれど、でも私には確信があった。

そしてそれに答えるかのように、ずん、と地面が揺れた。まるで、すぐ近くで重いものが地面に倒れたかのように。

私は後ろを見ようと、痛む身体を、いや、もう痛みもろくに感じないほど疲労しているが、必死で起こした。でも、結局途中で力尽きてしまう。意識も薄れ、起こしかけた身体はまた地面に倒れそうになった。

けれど、その前に私の身体を誰かが支えた。

誰か、なんて、考えるまでも無いけれど。

私は体の力を完全に抜き、瞼を閉じると同時に意識を手放した。

シヨウジョウはドラミタスが倒れると同時に散っていった。そのうち適当な個体がリーダーになるだろうが、依頼のターゲットはドラミタスのみだ。他など知った事ではない。

「ピヨたんもお疲れ様」

ピヨー

私が抱えているファナの頭からちゃっかり私の頭へと戻っていたピヨ介へと、私は声をかけた。

それにしても、本当によくやったものだ。

ドラミタスの死体の首はすっぱりと切れている。ここまでの隠し玉とは、ファナには本当に驚かされる。

力尽きたのか、ファナは私に抱えられて呑気に寝ている。

私はファナの幸せそのの寝顔を見て少し笑った。

「これなら、すぐに一人前になれそうだね」

ムロ

うん、その後は予定通り消えるとしようか。

こんにちはファナの本気（後書き）

ナデシコが消えるまでが前半ですかね。

後半は『魔王』が来ますし。

いつだっては「国事情」(前書き)

今回はこの世界のことでもろもろですね。

設定って、出すタイミング難しいですね。

こんには亡国事情

ルナファスの南西にある町、ウエルザス。私にとってはこの町は通
過点に過ぎない。

ソレスティほどの規模はなく、きっとウエルザスの方が町としては
‘普通’に該当するのだろう。ソレスティはルナファス王国とアデ
イアン皇国からの人の出入りが激しいという話だったので、規模が
大きかったのはそういうことだ。おそらく森を通らずに町と町をつ
なく街道を通っていれば、他の旅人や商隊などに出会えたのではな
いだろうか。

私はウエルザスのギルドにドラマタスの討伐証明部位、ちなみに親
指である、を持ち込んでいた。何故別の町で受けた依頼を他の町で
清算できるのか？ そう疑問にも思ったが、この世界のギルドはな
かなかハイテクだった。

その秘密は、どこのギルドにもあるというあの、私が冒険者登録し
た時にも使われた水晶である。実はあれ、子機やら中継機やらそう
いう機能を持つているらしく、全ての水晶を統括する本体はギルド
本部にあるのだとか。つまりだ。各ギルド同士で共有する情報は全
て一度その本体に蓄積される。そしてその全てを処理し、並列化し
ているというのだ。もしかやこの世界における最大級の魔導具ではな
かるうか…？ それは正にネットワーク、それを一つの組織が占有
しているようとは。おそらく、冒険者ギルドの持っている力は私が思
っている以上に強力なものだろう。

ともかく、無数にある依頼すらいちいち処理しているが故に、こち
らは楽が出来ているという事だ。旅をしながら、旅の途中に依頼を
こなしてもわざわざ依頼を受けた町に戻る必要はない。とても便利

ではないか。

「はい、間違いありませんね。では、カードに依頼達成の承認印を入力しますので、失礼いたします」

「はいはい」

私は受付嬢にカードを渡して、なにやら操作している受付嬢の手元、つまり水晶を見つめた。…この水晶、盗まれるとかはないのだろうか。

ああいや、子機は常に親機とつながっているものだ。そんなものを盗もうなど無意味か。そもそも、この世界で情報を司っているとも言えるようなギルドを敵に回すなど、それこそぞつとしない話だろう。ギルドがちよちよつと情報を弄くれば、一気にその人は世界の敵となるわけだ。逃げ切れるわけがない。

「はい、ありがとうございます。それと、こちらが今回の依頼報酬となります。それでは、またのお越しをお待ちしております」

「はい」

ところで私名義で依頼を受けていたものだから、ファナじゃなくて私の方に依頼成果が記録されるんだよね。これからはファナに依頼を受けてもらうとしよう。

「あ、すみません」

まあとりあえず情報収集なのだ。

「はい、なんででしょうか？」

「私は『奈落』に行くつもりなんですけど、近くに町とかありませんか？」

「『奈落』の近くの町、ですか？ それならフレイディアがそうですね。冒険者なら誰でも知っているはずなのですが…」

「ふーん。詳しく聞きたいんですけど…」

「それは」

「おおーい、まだかー。待ってんだけど」

と、私の後ろにいつの間にか並んでいたらしい冒険者が声をかけてきた。

しまった、こんな質問を受付でやるべきではなかったか。

「申し訳ありません、後がつかえて居るようなので…」

「いえー、こちらこそすみません。失礼しますね」

さてどうするか… 適当な冒険者捕まえて聞こうかな。フレイディアの情報は冒険者の間では常識のようだし。

「おーい、ファナー」

「あ、はい」

私は待たせておいたファナーを呼んだ。あるいは、ファナーが知っている

るかもしれない。あ、そういえば、奈落、に行く事ってフアナに話したっけ。

「フアナ、一応私は、奈落、に向かっているんだけど、もう言っただけ」

「え、聞いてません」

「あちゃーそうだったか…まあ今言ったし、いいよね。それで、奈落、の近隣にある町、フレイディアってところに拠点を構えることになりそうんだけど…その町について、フアナは詳しい事は知らない？」

「フレイディアですか。すみません、名前は知っているんですが、詳しい事までは…」

これは本気で適当に人を捕まえるべきかと私が思案していると、一度一人の冒険者が悩む私とフアナに声をかけてきた。

その冒険者は先ほど私の後ろに並んでいた男だった。そして、その耳は人間よりも尖っている。

「よ、どうしたんだ嬢ちゃん。さっきも受付で何か聞いてたようだが」

うん、この人にしよう。

私は内心で頷いて、彼に話を聞くことにした。

「フレイディアの詳細、か？」

私達に話しかけてきたエルフの冒険者、エリックは太い腕を持ち上げて頭を掻いた。

私のエルフのイメージは非力そうで美形、だったのだが、彼はそれをぶち壊してくれた。いや、美形といえば美形に見えるが、何故彼はこつも筋肉質なのだろう？ 背中には斧を背負っている上に、着ているのはプレートアーマーだ。ローブじゃない。そういえば今まで出会った男性はみんな筋肉質な気がする…

しかしムキムキの身体の上にサラサラした金髪の美形のお兄さんの顔が乗っかっているのは如何ともすべからず。もう自分が何言っているのか分からない。

「あー…そんなら地図見せながらの方が分かりやすいな。確かグスタフが持ってたか…こつち来てくれ」

と、エリックの考察を私がしているうちに何か考えついたらしい。エリックは私達に手招きすると、ギルドにいくつかあるテーブルのひとつに歩いて行った。私はファナと顔を見合わせて、ファナが頷いたのを確認して彼の後について行った。

「なんやエリック、終わったんか？ て、どなたはんやその子ら」

そのテーブルにいたのは四人の男女。魔法使い風の人間の男性、戦士風の獣人の男性、これまた魔法使い風のエルフの女性、そしてどちらかといえば剣士といった感じの人間の女性で四人だ。所謂冒険者パーティというやつだろうか、なかなかバランスがよさそうでそれぞれ腕も立つらしい。

変わった口調でエリックに声をかけたのは戦士風の獣人だった。茶色い犬のような耳がチャーミングな若い男だ。

「なんでも、フレイディアのことを知りたいらしくてな。グスタフ、大陸の地図はお前が持ってたよな」

「…ああ」

答えたのは魔法使い風の人間、グスタフというらしい。こちらはロブを着こみしかめつづらをしている。無口なところが見た目ともにしっくりしていた。

彼はロブから一枚の巻紙を取り出し、テーブルに広げた。その紙にはなるほど何かの線や名前が書き込まれている。もちろんカタカナだ。

「ああ、それだそれだ。…しかしよ、グスタフ、お前は相変わらず情緒が無いな。まずは自己紹介しろ」

そう言うとエリックは私達の方を向き、自分を指し示した。

「さっきも言ったが、俺はエリック。見ての通りエルフで、戦士をやってる。で、こっちから」

そして、次に指したのはエルフの女性。彼女はエリックを手で制して口を開いた。

「私の名前はシャーリー。私もエルフで、魔法使いをやってるわ。パーティーでは補助が主な担当ね」

「私はファリス。人間で、職種は剣士だ」

エルフの魔法使い、シャーリーの紹介が終わると、次に口を開いたのは人間の剣士、ファリスだった。赤い髪が肩より少し長く伸びていて、毛先は少し波打っている。目つきは凜々しく、クールな印象を他に与える。紹介も言葉少ななものだった。

「で、わいがベラフ。獣人で、戦士やつとんねん。よろしゅうな、嬢ちゃん」

ファリスの次は先ほどの獣人、ベラフというらしい。この世界にも関西弁があるのだろうか、いや、実は似非関西弁？ 彼の場合、容姿よりその口調の方が気になる。そして最後は、

「…グスタフ」

魔法使いの彼だった。やはり寡黙で、ファリス以上に言葉が少ない。まあ、彼は彼なりにうまくやっているのではないだろうか。

「私は、………… ナディです。まあ、人間で一応拳闘士らしきものをやっています。…ちなみに頭の上にいるピヨコはピヨ介っていいいます」

ピヨ

で、名乗られた以上はこちらも名乗るべきなのだが、何だろう私の紹介は。名前は私と『ナデシコ』を出来るだけ結び付けられたいので、ファナの呼び方でパクらせてもらったが、それ以外のプロフィールも曖昧すぎる。一応前に拳闘士で登録したものの、正しかったのかどうか。種族にしても、どちらかといえば純正というより人間モドキだし。

「あ、あ、私はファナ、です。よろしく願います…」

ファナは目をあっちこっちに飛ばしながら、最後は尻すぼみになりながら短い紹介を終えた。今更だが、ファナは少々人見知りなところがあるらしい。冒険者をしているのだし、知らない人ともそ知らぬ顔で平然と挨拶が出来るようになればいいのだけど。

「それじゃ、ナデイ、ファナと呼ばせてもらおう。いいか？」

エリックの突然の呼び捨て宣言。と、仰々しく言っではみたもの、ちゃん付けより私はこちらの方がいいのですぐに了承した。ファナも私に続いて頷く。

エリックはそれを確認すると、テーブルに広げられた地図の方を向いた。

「そんじゃフレイディアのことだが…まずはここが今いるウエルザスで」

地図に書かれているのは三角形にも卵にも見えるような、ごつごつした線でできた図形。これが、この世界というか大陸だ。底辺あたりに位置するのがリーディアナ王国、その上、北側はルナファス王国。三角形の右側にあるのがアディアン皇国で左側にあるのがダグラス帝国だった。そして、ルナファス、アディアン、ダグラスが囲むような広大な空白地帯、そのダグラス帝国に近いところに、‘奈落’と書かれている黒い部分があった。

エリックはルナファス王国の右下あたりにあるウエルザスと小さく書かれている町を指差し、そしてそのまま左上に指をずっと移動させ、‘奈落’からほど近い、南に位置するところにフレイディアと

書かれている町を指差した。地図で見てもよく分かるが、このフレイディア、町にしては異常に大きい。ソレスティですら話にならないほどだ。

「で、ここがフレイディアだ。…気づいたと思うが、でかいだろ？
この町はな、どこの国にも属さない自治区なのさ」

「フレイディアはね、‘奈落’とあわせて『冒険者の聖地』って言われてるわ。帝国同様、大陸一冒険者の集まる場所よ。当然よね、大陸最大のダンジョン‘奈落’に一番近い町で、設備も整ってる。その上、冒険者ギルドの本部があるんだから」

「ははは。で、その実態は冒険者ギルドが町を統治しとる、ちゅうところやな。こんな知られとるのに、まだ大つぴらにしてへんところが浅ましいと思わんか」

「言いすぎだぞ、ベラフ」

「すまんすまん。せやけんど、ファリスもそう思つとるんちゃうか」

「…否定はしない」

「せやろせやろ。ははははっ」

「とまあ、こいつが勝手にしゃべくってしまったが、フレイディアつてのは冒険者ギルドが中心になってる大都市だ。この町じゃ、冒険者ギルドの上層部は言うに及ばず、Sランク以上の冒険者の発言力もかなり強い。今でこそあまり他に干渉していないが、全盛期はSSランク冒険者の各国に対する影響力はすごかったらしいぜ。大体、フレイディアといやあこんなところか」

なるほど…天使の言っていた『相応の権利』というのはいくらとか。全盛期ほどは無くとも、SSランクの権力は今も相当のレベルで健在だろう。

「ありがとうございます。あの、ついでに聞きたいんですけど、ここって何なんですか？」

地図を見て少し気になっていたのだが、三角形の頂点の部分、‘奈落’の空白部分とは別の空白があるのだ。この場所は‘奈落’がダグラント帝国と大体等距離にある。私はフレイディアのことを聞いたついでに、そこを指差して尋ねた。
すると、彼ら五人の、ついでにファナの空気まで凍りついた。

「え、どうしたんですか？ ファナも…」

「…ナデイさん。そこは、十二年前にはある国があったんです。と言いますか、この事は子供でも知ってることなんですけど…」

「？ 何で？」

「そっからかいな…そっちの嬢ちゃんは、知つとるみたいやな。エリック、シャーリー、ついでに嬢ちゃんに説明したってや」

「ああ。ナデイ、この国はファナが言ったように十二年前に滅びて、今も国の中心部には誰も住んじやいない」

「どして？」

「それを今から、最初から説明するわ。」

その国はヴェリアラント王国って言ってね、ルナファス王国よりもさらに魔法が盛んな国だったわ。そして、国で最も強力な魔法を扱っていたのが王国を治める王家だったの。その王家の持つ力の秘密は、王家が代々契約している聖剣にあると言われていたわ。王家で子が生まれて、その子が十六になる頃に、王都から少し離れた場所にある聖地の中にある塔に安置してある聖剣と契約をしに行く。そんなしきたりだったかしらね」

「王国がまだ盛んだった頃は、帝国と半ば戦争状態でな。仕掛けたのは帝国だったが、聖剣が欲しかったのが、‘奈落’が自分達同様近くにあるのが気に喰わなかったのか、今ではよく分からんな。兎に角連中は、王家の頭首、つまり王が出てくる前に片をつけようとしたのさ」

「王が出てきたら、まずいの？」

「ああ、まずいのさ。王であるが故に迂闊には動けんが、戦場に出れば戦況は一日で一変すると言われていたな。さつき聖剣と契約していると言ったが、王は少々違ってな、聖剣と契約している上に、ただ一人の聖剣の担い手でもあるのさ。いや、むしろ契約つてのは担い手になるかならないかの準備段階でしかないのかもしれない。聖剣の担い手が聖剣を一度振れば、万の兵士が消し飛ぶってー伝説もあつて、帝国もかなり警戒していた」

「けど、王国の兵の練度も高くて、帝国はかなりの苦戦を強いられていたの。その上、ついに王が動くっていう噂も流れてね。帝国も相当焦っていたらしいわ」

「でも負けて滅んだのは王国の方なんですよね？」

「それが、ちょっと違うのよ…王国を滅ぼしたのは帝国じゃないの。そもそも、戦争に負けたぐらいでこれほど語り草にされることはないわ」

「…どういことですか？」

「今回の戦争は王国の勝ちか、そんな空気が流れていた矢先だった。突然、モンスターの大量が現れて王国を襲ったんだ。王国の周辺から、はたまた‘奈落’の奥底から、だ。

膨大な数のモンスターが村を町を蹂躪し王都に攻め入って、中にはSやらSSやらの化け物どももいたらしいが、帝国を押ししていた王国もひとたまりもなかった。聖地には王家の人間がいないと入る事は出来んが、モンスターは聖地の周辺、空も陸も取り囲みやがったのさ。お陰で王も聖剣を取りに行く事が出来ず、王家は王国ごとモンスターの前に倒れちゃった」

「……」

「モンスターは王国を滅ぼしたあと、‘奈落’やそれぞれの場所に戻ったものたちもいたみたいだけど、今も元王国を徘徊しているモンスターはたくさんいるらしいの。その中にはとりわけ強力なものもいる。そのせいで、人は住めなくなっているの」

シャーリーとエリックはそこまで話して大きく息を吐いた。ずいぶん長く話させてしまった自分としては少々心苦しい。

「ご苦労さん。噂じゃ、帝国が何かしたんやないかって話もあるんやけどな…モンスターを人がどうにかできるわけないやろって話やわ。ま、そう言うてもタイミングがよすぎるんやけどな。モンスターの大量進なんて、後にも先にもこの時だけやねん」

「……んー」

モンスターの成群に完膚なきまでに滅ぼされた大国。聖地に行かせまいとするような妙に統制のとれた理知的な行動。

モンスターの、大行進。 キーワードは

『聖剣』と『魔王』、か。

みんなには亡国事情（後書き）

自分の描写の足りなさにふがいなさを感じる今日この頃。書きながら文章力？のレベルアップを目指します。

こんにちは魔力もろもろ（前書き）

題名についての突っ込みはなしな方向でお願いします。

最近限界を感じるんですよ、この題名方式。

それにしても、最近固有名詞が増えてきました。いつか自分で間違えるかもしれませんね。

こんには魔力もろもろ

十二年前のモンスターの大打進、これが、まだ誰にも知られていない『魔王』の仕業だとしたら、やはり目的は『聖剣』、ひいてはその担い手となるヴェリアラント王家。『聖剣』とは『魔王』にとつてそれほど脅威だということになる。

ダグラント帝国との戦争に乗じて王都が手薄になったところを狙い、そして王が『聖剣』を使うおそらくほぼ直前にモンスターは先手を打っている。担い手でなくとも、王家の人間の戦闘力は相当高いはず、そして彼らが戦場に出ることもあつたはずだ。戦力がばらけるのを待っていたという可能性は十分にある。

何にせよ、モンスター、あるいは『魔王』（仮）の動きは計画性をおわせる。十二年間ずっと沈黙を守っているのも計画の内か、それとも何かを待っているのか、動けない理由があるのか。

…この世界に私達を送り込んだのは天使で、そしてその主題は『魔王』。まだ『魔王』が世界に知られていないというのなら、遠くない未来に現れるのは間違いない。

怪しいのは、『奈落』。こここの深層は、まだ誰も見た事が無いという。

（一人になったら、『奈落』の深奥と『聖地』の塔を調査してみようか…）

「いろいろと教えてくれて、ありがとうございました」

フレイディア、ヴェリアラント王国のことを聞き終わり、私はエリックたちに頭を下げた。なかなか有意義な話が聞けたことで、私の行動指針も決まってきた。

きつとこれは面白くなる。

「いってことよ。…それで、ナディ、ファナ、お前達はフレイディアに行くんだよな？」

「…？ ええ、何か問題でも？」

「いや、そういう話じゃない。俺達もフレイディアに向かうつもりなのさ。フレイディアに向かう商隊と一緒に。つまり、商隊の護衛依頼を受けたってことだ。お前達も受けてきたらどうだ？ 考えようによっちゃ、楽にフレイディアに着けるぞ。確か依頼のランクもこだったはずだ、問題ないだろう」

護衛依頼は、本来のものより少し高めの難易度設定がされる。つまりこの依頼の場合、D程度の難易度だということになる。それほど高く無いということは、強いモンスターなどは道中にいないということだろうか？ とにかくこの提案、受けない道理もない。

「私はいいと思うけど、ファナは？」

「私はナディさんに着いていきますー！」

「あ、ああ、そう」

ファナの意見を聞いてみると力強い返答が。それが子供のようで微笑ましく思い、私はついついファナの頭をぐりぐりと撫でてしまった。本当にファナのことを気に入ってるんだな、私は。

「それじゃエリックさん。依頼、受けておきますね」

「ああ。俺達は今から用事があるからもう行くが、どうせ集合場所であうことになるはずだ。じゃあな」

「お、もう時間かいな。ほなな」

エリックたち五人が立ち去ったあと、私達は掲示板前に向かった。冒険者でゴった返しているが、私には関係ない。ぬるぬると人の間を通り抜けて掲示板の眼前まで向かう。途中、ファナが人ごみに巻き込まれたようだが、まあ大事には至っていないようなのでとりあえず放置。

掲示板にはたくさんの紙が貼り付けられていて、ぱっと見は激しく探しくそうに見える。が、よく見るとちゃんとランク別で分けられていて、ギルド職員の質の高さをうかがわせる。

私は掲示板のランクの依頼群のところへ視線をやった。…さっきのちよっと撤回。めっさ多い、見つからない。

「えーと、どれかな」

C、C、C、と。

うーん、くそう、どこだよ。

「ナデイさん！ 見つけました」

なん、だと？

きよろきよろと掲示板を見回していた私の前には、一枚の紙を握ってニコニコ笑っているファナの姿が。いったいいつの間にあの人ごみを抜けてここまでたどり着いたというのか。しかもその笑い顔は私の専売特許だというのに。まるで勝ち誇っているかのように見える！

恐ろしい子！

「？ どうしたんですか？」

「別に。遊んでただけ。行こっか」

きよとんとしているファナに私はけろっと返して、ファナを連れて受付に向かった。

護衛依頼の集合時間は明日の早朝らしい。紙には残り四人的なことが書いてあったが、一応ギリギリまで受け付けているらしい。全員がそろると、私達を含めて十四人の冒険者による護衛となる。

旅路はここウエルザスを出立し、ルナファスと空白地帯の境にある町ポルターダを経由して、フレイディアに向かうそうだ。

そういえば、クランクといえど護衛依頼は他の依頼とは違い、フランクのファナには難色を示された。結局現在クランクの私が一緒にいた事と、今回の護衛ルートは空白地帯では比較的安全だということ

とで受けることが出来た。

で、私達が今日は何をするかといえば。

「はあああああつ！」

「つた！」

町の外で組み手(?)です。

モンスターとは戦わせてきたけれど、まだ人との本気の戦闘は経験させていない。もう木剣は止めて真剣を持たせてはいるけれど、こういう組み手でも迷いなく振れるぐらいになつてくれるといいのだけれど。それはもちろん迷いなく斬れという意味ではなく、本気で振っても寸止めできるぐらいの実力をつけて欲しいということだ。

またレベルの方も、ウェルザスについてから私はファナのステータスを見てみたが、かなり上がっていた。

名前	ファナ
種族	人間
レベル	32
筋力	18
耐久力	21
魔力	22
抗魔力	23
感覚	26
スキル	“天才”、“祝福”、“奇運 正”、“×× L V・2”

スキル“天才”はかなりずるいと思う。数日で10も上がるとは思っていたなかった。

私？ 私はパワーレベリング+“天才”でチートくさいのでほぼ論外。‘死神’とやったときはすごかったね。

そういえば、ファナの持つている“祝福”、これも大概だ。レベルが上がったときは普通は3ポイントしかステータスが上昇しないが、彼女の場合はこれにランダムで+1されている。そのうち、Sランク以上もものともしなくなるのではないだろうか。

さらに、魔力放出を自在に使えるようになってきたファナは以前とは大違いの実力である。連続での使用はまだ数をこなせないようだが、それでもそのときの高速戦闘は凄まじい。おそらくこれを使っている瞬間は、ファナの感覚も私同様かなり加速しているだろう。そうでなければあんな、ともすれば暴走に見えるようなものを扱えるはずもない。

私もファナの魔力放出を見て学び使ってみたが、これはなかなかすごい。爆発力が半端じゃない。それに私の身体は普通の人以上に、むしろ異常に頑丈だ。それゆえ魔力放出の、自身の身体を気遣った繊細な部分を無視して使っても大事に至る事は無い。以前一人でこつそり体当たりを試してみると、木々が鬱蒼と茂っていたはずの森に土肌が見える道が出来てしまった。そこにあつた障害物(?)は、私と衝撃波が散り散りにしてしまっていた。結果を見て慌てた私は、とりあえず寝ていたファナを惨状が見つからないところまで移動させて、朝起きて場所が違うことに首をかしげていたファナに素知らぬふりをしたものだ。

ところで、こうして魔法やら魔力放出やらで魔力を使うようになって、私は魔力というものをはっきり感じられるようになってきた。が、未だに生成経路が分からない。どうやら空気中やあらゆる物質

中にある魔力の滓のようなもの、仮に魔素と呼ぶが、これを取り込んで魔力に変換しているようなのだが、どこで変換しているのかが私には皆目見当がつかない。

魔力を取り込み変換する量、一度に放出できる量、体内に溜め込める限界量、これらにも個人差があるが、この差をつくっているのは身体だろうか？ いや、それもあるだろうが、それだけなら私が分からないわけがない。もっと他の、何かの要素があるはず。

因みに前に述べた魔素だが、これはなかなか面白い。魔力も似たようなものだが、ほとんど物理法則を無視してこの世界に無限に存在している。これならいくら取り込まれようと枯渴することはないのだろう。多々ある魔導具のためだろうか？

話がいふんとそれてしまった。

私が何を言いたいかといえば、魔力をはつきり感じられるようになったお陰でファナの切り札、魔力放出のタイミングが手に取るように分かるのだ。いくら高速で私の視界外に逃れようとしても、無意味すぎる。最初は自分の魔力だけだったのだが、いつからこれほど感じられるようになったんだろうか。

「は！」

「あ、ふっ!？」

私の背後に回ろうとしたファナに、私は蹴りを飛ばした。魔力放出を使い終わった直後はその加速から体勢を戻すため、これに長けたファナですら一瞬の硬直がある。彼女の場合連続使用などでそれを補っているが…

しかし、そもそもだ。

「ファナ」

「は、はい」

「ファナの魔力放出は確かにすごいけど、ちょっと単調」

「う…ごめんなさい…」

魔力の動きを感じるまでも無く、先が読める。今はかなり改善されているが、いつかの彼女の太刀筋を思い出させる。

「んー…もつと技巧を凝らしてみたら？」

「えと…それってどんな感じですか？」

とりあえずアドバイスらしいことを言ってみたら、やっぱり疑問で返されてしまった。まあ仕方が無い。ぶっちゃけ私は教える事が苦手だ。こうしてファナの身体に教え込むぐらいのことしか出来ない。

というわけで、こういう時は実演してみせるのが私のやり方だ。

「そうだね、たとえば局所的に使ってみるとか。…えーと。あれでいいか」

私の視線の先にはこれまた都合よく岩が一つ。…こういうことを予見してこの場所を稽古場を選んだんだけどね！

私はその岩の前に立って拳を構えた。そして、私は拳を振らない。つまるどころ。

「パイルバンカー拳撃射出！」

腕部でのみの魔力放出。少し遊びを入れたのはご愛嬌。しかし。

「げ」

ばがあああああああん！

「す、すごいです！」

確かに岩は粉々に砕け散った。以前岩を破壊したときとは比べ物にならないほどに。

しかし、これはあまりフアナに使わせたくない。

「あー、フアナ、やっぱりこれ、できるだけ使おうとしないでね。

フアナは剣を使うんだらうけど、それでも危険かもしれない」

「？　なんでですか？」

魔力放出は、単純で、しかし繊細な技術だ。それを忘れていた。私が拳を撃ち出したとき、うっかり腕が千切れ飛びそうになったのだ。というより私ほど頑丈な身体じゃなかったら右半身がぐちゃぐちゃになっていたかも知れない。

「んー…つまり局所的に爆発的な威力を出すために、身体に対する負荷も大きいんだよね。だから、私ぐらい身体が頑丈か、あるいはそれに耐えられるぐらいの身体強化できないと使っちゃ駄目」

「そうですか…分かりました」

フアナが渋々頷くのを見ながら、私はふと感慨深く思っ粉々にな

った岩の方を見た。ピヨ介の卵？を見つけたのもこんな岩の中からだっただった。

「この岩を見ると、ピヨたん初めて会ったときを思い出すね」

ピヨ？

「あー…ピヨたんはどこから生まれたとか知らないか。覚えてるとしても金の卵から出てきたことぐらいかな」

ピヨピヨ

あの時は流したけど、結局ピヨ介がなんなのかがよく分からない。もしやこの世界のピヨコは岩から生まれるのだろうか。…ならなぜニワトリがいるし。はっ、ニワトリが岩の中に卵を産みつけているのか。なんだろうその謎過ぎる行動。

「…実はあの岩は山のような岩のほんの先端で、本体は土の中に埋まっただけ、何万年もそこにあることで自然のエネルギーを吸収し、ついには中に命を宿した…そして私の拳がそれを打ち抜いたとき出てきたのが、岩から生まれた石」

ピヨ？

「なんでもない。これは猿の話だっけ。ピヨたんは鳥だもんね」

ピヨ ピヨ

岩に思い出を感じながらピヨ介と戯れる私の傍らで、渋々と頷いた

ファナはすぐに何かを見据えるように虚空に目をやり、魔力を漲らせていた。その魔力の量は、レベルで大きく上回るはずの今の私の総魔力量に匹敵している。

相変わらず、ファナはスキル以上の天才っぷりを発揮している。

きっと今度も私の予想以上の成長を見せてくれるだろう。

私はファナを横目で見ながら、やっぱり期待で胸を躍らせていた。

こんにちは魔力もろもろ（後書き）

このごろ執筆速度が落ちています。以前、不定期更新になるかもーと書いという結局こんな感じで続けてますが、いつ不定期更新になるか分かりません。今からこうして予防線張っておきます。

二人には商隊とその護衛（前書き）

やっちまいましたね。

もういっその回飛ばそうかと思つぐらいな回でした。大したイベントもないですし。

名前はあるけど結局モブってどろどろしよう。

こんにちは商隊とその護衛

翌日の朝早く、私はファナ、ピヨ介とともに集合場所へと向かった。既にそこには九人の冒険者らしき者達が集まっているようで、それぞれのグループで集まって雑談をしている。これで私達二人を含めて十一人である。十四人まではあと三人、ちゃんと集まったのだろうか。

「おー、昨日の嬢ちゃん達やないか！ おはようさーん」

「ん？ ああ、来たのかなデイ、ファナ。おはよう。遅かったから、受けてないのかと思っていたよ」

その集まっていた冒険者たちのグループで私達に声をかけたのは、無論エリックたちである。彼ら五人も既に集まっており、かなり余裕そうであった。何がってそりゃ雰囲気だ。私とて緊張しているわけではないが、なんとなくファナの方はいつもより身体が固いような気がしていた。

「おはようございます、エリックさん、ベラフさん。それから、シヤーリーさん、ファリスさん、グスタフさん、おはようございます」

「お、おはようございます…」

ピヨー

挨拶はいいものだね、円満な人間関係を築く第一歩だ。かくいう私の口癖はこの挨拶だったりする。一番好きなのは『こんにちは』

です。時間帯が長いからかな。

「おはよう」

「…おはよう」

「……」

パーティーの残り三人、シャーリー、ファリス、グスタフの挨拶も揺るぎない。シャーリーは優しく、ファリスはクールに、グスタフは小さく首肯を一つ。挨拶一つで性格がとも出ている。特にグスタフはそれが顕著だ。終始しかめっ面をしていて無口な彼は無愛想に見えがちだが、しかし頷くだけとはいえ私の挨拶にわざわざ返礼している。不器用なだけで気はいいのだと思う。…酒で酔わせたらきつと面白い。

「…？ あの、エリックさん、なんかあそこの人たち、エリックさん達のこと話してませんか？」

ふと、ファナがエリックにそう言った。

私もそちらを見てみると、さっきは気づかなかったがそこにいる三人組の話題の中心はなるほどエリックのパーティーのようだ。話の合間ごとにシャーリーやベラフたちにも視線が飛び、『ミクサス』だとか『死神』殺し』だとかそういう単語が聞こえる。

「ん？ …ああ、大方、俺達AランクのパーティーがCランクの護衛依頼を受けてるのを気にしてるってとこだろっな」

「ただ珍しいだけなのかも知れないわよ？ 私達は最近Aランクになつたパーティーだもの」

エリックが頭を掻きながらわずらわしそうに言うと、シャーリーが苦笑しながらそう言った。

「時々聞こえる、『ミクサス』ってなんですか？」

「『ミクサス』ってちゅうんはわいらのパーティネームやな。嬢ちゃんもパーティ制は知ってるやろ？ わいらの場合、種族混成パーティやからな、この名前にしたわけや」

パーティ制。確か二人以上の冒険者でパーティ単位でギルドに登録できるのだったか。依頼を受けるときもパーティ名義で受けることができ、功績もパーティ単位で記録される。パーティ内の最もランクの高い者のランクがパーティランクとして登録され、ランクの低いものでも高いランクの依頼を受けられるような制度だった。それほどメリットでもないけど。どうにせよ、私は誰ともパーティを組むつもりは無かったので聞き流していたものだ。今もそのつもりはない。

「そういえば、種族がばらばらですね。人間、獣人、エルフ…パーティを組んでるといことは、長い付き合い、なんですよな？」

それは私も気になっていたことだ。聞くようなことでも無いかと思つて、口には出さなかったけど、ファナが聞いてしまった。まあ積極的なのいいことだと思うよ。

「そうねえ…私とエリック、ベラフはアディアン王国出身の幼馴染なのよね。アディアン王国は亜人中心の国だから、それは言わなくてもいいかしら。それで、最初は三人のパーティで細々やってたんだけど…ソレスティに行ったときにまだちっちゃかったファリスと

知りあったのよね。あの頃は可愛かったわー、ちょこちょこ私達のあとについてきて」

「な！ シャ、シャーリー、やめてくれ！」

楽しそうに思い出を話すシャーリーに、ファリスは自分の髪と同じぐらい顔を赤くして慌てて止めに入った。どうやら本当に長い付き合いらしい。

…それにしてもアディアン皇国は亜人の国なのか。この世界で亜人が人間同様の権利を持つてるのは一国の後ろ盾があるからなのかな？

「ははは。ま、それで結構若いうちにファリスも冒険者になって俺達のパーティーに入ったんだが、そのときちよつと行き詰っててな？

シャーリーは魔法は使えるが、適正は補助に偏っていてあまり攻撃性のあるものを扱えないんだ」

「ま、そういうわけでわいらは攻性魔法の扱える魔法使いを探しとったんや。そしたら、ファリスのツレがグスタフを紹介してくれたんや。…そっぴやファリス、あん時のツレとはあんじょういつとんのかいな？」

「あ、あ、彼は、別にそんなのじゃなくて…それに、地元は辺境のほうだから、むしろソレスティにいたのもちよつとだけだったし…」

いつの間にもやら内輪で話が展開されている。ファリスのイメージはクール美人だったのだけど、どうやらあまりそういう？話には免疫がないのか、シャーリーのとき以上に顔を赤くしていた。

あれ、私達なんの話してたんだっけ。

「みなさん、集まったようですね！」

と、話題の流れに私が首をひねっているといつの間にか来ていた商人風の、しかし若い優男が声を上げた。既にこの場には私達を含め十四人の冒険者がいる。どうやら、全員集まったらしい。最後に来ていたのはフアナと同じ年ぐらいの少年少女三人組だった。

「私ワタクシ、今回の責任者のロドラスと申します。この旅の間はみなさんよろしくお願いいたします」

ロドラスはそう挨拶しながら浅く頭を下げて、眼鏡のブリッジを指で押し上げながら再度口を開いた。

「今回は急ぎではありませんので、比較的安全なルートを通る事になることはご存知でしょうか。しかし、モンスターや盗賊はもちろん出る事もありますので、くれぐれも気をつけてください。…いえ、失礼しました。冒険者の方に旅の間は気をつける、の忠告はありませんでしたね」

特に皮肉の気配も見せず、苦笑しながらロドラスはそう言った。そして一度集まっている冒険者を見回し、こう付け足した。

「ところで皆さん、お互いの紹介はおすすめでしょうか？ それなりの旅路になりますので、コミュニケーションはとっておいた方がよろしいかと。出発まではあと三十分ほどありますので、その間にお願いします」

言い終わると、ロドラスはすたすたと立ち去っていった。

そういえば…そうなんだろうか？ 挨拶が大好きな私としては決して吝かではないのだが。

ここに集まっているのは十四人の冒険者。お互いの名前も呼べないのは難儀だろう。

しかし…誰かがリーダーシップを取らなければ進まない。

私？ ビジュアル的にほぼ論外。フアナも同様、それ以前に性格的にまだ無理。ロドラスがやればよかつたんじゃないだろうか。

まあ、うってつけな人材は既に私の隣に居るのだけど…

そう思つて、私はエリックに視線を送つた。私だけではない、ミクサスメンバー、さらには他の冒険者達もだつたりする。

「…あ、分かつたよ…俺がやる。」

依頼主はああ言ったが、どうせこの旅の間だけだ。お前達もこの場で密な関係をつくるつもりは無いだろう。そういうことは各自でやるといい。

というわけで、紹介は名前、個人ランクだけで構わん。俺から時計回りでやっていくぞ。俺はエリック、Aランクだ」

渋々と頭取を引き受けたエリックは主旨をまとめるとさっさと紹介を終えてしまった。

「私はシャーリー、Aランクです」

「ベラフや、ランクはAやな」

「…ファリス、Cランクだ」

「…グスタフ、B」

ミクサスメンバーもエリックに続いて次々に紹介を終える。人をまたいで尻すばみになってゆく紹介は、聞いていて面白い。ともかく、次は私達の番か。

「ナデイ、Cランクです」

「えと、ファナ、Fランクです」

私達が終わると次はその隣、最後に来た三人の少年少女のパーティだ。まず口を開いたのは茶髪のやんちゃそうな少年だった。持っている武器は剣、まだまだ経験は浅い。

「お、俺はカルロス、Dランクだ」

「僕はフラツカ、Dランクです」

「私はアニス、Dランク」

その少年のあとに、眼鏡をかけた真面目そうな少年が続き、最後に金髪のこれまた無口そうな少女が紹介を終えた。それぞれ、杖と剣を持っている。杖は、魔法の発動補助媒体だろうか？ 少なくとも魔法使いらしき者があれを持っているのははじめて見る。それにしても、この世界は剣を使うものが多い。もっと他に無いのだろうか。

「俺はオルキート、Cランクだ」

「ギルバート、俺もCだな」

「アルバートと申します。ランクは、Cですね」

エリックたちのことを話していた男三人の紹介が終わると、最後に残っていた一人が、口を開いた。どうやらソロらしい。

「レイラ。Aランクだ」

クールな雰囲気、黒というよりダークブルーの髪色をした美人だった。が、それはファリスとは違いかなり温度が低い。その腰にさしているのはやっぱり剣で、しかし保有魔力も大したものだ。そして、彼女は軽装備である。スピードでの攪乱と魔法の補助が主体の魔法剣士だろうか？

今回集まっている冒険者の中では、私を除けばこの女性が一番強いだろう。それこそ、バックスと同じぐらいには強い。そう、バックスと同じ。

全員の紹介を終え、タイミングでも見計らったのかロドラスがやってきて私達に声をかけた。

「そろそろ時間です！ 私に着いて来てください！」

まだ三十分経っていないのだけれど。やっぱりタイミングを計ってたな。

商隊はゆっくりとウエルザスを離れてゆく。

安全なルートでどうして十四人も冒険者を雇わなければならなかったのか疑問に思ったものだが、商隊の馬車がずらりと並ぶのを見て納得した。そもそも、『商隊』なのだからこれぐらいが当然か。この人数でなければ守りきれないのだろう。あのロドラス、このルートとはいえこれほどの荷を任されるということは、相当やり手なのだろう。若い優男な外見からは、なかなか想像しにくい。

冒険者十四人はそれぞれの場所に散らばり、穴が無いように荷を護衛している。私達も一応担当の場所守っているのだが、ファナは緊張しているのかかなり挙動不審にきよるきよるしている。：以前ソレスティに行った時の私はこんな風だったのだろうか。なかなか恥ずかしい。

そんなファナを横目に観察していると、ファナはくるっと私の方を向いて言った。

前のドラミタスの時はあんなに生き生きしていたのに、今のファナの顔は不安に染まっている。

「ナデイさん、何も起きないといいですね」

「それ、フラグじゃない？ ファナ」

「え？」

「みんなちは商隊とその護衛（後書き）」

何か書くつもりだったんですけど、何書くか忘れちゃった。

こんにちは『蒼天の霹靂』（前書き）

…（、・、）

文がなんだかよろしくないです。

今回は前半は導入？ですかね。

こんにちは『蒼天の霹靂』

何も起きなかった。

どうやら私のセリフが逆ベクトルのフラグになったらしい。

ウエルザスからポルターダの道中も散発的にモンスターが襲ってくることはあったが、個体としても数としても物足りなかった彼らは、私が何かする前に他の冒険者達に討ち取られていった。イノシシっぽいボアの突進が、エリックの斧であっさり真っ二つになる様はなかなか圧巻だった。

私達に関係のあることと言えば、強いて言えば例のモブ男三人に絡まれたことぐらいだろうか。あのファナと同じぐらいの三人の少年少女にも絡んでいたが、そちらはエリックたちに追い払われていた。それでこちらに来たのだろうか、私としてはいい迷惑だ。【怨】を使うまでも無く、ちょっと重圧じみた殺気を出しただけで去っていく彼らを呆れながら眺めたのは、もういい思い出だ。

ポルターダには一日滞在しただけで、すぐに発った。際立ったイベントはなく、私としては少々つまらない。…平穩が嫌いというわけではないが。

ファナの肩の力はポルターダを出る頃にはかなり抜けていた。どうやら何事も無くずいぶんと緊張が抜けているようだが、むしろポルターダからフレイディアまでの道中、空白地帯の方が本番だと思うのだが、彼女は分かっているのだろうか？ いくら安全ルートといえども、それは統計上の話で実際は何が起こるか分からないのが『空白地帯』だろうに。

そして、ファナの言葉のフラグはここになってようやく発揮される

のであった。

それは丁度商隊の気が緩んでいた時のことだ。

私も、エリックたちが少年少女に絡まれているのをのんびり眺めていた。絡む、といってもミ―ハー、と言った感じだ。ポルターダにいたときにはなんとなくエリックを“解析”してみたが、彼は‘死神’を持っていた。どうやら彼も、というより彼らも『‘死神’殺し』の称号を持っているらしい。そのことも聞かれていたが、エリックはわずらわしそくに、その称号は珍しいものではなく上の冒険者ならわりと持っている、と返していた。付きまとわれるのを、どうやら彼は嫌っているらしい。

私は、一人で近寄りがたい雰囲気を発散しているレイラとやらの方を見ようとしたとき、ようやくそれに気がついた。

空白地帯といえど、別にここには荒野が広がっているわけではない。緑だつて数多くある。そしてその時は広大な森を横切ろうとしていたのだが、その森の奥から感じたのだ。複数の気配、むしろ敵意を。

不気味に静まっていた森が、震え

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

凄まじい吠え声とともに、森からはおびただしい数のハウンドが飛び出し、商隊へと襲い掛かった。

この世界では、全てのダンジョンに『死体掃除屋』、と揶揄されるモンスターがいる。

モンスターの中でも最下層の、魔物と呼べるほどの力も持たない、『デスイーター』、『死喰い』という、痩せ細った小汚いハイエナのようなモンスターである。

肉のついていないようなその肉体を襲うモンスターもおらず、むしろいつも悪臭を放っているために近寄ることすら敬遠されている。ダンジョンで死んだモンスター、冒険者を問わず喰らい、いくら腐っていても骨までその痩せぎすの腹へと納める。…このモンスターがいるからこそ、ダンジョンが死体で満たされてしまうことが無いのだが、それでもデスイーターは嫌われ者だった。が、彼らが『昇格』した時、最下層の力は一変する。Fの下下の力は一気にDの上位にまで上り、それまで他の生きているモノと遭遇するとすぐ逃げ出すようなデスイーターは、正反対にまで攻撃的な『ハウンド』へと変わるのだ。

この多数のハウンドの攻撃は、言うなれば第一ラウンドといったところだった。

が、既にこの時点での脱落者達もいたが。

「う、うあああああ！！！」

パニックになる、商隊の商人達。それも仕方ない。護衛の数をはるかに上回るモンスターが大挙してこちらに押し寄せてくるのだから。

「に、逃げろおっ！」

しかしお前達は何をしているのかモブ男ども。

Cランクのはずの冒険者達である。

Dランクの三人の少年少女グループは武器をとって構えたと言うのに、情けなさ過ぎる有様だった。

さて、第一といったが、この大量のハウンドたちの波はすぐに収まった。

バチバチバチバチバチッ、という音ともに、先頭のハウンドたちの動きが停止したのだ。

そして後続のハウンドが商隊へと到達する前に、いくつもの青白い雷が宙を走る。それらはハウンドたちを次々と焼き殺していく。無数の雷が太陽照る晴天の中を飛びかい、それはある意味幻想的な風景だった。

「す、すいい…」

剣に手をかけていたフアナが、思わず手を止めて感嘆の声を上げてその光景を眺めていたほどだ。

私は、先ほど見ようとした方向へと再度向いた。この雷の術者は私の視線の先に、つまりこれは、あのレイラの仕業である。

膨れ上がった魔力は彼女の剣へと走り、剣は青白く光るとともにレイラが振るうと雷の刃を次々に飛ばした。なるほどAランクは伊達じゃない、Dランクのハウンドもものもしないということか。ぞくぞくと出て来るハウンドを、無表情でレイラはその場にいなながら狩り続けた。

彼女同様Aランクパーティーであるエリックたちですらその時はで幕がなく、ハウンドたちも為すすべなく駆逐されてゆく。

が、少なくとも七割がたが死んだと思われたとき、レイラの雷が止まった。

突然のレイラの行動に、商隊の商人も護衛の冒険者達も首をかしげたが、しかしそれは単純なことだ。もうすぐ、第二ラウンドが始まるのだから。

森が再び振動し、木々を揺らしながら現れたのはハウンドのさらに上位種、Bランクの『ヘルハウンド』。無数に存在するデスイーターの一握りがたどり着く怪物である。

しかし、そこにいたのは。

「馬鹿な…」

今まで冷静だったレイラの、驚愕した声がしんとなっていたこの場に響いた。

森から現れたのは、ヘルハウンド。それも、三体の。

ありえない。

これは絶対にありえない。

三体のヘルハウンドが群れを率いるなど。まだ二体ならば、場合によっては番という可能性もある。だが、そこにいるのは三体のヘルハウンド。いがみ合うことなく異常なまでに調和しあって、そこに自然にある。

そして、三体のヘルハウンドと生き残りのハウンド。これが、第二ラウンドの敵だった。

しかし、この程度でもまだ脅威にはならなかった。Cランク依頼でありながら、この商隊についている護衛にはAランク冒険者がいる。ついでに言わせてもらえば私もいるのだから、あとは三体のヘルハウンドを分担すればいいだけの話だった。

私達は自然に、一体ずつのヘルハウンドと対峙していた。

私は突進を手で力づくで止め、そしてそのまま手をつけている部分から硬指を侵入させ体内を蹂躪した。それだけで、ヘルハウンドは動きを止め、地へと崩れ落ちた。

レイラは雷で眼くらましをしながら、最終的に剣でヘルハウンドの首を切り落とし、エリックたちは連携で追い詰め、斧で止めをさし

ていた。

ハウンドも、ファナや残った冒険者たちが駆逐し、ようやくと商隊の空気が弛緩する。かく言う私も気を抜いたものだ。

本番はそれからだったというのに。

既にロドラスは動揺から立ち直り、他の商人達をまとめている。直に旅を再開できるだろう。門外漢の私達はそれを待っている間は、周囲の警戒をすると同時に、ほぼ自由時間である。

「ファナ、お疲れ様」

私は少し肩で息をしているファナへと声をかけた。ファナの剣からは血が滴っていて、その上彼女の周囲には真つ二つになったハウンドたちが散らばっている。ファナもたくましくなったものだ…いやもういろんな意味で。

「あ、はい！ ナデイさんもお疲れ様でした！」

ファナはぶんと剣を振って、血をビシヤリと地面に散らしてから剣を鞘へと納め、私に笑顔に向けて言った。

とりあえず先に顔についている血を拭おうか。笑顔とあいまってなかなかすごい事になっている。

うん、本当にたくましくなった。

「ナディー、ファナー、大丈夫だった？」

「あ、シャーリーさん。と、エリックさん達も」

「…大丈夫そうだな。心配して損した。本当にナディーはCランクなのか…？ いや、ランクと実力が一致しない話はそう少なくともはないか…」

こちらにやってきて、エリックは真つ二つになったハウンドを、口から血を吐いて絶命しているヘルハウンドを見やったあとにそうつぶやいた。別に心配が欲しいわけではないけど、子供に対してそれはどうだろうか。

「エリック、女の子にそれはしないでしよう！」

シャーリーにもたたかれて怒られているエリックを見て、私達は笑った。

「そういえば、レイラさんって強いんですね」

相変わらず一人でぴりつとした空気を纏って立っているレイラをちらと見やっつて、ファナがそう言った。

…最近思ったが、どうもファナは私とどこか似ている。今彼女が言ったことも、私が言おうとしていたことだ。いつかファナが私のようになる時が来るのだろうか。似合わない、そう思わないでもないが、そうなって欲しいと、そう思ってしまう私もいたのだった。

「ん？ Aランクのレイラと言えば、最近『蒼天の霹靂』と呼ばれている腕利きだぞ？ もうSランクに近い天才だとか。この依頼を受けてることには、驚いたがなあ」

どうやらレイラは二つ名持ちらしい。Aランクから持っているということは、それほど腕も立つということなのだろう。実際、ハウンドやヘルハウンドとやっている時も彼女にはかなり余裕があった。Sランクに近いというのも頷ける。

「それにしても、何故ダンジョンの外にハウンドやヘルハウンドがいるんだ…？ これは明らかに異常だぞ。それにこのルートにBランクがいるなんて」

そう言ったのは、あまり口を出してこないファリスだった。

彼女の言うとおり、デスイーターはいくら昇格しようと、‘死神’同様ダンジョンを出る事は無い。…唯一の例外はモンスター大行進のときぐらいだろうか。

「ファリス、それはこれに限った話じゃないだろう。…確かに最近妙に増えてきたが…」

「何か、知ってるんですか？」

「ん、ああ…『異常』が、十二年前、モンスター大行進の時から、ぼつぼつと報告されるようになってきたんだ。その時を境に、モンスターはセオリーを外れた行動を見せはじめた。それも、以前は一年に一度程度あるかないかだったが、最近の頻度は確かにおかしい。ソレスティのほうでも、‘奈落’の深層に出るようなはずの化け物級の‘死神’が出たって話だし、いったいどうなってるんだか…まあ幸い冒険者に倒されたらしいが」

「あの、Aランクパーティを全滅させたつちゆう‘死神’かいな？ なんぼなんでもSランクはある、しかも‘死神’を、一人で倒し

たつて話やないか。眉唾もなんやけどなあ」

「しかし、確か以前にもSSの‘死神’を一人で倒したという人間はいただろう？」

「SSランク冒険者の『人類最強』やろ？ そんながごろごろおるかい」

「む…まあそれはそうだが…」

ここにいます。とは言わないで。うまい感じに話が一人歩きしているし。が、どうも噂の伝達速度が予想以上に早いような。冒険者の情報網を舐めていたか、あるいはあのギルドの水晶で伝わったかな。

「？ おい、ヘルハウンドの死体、動かなかったか？」

突然、エリックがヘルハウンドの死体を指差してそう言った。

私は見ていなかったから気づかなかったが、ヘルハウンドの生命活動は確かに

心臓が動いてる！？

それも、三体の心臓の鼓動が、シンクロしている。いや、違う。三つの鼓動が共鳴しているんじゃないかと、これは一つの…？

ドクンッ

一際大きく三つの、いや、一つの心臓が脈動した。おそらく、エリックやファナ、レイラたちにも聞こえたはず。

私は、三体のヘルハウンドが群れを率いているという異常をもっと深く考えるべきだった。

私達の見ている前で、ヘルハウンドだった三つの肉塊は飛び上がり一瞬でひとところへと集結した。三つの肉塊は一つになり、どくりどくりと脈打つ。正直言つてかなりグロイ。これが、デスイーターと呼ばれていたものの本質なのだろうか？

肉塊は、やがて再び魔狼の形を帯びてゆく。

黒い体毛が生え、赤い瞳がきらきら、きらきら、きらきらと輝いている。その身体は、ハウンドを越える体躯を持つヘルハウンドをさらに大きくしたほどで、踏みしめた大地はぼこりと少し沈んだ。ヘルハウンドとは、まるで格が違う圧力が辺りを覆った。

「嘘だろ……」

エリックの呆然とした声。

デスイーターはハウンドとなり、一握りがヘルハウンドとなる。だが、それで終りではない。極々稀ではあるが、さらに上の存在へと上る個体達もいる。

ダンジョン最弱の『死喰い』は。

「ケルベロスだと…！？」

『奈落の番犬』へと、上り詰めるのだ。

一体だけでは成る事はできない。

「なるほど、極稀^{レア}なわけだ」

グルルオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツ！！

私がつぶやくと同時に、赤い瞳を光らせた三つの首は天へと吠えた。

びりびりと空気を震わせ進む殺気は、‘死神’に近いモノを私に感じさせた。

私は一人、誰にもばれないように小さく、くすくすと笑う。

積極的でなくとも、刺激を好む私はやはり度し難い。

が、私が動く前に先に動いたものがいた。

「お前ら全員、手を出すな!!!!」

私は、彼女の大声は初めて聞く。私は、というより私達はそれを聞いて足を止めた。

彼女はバディツという音ともに地面を陥没させ、凄まじいスピードでケルベロスへと疾駆していた。それと並行し、雷を纏った剣をふりケルベロスへ雷刃を飛ばす。ダークブルーの髪はばさばさとなびきながら青白い電気をほとばしらせていた。

そう、飛び出したのは『蒼天の霹靂』、レイラだった。

「あ、あの、ナディさん、レイラさん一人に任せていいんですか？」

「ん？ 邪魔するなって言ってたしね、多分介入したところで邪魔になるよ」

私は白雷飛び交うケルベロスとレイラの舞いを見ながら言った。本音を言えば、強者VS強者の殺しあいはいはなかなか興味深い。

「そうだな。ま、万が一の時は割って入ろう」

エリックも私に賛同しながら、レイラの方から目を離さないようにしている。

ケルベロスはその巨軀を振っただけで、レイラの雷刃を散らしてしまった。どうやら、あの黒い毛には生半可な雷は通じないらしい。お返しとばかりに、ケルベロスは三頭の口を開き火を吐いた。レイラはそれを相変わらずバチバチと放電しながら高速で動き、回避してゆく。

なかなか当たらないレイラに業を煮やしたか、ケルベロスは火を止め今度は無数の灰色の魔弾をとんでもないペースで吐き出し始めた。レイラはそれをすらもかわし、しかし当たりそうなものは障壁で弾いていった。

「げ。【不可侵】」

「…【シエルター】」

ケルベロスは、無数の魔弾を放っているのだ。それゆえ、流れ弾がいくつもこちらに飛んできた。私とグスタフが巨大な障壁を張って喰いとめたが、場合によっては商隊は全滅している。

いや、それはハウンドの時点からか。正直私達がいなければ、クラック冒険者ばかりであれば、もう全滅していただろう。

私はちらりと商隊の方を振り向いた。エリックたちはいつでも飛び出せるように姿勢だ。危なくなったら、さっき言っていた事を実行するつもりなのだろう。

商人たちは、まるで現実から目を背けているかのような、そんな様子でぼんやりとレイラとケルベロスの戦いを見ている。

確かに、あれほどのモンスターがダンジョン外にいることは稀だろう。その戦いを見る機会など、高位の冒険者でなければそうは無い。少年少女三人組も似たような風だ。

モブ男三人組は……あ、いない。逃げやがったな。腐ってもクラン
クだろうに…

レイラの方に視線を戻すと、更なる局面を迎えていた。

レイラは先ほど以上に放電しながら、ケルベロスをあしらっている。
何かを溜めているのだろうか？

ケルベロスはといえば、かなり活発に飛び回っていた。しかも相当
身軽にだ。ともすれば火を噴き、魔弾を吐いていく。見た限りでは、
レイラが防戦一方だ。が、彼女が身に纏う雷は量をどんどん増して
いく。感じる魔力も最初とはまるで違う。

ケルベロスも力を増していくレイラに危険を感じたのか、魔弾も炎
も一度止めると口中に光弾を溜めはじめた。三つの首が同時に、で
ある。しかも、その溜め終わる時間は一秒にも満たなかった。

ガアアアアアアアアアアツ！！

三つの首が、光線を発射する。それらは一直線にレイラへと走った。
これほどの威力の攻撃はレイラの障壁では防ぎきれないだろう。な
らば、かわすしかない。手足の一本ぐらいは犠牲にして、である。

が、レイラは避けず、それどころか光線に立ち向かい、さらにそれ
を防いだ。

障壁ではない。レイラは光線を切り払ったのだった。

その場を緊張が包み、誰かの喉がごくりとなる。

双方のうち、先に動いたのはレイラだった。彼女は剣の光を散らし、それを鞘へと静かに納めた。

まるでタイミングを計ったように、ケルベロスもそれと同時に動いた。

三つの首が、ぼとりと落ちる、という形で。

場は、その瞬間完全に静寂に包まれていた。

しかしそれも一瞬。静寂を壊し、歓声が轟く。

『おおおおおおおおおっっ！！！』

商人がもろ手を挙げて喜び、ファナやエリックたちも手をたたいて喜んでいる。完全にイレギュラーという形で現れたSランクのモンスターが瞬く間に倒されたのだから、それも当然だろう。

かくいう私も手をたたき喜んでいた。

(ここで彼女の実力を見れたのはよかったなあ。戦うときは、面白
そうだ)

そんなことを思い、くすくすと笑いながら。

こんにちは『蒼天の霹靂』（後書き）

あ、悪役がいる。

なんかそんな風味のナデシコです。悪意はないんですけどね。

いつだってささのじや (前書き)

短いです。

時間すっ飛ばしとかしたら駄目ですかね。今でも十分やっていますけど。

いんにちはSSのじつ

私達は、ケルベロスに遭遇してから数日後にフレイディアに到着した。ロドラスは私達を労った後に、商隊を率いてどこかへ行ってしまった。エリックが言うには、もうギルドの方に連絡は行っているだろうからこのまま向かえば成功報酬を受け取れるそうだ。

フレイディアは話にも聞いた通りかなり大きい町だった。ギルド本部は町の中心部にあるらしく、私達が行ったのは町に散らばっているギルドハウスの方である。さすが冒険者の町、他の町とはギルドの優遇具合がまるで違う。私はまだ利用したことはないが、大陸一道具屋が多い町で、品揃えも桁違いだとか。‘奈落’が近くにあるのだから、おそらく魔導具の類も取り揃えていることだろう。

私は拠点も構えておきたいし、他にもしておきたいことはあるので、報酬をもらった後は町を見てまわることにした。ミクサスは行き付けの宿屋に行つた後、明日にでも‘奈落’に潜るらしい。このまま一緒にいても仕方ない、ということでは彼らとはお礼を言ってからギルド前で別れたのだ。

まずは宿を、だったのだが、それはすぐに見つける事が出来た。何せ宿屋がそこら中にあるのだから。宿の主人に聞くと普段はどこもかしこも混んでいるらしいが、今日はたまたま空いていたらしい。幸先がいいとはこのことだろう。長期で部屋を借りる事にして、私達はまた町へとくりだした。

「ナデイさん、宿は見つかったことですし、次はどこに行くんです

か？」

ファナがそう聞いてくるが、次に行くところは既に決まっている。とりあえず行っておかなければいけないところだ。折角なのでファナが一人でも利用できるように紹介もしておく。しかし、その大体の場所は分かっているものの、詳しい場所は知らないのてうろろろすることにはなるが。

「まあまあ、ついでい。ゆっくり歩くから、適当に町を見物しながらでいいし」

本当にこの町は広い。今歩いているところはソレスティにもあったような屋台が並んだ道だが、道の広さもそこにある屋台の多彩さもフレイディアの方がずっと上だ。そこを行き交う客もとんでもなく多いので、道の広さと比べて進みにくいのだが。

「ひぁー。ナディサーン」

「どこ行ってんのファナー」

ファナは身体が小さいせいかわ押しが弱いせいか、時折人の波に連れ去られて行った。最近ではピヨ介をファナの頭の上に置いてあるので、はぐれるなんてことはない。しかしぶつちやけいちいち連れ戻すのが面倒くさいので頑張って踏みとどまって欲しい。

「ファナ、人生は流されるだけじゃ駄目なんだよ」

「ナディさん、ちょっと何言ってるか分かりません」

とりあえず、叩いておいた。

「あの、ファナさん。ここですか？」

「そだよ。こんにちはー」

「え！ 準備中の札かかってますよ!？」

私は町の一角にひっそりとあった、バーへと足を踏み入れた。準備中の札はかかっているが、関係ない。どうせ中にマスターはいるよ。うだし、話が聞けたらそれでいいのだ。

レヴァンスに聞いたが、主要な町にはこのようなバーがそれぞれあり、そしてそこは情報屋が兼任している。ライバルも多いとのこと。で生き残るのは大変だが、彼らにはアドバンテージがあった。情報の伝達速度だ。何らかの手段で各バー間で情報を伝達しているらしいが、ギルドの話聞いた後なら想像はつく。ギルドほどの魔導具ではなくとも、それに準じるものがあるのだろう。

店の中にいたのはこれまた渋いマスターだった。因みに、情報屋の中では転生者はレヴァンスだけとのこと、その話は出さないように言われている。

マスターはこちらをチラリと見て、口を開いた。

「バーはまだ準備中ですよ」

「もう昼ですけど」

「…バーが開くのは夜からです」

「別のが昼に開いてるからでしょう?」

「…『奈落』にでも落としてきてください」

「キュウビを?」

意味不明な会話だが、合言葉らしい。レヴァンスのところとは勝手が違うのだとか。

キュウビとはコダマの最上種で尻尾は九本のモンスターである。合言葉としては『奈落』に声を落とすと九回木霊することから来ているらしい。それでも意味が分からないが、合言葉としてはそれだけのだろう。

「?????」

ファナは疑問符を浮かべているが、まあ彼女にこのことを教えておくのも目的の一つなので説明はしておこう。

「ファナ、ここは情報屋だね。知る人ぞ知る、穴場スポットだよ。ファナも冒険者として成長してきたら、いつか必要な場所になると思う」

「へ、あ、はい」

私がいなくなる前に教えるつもりだったが、むしろ早すぎただろうか? まあいつそうなるかはもう予想もつかなくなってきたので、念のために早く、ということでもいいか。

「ご注文は？」

「マスターに任せますね」

考えるのが面倒なのでそう言ってみると、緑色のものが出てきた。嫌味だろうか。

しかし、実際に飲んでみると以外に美味しかったことにビックリである。この色であっさりとした喉越しというのはむしろ逆に気持ち悪いけど。

私は適度に唇を湿らせて、そ知らぬ顔でグラスを磨いているマスターに向かって聞いた。

「この町で何か変わったことはありませんか？」

「最近、二人もSSランクの冒険者が町に来ている事ぐらいでしょうか」

「…SSランクのこと、詳しく教えて欲しいんですけど。今いる、全員の、ね」

「SSランクは、今は四人ですね。そのうちの一人は頻繁に移動していますので、居場所が特定できないようです。一人は十年ほど前より行方知れずで、既に死んだのではないかという噂も流れています。最初の一人は『韋駄天』、兎に角足が速く、方々を駆け回る事からつけられたようですね。次の一人は『人類最強』、この人は文字通りですね。十二年前のマスター大行進の際、数箇所のダンジョンより漏れ出たモンスターを一人で駆逐したという伝説がありますね」

「で、今いる二人は？」

「一人は『地割』、伸縮自在の魔剣を扱う大剣士です。五メートルにも及ぶ大剣を振り回していた、という噂もありますよ。最後の一人は『魔砲使い』、その名の通り、魔弾の上位魔法を得意としています。また魔法剣士でもありますので、接近戦もお手の物のようですね。ですが、この人はあまりいい噂を聞きませんね。無実の人を殺したとかわけも分からず暴行を受けたとか、そのような話がまことしやかに流れています。SSランクということでもかなり情報を潰されているようで、あまり一般には流れていないものですが。ですので、彼には注意してくださいね」

SSの、純粹な力もさることながら、権力も侮れないということかそれにしても『人類最強』という二つ名にはなかなか心惹かれる。『地割』『魔砲使い』もいいが、それよりはこつちだ。…ああなるほど、天使の言っていた人間最高レベル178は『人類最強』のことなか。『韋駄天』は…何故だろう、あまり強くなさそうな気がするの。SSランクだから能力は高いと思うが、移動速度が速いことが際立っているからだろうか。

「そう言えば、町にSSランクが二人いることは珍しいんですか？
冒険者の町なのに」

「ええ、SSランクは存外多忙なんです。自分達のこともさることながら、実力がある分ギルド本部に仕事を依頼されることもありますので。今いる二人も、『奈落』にいたり帝国にいたりする事のほうが多いですね。ともに行動しているわけではないのにこうして同じタイミングでこの町にいるのは、なかなか稀なことですよ」

「ふーん…ついでに、『韋駄天』についてはもう情報はないの？」

「二十代後半の男性で、武器は槍を使っています。名前は確かデイトライトでしたか。現在は帝国内にいる可能性が濃厚のようです」

「他には？」

「少なくともSSランクでは最弱で、…逃げ足がとにかく速いらしいですね」

なるほど。

「さつて…お勘定お願いします」

「金貨一枚と銀貨三枚になります」

「えっ、ジュース二杯なのに高い…」

「…ファナ、情報料だよ。情報も情報だったけど、結構良心的な額じゃないかな。はい、一枚、三枚です」

「へー…情報って高いんですね…」

「はい、ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

「そつだよ高いんだよ。あ、ファナ、先に外出てて」

「あ、はい」

「レヴァンスから何か『ナデシコ』に連絡があったら、すぐに教えてくれない。『ナデイ』は丸ヒヨコ亭に居るから」

「かしこまりました」

バーから外に出ると、すぐそこでファナが待っていた。町の風景を見ていたようだが、私を見ると嬉しそうに駆け寄ってきた。

「ナデイさんナデイさん！ あそこ行きましょう！ 美味しそうですよー！」

ピヨー ピヨー

ピヨ介もファナに乗って仕切りに頷いてる。どうやらピヨ介も絶賛の店があるそうだが、さっき教えた事は頭に入っているだろうか。

「ファナ、そこに行く前に、さっき学んだ事を言ってみなさい」

するとファナは首をかしげてこう言った。

「『奈落』に『キュウビ』を落とします！」

そこかい。　そういえば合言葉だつて教えてなかった。

私は、きよとんとするフアホの子アナを見ながら頭を抱えた。相変わらずフ
アナのことはよく分からない。

じんにちはSSのこと（後書き）

デイルイト君はこのまま一発キャラになるかも。

気が向いたら出るかもしれないですね。

ところでレイラが話に出てませんが、まあ後々戦うことになると思うのでそこまでお預けで。

こんにちは私以外の人（前書き）

ようやく出てきた人たちです。でもすぐにポツクリ逝ってしまいそうですね。

今回も短いです。このまま行くかも知れません。

こんにちは私以外の人

一日フレイディアに滞在して、私達は‘奈落’への道を歩いていた。今回は本格的なダンジョン探索になりそうなので、ファナ用にポーションを買い込んで、である。一応どんなものか飲んでみるとスポードリンクのような味がして驚いたが、ちゃんと効果はあるようだった。別に身体の細胞が活性化してくたとかそういうことはなく、まさに魔法薬といった感じだ。ポーションを買った店には爆弾などが置いてあったが、ポーションと同じ陳列棚に置くのはどうかと思う。

ついでにファナの剣、もと盗賊の剣が正直もう限界だったので、むしろ壊れなかったのが奇跡なぐらいだが、武器屋へと新しいものを買に行った。ファナは安い細剣を選んだので、私は質実剛健、頑丈な高値のものを無理やり買った。しきりに遠慮していたが、うっかり壊れて万が一があっても困る。特にファナの戦い方は武器にかかる負担も比較的大きい。念のために短剣も渡したが、使うことがない事を祈るばかりだ。因みに細剣は突剣ではなく切り裂く使い方が主体のものだ。

今回は依頼は受けないつもりだったので、ギルドには行かなかった。興味があつたのでギルド本部の見学には行ってみたものの、入り口のところで追い払われてしまった。なんでも何らかの用で許可がある者がBランク以上の冒険者しか入れないらしい。警備の問題か選民意識か知らないが、期待はずれな感は否めない。仕方ない、忍び込もう。としたらファナに止められてしまったが、入れないと余計

に入りたくなるのは性ではなかるうか。

結局ギルド本部には入れなかったものの、一応収獲はあった。諦めて帰ろうとしたとき、人だかりを見つけたのだ。どれも女性ばかりだったのが気になって近くにいる人に聞いてみると、なんでもSSランクがファンに囲まれているらしい。それも『魔砲使い』とのことで、遠目に見ていたが人の隙間から二十かそこらのイケメンが見えた。実年齢は28だそうだが、なかなか若々しい。彼がスマイルを振りまくと取り巻きがきゃーきゃーと騒いでいる。くさい光景に胸焼けしながら、さきほどから彼をじつと見ていたファナに好みなのか聞いてみると、顔をしかめて気持悪いという返答が返ってきた。どうやらお気にはめさなかったらしい。顔はよくても腹の中は、というやつだろうか、裏の噂もそれを裏付けている。しかし、SSだけあってかなり強い。魔力もさることながら、剣の腕もかなりのものだ。優秀な壁がいれば、それこそ『地割』でもいれば私でも死ぬかもしれない。

ファナがかなり不愉快そうな顔をしていたのでそうそう離れたが、その時なんとなく『魔砲使い』が私の方を向いた気がした。一応振り向いてみたが、相変わらずファンにスマイル0円をするばかりで、私も首をかしげるばかりだった。

フレイディアを出る前に『奈落』への道を門番に尋ねると、『奈落』を利用する冒険者は数多くいるためしつかりとした道が敷かれているので迷うことは無いとのことだ。しかし途中までは一本道だが、別れ道にさしかかった時はそれに惑わされないようにとは言っていたが。

「ナデイさん。あそこに変な人たちがいますよ」

フアナがそう言ったのは、件の別れ道を見つけたときだった。別れの道の前で二人の男が言い争っているのだ。片方はくすんだ金髪のチンピラのようなチンピラになりきれない中途半端男といったところか。もう片方は小太りのメガネの男である。二人とも帯剣はしてあるが、とても浮いている。

フアナの言う『変』とはこんなところで言い争っていることだろうか？ それとも、着ている服のせいだろうか。

なにせ彼らの服はこちらでは見る事の無い、向こうの世界の服なのだから。

ついに来たか、とそう思わないでもない。何せ今まで出会うことはなかったのだから。むしろ私しか居ないのではないかと思っただが、どうやらそういうわけでもないらしい。

二人ともずいぶんと揉めているようだが、私に彼らを助ける義理はないし、そんな気分にもならない。ここは華麗に無

「あの一、何してるんですか？」

…フアナアアアアアアアアツ！！

私はフアナが積極的になっってくれるのは嬉しいけど、もっと時を選びましょう！ ここは全力でスルーするべきところだった！

時既に遅く、男二人は言い争いを止めてこちらを向くととても嬉しそうに顔をしたのだ。せめて良識のある者達ならいいのだが。

「美少女二人キターーーー！ これがかつる！」

「うっせーよお前！ なあなあ君たち、ちょっと聞きたいんだけどさあ」

やっぱり駄目っぽい。

どっちも濃いと薄いのコンビだろうか。とりあえず混ぜて二つに分けたらいいと思うよ。しかしやはり無視するべきであった。ファナに注意しなかった私の判断ミスだろうか…

「は、はい？　なんですか？」

「『奈落』ってさあ、どっちの道行けばいいか分かる？」

どうやら彼らはどちらの道に行けばいいのかわからなかったらしい。正直ここに放置して、一生迷ってればいいよ、と言いたいがそういうわけにもいかない。

名前　ヨリミチ

種族　人間

レベル　48

名前　アツキ

種族　人間

レベル　35

逆恨みされて食い付かれたら、後々面倒だ。

「ここを右に行けば、『奈落』につくよ。それじゃあ、私達は左の道を急ぐところだから。じゃあね」

「え、ナ、ナデイさん？」

「しばらく黙ってて、ファナ」

私はファナの腕をつかんで左の道へと足を向けた。しかし、その途中でメガネの男に止められる。…中途半端男もだがこの男もどうも気持ち悪い。どこか、私達自身を見ていない気がするのだ。まるで、何かのキャラを見るような。

こいつら、ここに来たばかりか。

「…何か？」

男は気味悪く笑い、私とファナを顔といわず身体といわず眺め回しながら口を開いた。

「まあまあ、お礼がしたいから、一緒に行こうよ」

私は、左に、行くと、言った。

人の話を聞いていないのか、それとも自分の思い通りにでもなると思っっているのか。切れそうになる自分を抑えながら、私は滅多にしない、貼り付けた笑顔を男に向けながら右の道を指差した。

「あなたたちが行くのは、右の道なのでしょう？ 私達は左の道を急いでるんだけど」

しかし、男は私の貼り付けた笑顔を見てニツコリと笑った。ぞわりと、鳥肌がたつ。もう嫌だ、さっさとこいつらから離れたい。

「いいじゃないか、君は違うけど、そっちの金髪の娘は剣を持って

るから冒険者なんだろう？　なら、俺達と「奈落」に行こう」

しつこい。うざい。気持悪い。

私は、右の道を行くと「奈落」に着くと言ったのだ。それで左の道を行こうとする私達を「奈落」に連れて行こうとするとはどういう見か。

しつこくメガネの男が私達に絡んでいると、中途半端男が話しに割り込んできた。メガネを止めるつもりか殊勝なやつだと一瞬でも思った私を突き飛ばしたい。

「おいヨリミチ、そんな誘い方じゃ駄目だろう？　もっと俺達の事アピールしろよ！」

「いや、ここは連れて行く事を優先したほうが…フラグなら後で立てれるんじゃないか？」

きめえ。

私は再びファナを引つ張り左の道へと音も無く走り去った。二人はまた言い争いに入っただようで、私達には気づかない。彼らは分かっているのだろうか？　現実で選択肢は待つてはくれないと。

現実とまだ自覚していないのだろうか、少々あれは酷すぎる。こちらを一人の人として見ていないようだった。天使に意識誘導を受けた結果だろうか？　しかし天使は、ここを『現実世界』とまるで強調するように言っていた。仮想世界だなどと思いつい込ませることも無いだろう。ならばあれは元からののだろうか。…もう原因は考えたくない、不毛すぎる。

「ナデイさん、一体どうしたんですか？」

ファナは心底分からなそうな表情で、私に聞いた。もう十分離れたので、手を離して歩いている。

「ファナ、ああいう変な人達の相手をしちゃ駄目。特に、あなたは自分の事で精一杯だろうに」

「???? わ、分かりました」

一応頷くファナを見ながら、私は小さく溜め息をついて、**‘奈落’**への道を急いだ。

…私は嘘はついていない。

昔は別れ道なんて無くて一本道だったが、何らかの理由でその道が使えなくなった。ある意味ギルドの生命線である**‘奈落’**への道が使えないのはよろしくない。気軽に**‘奈落’**、何か間違っているようだがそれも売りの一つだ。そのため、ギルドは新しく道を一本作った。今では使えなくなっていた道も使えるようになった、と門番は言っていた。

なんのことはない。あの別れ道はどちらも**‘奈落’**へ続いているのだ。

こんにちは私以外の人（後書き）

何とか彼らの存在を生かせないかと考えても、DEADエンドしか
浮かんできません。ご愁傷さまです。

まだ今の時期は彼らは少数ですね。まあぶっちゃけ三〜四割はもう
死んでしまっていますけど…

みんなちは殺しのこと（前書き）

やっぱりこれぐらいが主流になりそうですね。

もっと細部を表現できればいいんですけど、自分の文章力、語彙力が限界です。

いんにちは殺しのじつ

‘奈落’。

一説には底無しダンジョンとも、全てのダンジョンの起点ともされる大陸最大のダンジョン。これをはじめて見た者はこう思うだろう、まるで地獄の門だと。

大地を穿つ直径百メートルを越える巨大な空洞。それが‘奈落’とよばれるゆえんだ。

底には何があるのか。そう考えるも冒険者はいたが、浮遊魔法で穴を降りて確かめようとした者は残らずとも知れぬ場所へと転落していった。『ダンジョン内ならばともかく、この空洞では魔力が使えない』。それが幾多の冒険者が犠牲となって出された結論だった。

ダンジョン内に入るためには、空洞の外周にいくつもある入り口の一つを使わなければならない。さらにダンジョンはどこまでも入り組んでいて、熟練の冒険者でもモンスターや罫を相手にしていると元来た道は見失ってしまう。しかしそれでも冒険者の聖地と呼ばれるには理由がある。

一つはダンジョン内にランダムにいくつも置かれている宝箱。はずれこそあるものの、その中にはダンジョンでしか手に入れられない魔導具が入っている。深層の当たりの魔導具であれば、それこそ一生遊んで暮らせるほどの価値がある物もあるのだ。力を高めると同時にそれらを求める冒険者は数多くいる。

もう一つは‘奈落’のモンスター不可侵区画にある装置、帰還魔法陣を使うことで‘奈落’は簡単に脱出することが出来るのだ。無論、

これを見つけないければそう入り口から出る事など出来ないが、これは各所にある。冒険者達は大抵ここで休憩することになるが、ここではモンスター以上に人間を警戒しなければならぬので完全に気を抜けるわけではない。時折それを理解しない初心者もいるため、彼らや冒険者の死体を目当てにするようなハイエナのような人間も後を絶たなかった。ギルドもギルド職員を置いて対策をたてたが、それはあくまでもポーズのようなものである。あわよくば、そういう考えも無くも無かったが、ダンジョンの中では自分の身ぐらい自分で守れ、それがギルドの意思だった。

「深いですね」

「落ちないですよ。さすがに助けられないと思うから」

奈落の脇にあったギルド職員の詰め所でライセンスを見せて、私達は「奈落」への入り口の一つへと向かった。一応、冒険者でなければ入れないことになっているらしい。

私は穴の底を見ようとしていたファナの襟首をつかんで引つ張った。万が一の時に助ける手段が全く無いわけではないが、人目のあるところであまり派手な事はしたくない。

「大丈夫ですよ。そんな簡単には落ちません」

「これぐらい大丈夫。そう言ってる奴が一番死亡フラグ建ててるんだけどね」

「ナディさんの言ってることは、時々よく分かりません」

「世界には知らなくていい事もたくさんあるんだよ……」

「はあ……」

適当に深そうな浅い言葉でファナをからかいながら、私達は「奈落」へと入った。

「奈落」の中は岩肌の見える洞窟のようなものだった。一応傾斜になっただけで、若干歩きにくい。だがそれも進むにつれて緩やかになっただけ。道は広く、上も高いので仮に戦闘になっても動きを阻害されることはないだろう。またヒカリゴケに類するものがそこかしこにあるので、洞窟の中であってもそこまで暗くはない。

大体歩き始めて二十分程で最初の別れ道にさしかかった。私はどれに行くかファナに聞いてみることにした。

「ねえファナ。どれにする？」

するとファナは少し呆れたように私に返事を返した。

「ナデイさん、実質二択じゃありませんか？ 右か、左か。あれをに行くのは遠慮したいです」

そうファナが言ったのも無理はない。別れ道は右か、左か、そして上か、である。だがその上の穴は直径一メートルと少し程しかないものだ。こんなところにあることがやけに作為的でかなり気味が悪い。

ファナが常識的な回答をしたことに安堵しながら、私は再度口を開いた。今度は手を振りながら、である。

「それじゃジャンケンで決めよう。私が勝ったら右、ファナが勝つ

たら左で。ピヨたんもいいよね？」

「分かりました」

ピヨー

因みに今日のピヨ介もファナの頭の上にいる。もうこのまま組ませ
ておこうかな。

「「じゃん けん ぽん」」

結果は右の道だ。そもそも相手の手を見た後、手を変えられる私に
勝てるわけがない。何故右にしたかって？ 右の方が気配が多かつ
たから、手ごたえがあるかと。

キーーーーーイイイッ

歩くこと五分。早速モンスターとエンカウントである。

道の向こうからぞろぞろとやってきたのはゴブリン。フランクの下
位種だが、同時に新人冒険者にとっては危険種である。

身長は一メートル足らず、尖った耳にのっぺりした青い肌、攻撃の
意志を示したときは口は耳まで裂け牙がぞろりと並ぶまさにモン
スターなのだが、普通にしているとまるで人間の子供に見える。それ
ゆえ慣れていないものは手が鈍り、集団で襲い掛かれて骨だけに

されてしまっ。

「ファナはそっちよろしく」

道の向こうから来るゴブリンたちを指してファナに言いながら、私は後ろを向いた。

「え!?! ナデイさんは?」

「私は後ろから来てるのをやるよ…」

キイイイーーーーーッ

と、けたたましい鳴き声とともに私達が歩いてきた道の方から来るゴブリン。要は挟み撃ちだ。別れ道にあった小さな穴もこれをするためだったのだろう。モンスターにしては頭は悪くない。どうやら左の道も網を張っていたようだし、狩場のようなものだろうか。

しかし、所詮はフランクだ。

ファナが剣を抜いてゴブリンを迎え撃つたのを確認しながら、私も『ホルイーター大喰らい』の硬指を後ろのゴブリン達へと伸ばした。

全てのゴブリンの頭部を破壊するのに要した時間は十秒。奴らは避けようともしないのだから、話にもならない。手ごたえなど皆無だ。

さっさとモンスターを掃討した私は、ファナの方を向いた。勿論手を貸すつもりはない。どうやら必要もなさそうだし。万が一を想定

しながら初心者は剣先が鈍るゴブリンをぶつけたのだが、心配することもないようだ。

ファナは表情を変えず淡々とゴブリンたちを切り裂いていた。剣閃が自由自在に飛び回り、無理な角度からも突然に軌道を変えている。その度にゴブリンの腕が、足が、頭がどこかしこに飛んでゆく。ファナもずいぶん腕を上げていたらしい。ピヨ介も戦っているのだからまさに無双状態だ。

あとは血が噴き出る方向を計算出来る様になれば、あれほど血塗れになることもないだろう。

「存外、平気なもんだね」

私はファナについた血を魔法で出した水で洗い流しながら、そう言った。既にゴブリンの死体がごろごろと転がっている場所からは退避している。

「何がですか？」

ぶるぶると頭を振って飛沫を飛ばしながら、ファナがそう私に尋ねた。

「ゴブリンのこと。結構普通に斬ってたね。あれは人型だし、もう少し躊躇すると思ったんだけど」

あらかた洗い流した後は、温風で乾燥である。やっぱりこの世界の魔法は便利だ。どういう機構が働いているのかはまだ不明、探っている最中ではあるがよく分からない。

「あ、えと、それはまあモンスターですし」

「人なら？ 殺せる？」

服の湿りがだんだん取れて行くのを確かめながら、私はファナにそう問うた。ファナは少し戸惑ったようだが、首を振った。

「無理です」

「ふうん。じゃ、その人が盗賊とか虐殺者とかだったら？」

「…分かりません」

「ふうん。彼らもモンスターなのにな？」

「……」

モンスターの定義とは、『人に害をなす者』、である。つまりはそういうことだ、この世界では他人の権利を犯す者は自らの人権をも捨てたと看做される。それゆえ、盗賊やその他重罪人を殺したところで罪には問われない。

「つまり、彼らはどうでもいいモノなんだよ」

「どうでもいいモノって…！ そんな」

ファナが私の過激な発言に食いつく。が、ファナは忘れてしまっているようだ。

「ねえファナ。私が君を助けたとき七人盗賊を殺したけど、君は大して気にしてなさそうだったね。彼らの命は君にとつてどういうものだった？ 君の父親を×した彼らに、君は生きていて欲しかった？ 彼らの幸せを望んだ？ それとも」

「！
……」

私はファナの葛藤する表情を見ながら、溜め息をついた。別に私はファナに積極的に人を殺して欲しいわけではない。ただ、間違えないうでいて欲しいだけだ。

「ファナ、私は不殺を否定しているわけではないよ。それも貫くならば立派な一つの道だ。けど、それは強者しか選んではいけない道だよ。殺そうとする相手を殺さずに倒すには相手より数段上の實力が必要になる。中途半端なものでは被害はさらに甚大なものになる前に言ったよね、助けるということは他の何かをすり減らすことだと。どうでもいいモノを助けて大切なものを失ってしまうぐらいなら、そんな心は捨ててしまえ。私は、どうでもいいモノたちを生き長らえさせるために君を助けたわけじゃない」

私がそこまで言い切るまで、ファナは黙っていた。チラリともう一度顔を見ると、ファナは泣きだしそうに顔を歪めている。また出そうになる溜め息を抑えながら、私はファナの頭に手を置いて苦笑いした。

「…要は、強くなれって事だよ。身体も、心もね」

何も言わずこくりと頷くファナを撫でて、私は道の進行方向を向いた。

「さ、行くところか。ダンジョンは待ってってくれるけど、時間は待つちや
くれないよ」

「…はい」

肩を落としているファナを見ながら、私はもう一度思った。

人殺しになって欲しいわけじゃない。私は、ファナに死んで欲しくないだけだ。

いんにちは殺しのこと（後書き）

第一部を書きながら時折第二部のことを考えるんですけど、話を大きくしすぎると回収できなくなるんですよ。と言っわけで王族や貴族や上層部があまり出ないまま終わるかも。もうモブ並に。

こんにちは愚か者（前書き）

ようやく出せました。

なかなか進みませんね。書いていると時折壁が見えます。

今回はナデシコが短絡的な思考をしています。イラついているがゆえです。普段はもっと冷静ですよ。割と短気なんですよ。理性が防波堤になっていますが。

「んにちは愚か者」

「いやー、これはまさに運命だね。こんなところで出会えるとは！」

「折れたと思ったが、やはりフラグは立っていたか！ となるとチヤンス…」

「はあ…？」

運が悪いとしか言いようがない。以前振り切ったはずの二人、ヨリミチとアツキに会ったのは一つ目の帰還ポイントに着いた時だった。それ以来この二人は私達に付きまといている。彼らは少なくとも私にとって鬱陶しいだけの存在だ。メリットは微塵もない。ファナがどう思っているかは知らないが、表情を見る限り良くは思っていないだろう。二人は私達の表情に気づくことなく手を振り頭を振りながらベラベラと、ヨリミチはむしろブツブツとしゃべっている。まさかこの二人がこんなに早く来ているとも思わなかったが、あのポイントは入り口からそれほど距離もなかった。おそらく二人は私達とは異なる入り口から入り、モンスターとも出会わなかったのではないだろうか？ その証拠に身体からも腰に挿している剣からも血の臭いはしなかった。

「ん？」

ダンジョンは岩肌から、ポイントを境に石で出来た回廊のような風景に変わっていた。相変わらず天井も高く道幅も広いので余計に動きやすくなっていた。それはモンスターも同じだろうが。

私はその石の回廊の奥からモンスターの気配を感じ、少し身構えた。一体、二足歩行、歩幅は広くない、そして時々何かを引き摺っているようだ。おそらく引き摺っているのは尻尾、ということとは。

「フアナー」

「はい？ 何ですか？」

私は二人に絡まれるフアナに声をかけ、通路の奥に指を向けた。フアナも気付いたのか、剣を抜いて構える。二人は気付いていないらしく、フアナの突然の挙動に驚いているらしい。邪魔なので早くどこかに行つて欲しい。

「多分、リザードマン。一体みたいだから、よろしくね」

「はい！」

力強く頷くフアナに満足しながら、私は少し後ろに下がった。あの二人は状況を理解せずなにやらあたふたしている。やっぱり邪魔だ。足手まとい、というが、無能な味方は正直モンスターより怖い。味方と言うことすらおこがましい連中ではあるが。こいつらはそこそこ高いレベルを持っているから、なおさらだ。

いつそこで殺しておくか？ こう思ったのは初めてじゃない。私の主義に反するので今まで思いとどまってきたが、そろそろ私の理性というダムも感情の濁流の前に決壊してしまいそうだ。

「う、うわ！ なんだあいつ！」

しかし、私が拳を握りこんだとき、アツシの声とともに通路の奥の暗がりからようやくモンスターが姿を現した。

鱗のついた皮膚と前に突き出た顔、裂けた口に長い尻尾。トカゲのような、間違いなく爬虫類に分類できるだろう二足歩行のモンスターがそこにいた。リザードマン、プレートアーマーを着て鋼の剣と盾を持ったEランクの魔物である。こいつらは数匹の組で行動していることが多いのだが、こいつは一体だけだ。

その理由は簡単に分かる。普通リザードマンの皮膚は緑を主体とした濃い色なのだが、この個体は赤茶色の皮膚をしている。リザードマンの亜種、ということだ。希少である上に能力も高いのだが、繁殖能力は低く同種族から排斥されやすい。一匹でいるのもそのせいだろう。

タツとファナが地を蹴り、リザードマンに剣を振るった。リザードマンも手に持った盾を持ち上げファナの剣を防ぐ。

そこからは攻撃と防御、回避の応酬だ。ファナが剣を向ければリザードマンが盾をかざし、リザードマンが剣を振ればファナはついとかわす。亜種はDランクといったところか、なかなかの手だれだ。が、ファナも本気を出しているわけではない。様子見といったところか、防御の方に比重を置いている。ファナか或いはリザードマンが均衡を崩せば、リザードマンがバラバラになって終りという結末しか見えない。それほどにファナは強くなっていた。慎重ではあるがそれも決して悪いことではないし、ピヨ介も今のところは手を出していない。余裕のありすぎる戦闘だった。

が、それに水を挿すように。

「おい！　なんで手伝ってやらないんだ！？　ファナちゃん苦戦してるじゃないか！」

アツシが私にそう文句を言ってきた。彼は何を見ているのだろうか。

あれが苦戦している？ 馬鹿な、防戦でありながら完全にファナのペースじゃないか。そもそも私達は名乗ってもいないのに何を厚かましく『ファナちゃん』などと慣れなれしく呼んでいるのか。さっさとどこかに行ってしまえ。

「何でそんなことしなくちゃいけないかなあ。一人で大丈夫でしょう」

私はアツシの言葉にけんもほろろに答える。成長しているファナを見てよくなっていた私の気分は一気に落ち込み、不機嫌さを漂わせながら胡乱な視線をアツシに向けた。彼は私に、何の感情かは知らないが歪んだ顔を見せる。

「何でって…ファナちゃんは女の子だぞ！ ナデイちゃんはどうも思わないのか？ 最低だぞ！」

「私も女だよ」

こいつは結局何が言いたいのだろう。私のことも『ちゃん』か、馴れ馴れしいよ。と、問答を繰り返していると今まで黙っていたヨリミチが剣を抜いた。そして私とアツシの方を見るとこう言った。

「ほつとけよアツシ。ナデイちゃんは武器を持ってないだろ。最初からファナちゃんだけに戦わせるつもりだったんだ。なら、俺達がファナちゃんを守ってやろうぜ」

「お、おお！ 分かった！」

チラリと二人は私に見下すような視線をくれると、どたどたと剣を振りかざしリザードマンとファナがぶつかり合うところへと走って

いった。

私はそれを見て舌打ちをする。

やっぱりこんなことならファナの見えていないところで頭蓋でもぶち抜いておくんだった。しかし今更後悔しても遅い。私はピヨ介に参戦を命じながら、再度拳を握りこんだ。万が一の時は、躊躇はしない。連中の『ゲーム』もここまでだ。

「でりゃあー！」

「はっ」

二人の剣がレベルに見合った速度で振りぬかれる。剣先はふらついているものの、しかしその剣速はかなりの物だ。二人の表情は自分に酔っているのか恍惚としており、視線もリガードマンにしか向いていない。そして腰は妙に引けている、こいつらは自分の得物のリーチを理解していない。

結果的に、二人の剣閃はリガードマンと戦っていたファナへと振り下ろされた。

ピヨー！

「ー？？」

ピヨ介の警告で一瞬早くファナはそれに気付き、爆発的な速度でリガードマンと二人から離れた。

二人は自分のしたことに気付いていないのか、引き続きリガードマ

ンだけを見ながら剣を振っている。

「ファナちゃん！ 助けに来たぞ！」

そんなことまで言い出す始末。

ピヨ介の警告はファナを助けると同時に彼ら自身も救っていたというのに。ファナの回避が間に合っていないければ、私の硬指がリザードマンもろとも連中を貫いただろう。

リザードマンはいえば、突然戦う相手が変わったもののうるたえはしなかった。軽く男二人をあしらいながら、ファナへの警戒も忘れていない。一匹で生きてきたからか、そこそこは戦いなれている事が分かる。私を警戒していないところが奴の未熟さを思わせた。

二人は滅茶苦茶に剣を振るい、相変わらず悦に入っていた。はじめての戦闘なのだろう、手馴れた感じも型もまるで見えない剣筋に、呆れを通り越してうざさすら感じさせる。それこそ見ていられないほどに。

…いや、そもそも私は何を律儀に観戦しているのだろうか。こいつらを撒くチャンスではないか。こいつらがこのままりザードマン相手に死のうが勝とうが知った事ではない。いや、間違っても勝つことはないだろう。二人は互いで互いを邪魔しあい、二対一の利点はまるでない。今生き残っていることが不思議なくらいだ。

さっさと立ち去ろうとファナに声をかけようとしたとき、戦闘の均衡が崩れた。明らかに隙だらけの大振りを二人がして、ひよいかわしたりザードマンがそこに剣を振り下ろそうとしたのだ。

私は、終わったなとそう思ったものだが、どうやらファナはずいぶんとお人よしだったらしい。今更ではあるが。

剣が二人に振り下ろされる寸前、ばんつと地面を蹴ったファナがリザードマンの首を薙いでいた。ファナは霞むほどのスピードでそのままリザードマンの背後を駆け、両腕も切断する。そしてまた地を蹴り、元の位置へと戻った。

リザードマンの動きはピタリと止まり、一瞬の後に腕と首がころりと落ちてそこから血が噴出した。びしゃびしゃと辺りに飛び散るものの、離れた場所にいた私と移動していたファナにかかる事はない。つまりリザードマンの目前にいたあの二人にはかかっているのだが、その二人は剣をだらりと下げ放心しているようだった。それは死の恐怖かそれとも目の前の死体に対する現実感か、どちらにせよ、これで思い知ってくれるとありがたい。

が、この二人は私の想像を越えていた。

アツシは手を持ち上げヨリミチの肩に置き、

「なあ、こいつ倒したの、俺だよな？」

そう言ったのだ。

「え？ いや、俺だろ？ ほら、俺の剣がこつずばつと…目にも止まらぬスピードでだな」

さらにヨリミチもアツシにこつ言い返す。

「いや、絶対俺の必殺技が決まってたんだよ！ こんな雑魚に俺の攻撃がかわせるわけがない」

「俺の方がレベル高いんだからさあ、絶対俺だろう。ほら見てくれよ、こう、さつきも、こうだな…はっ、と。おい見るよ、だからさあ」

アツシが拳を握り訴え、ヨリミチが剣を振りながら解説する。いつか見た言い争いはどうやらこうという風に何でも発端になるらしい。

そもそも倒したのはファナなのだが、それは彼らの頭にはないようだ。いや、むしろ見えていなかったのだろう。

リザードマンが振り下ろそうとした剣も、ファナの高速の剣閃も、どれも見ていない。彼らが見ていたのは自分達の膨れ上がった身体能力による、自分達の大振りの攻撃だけだったらしい。

私は、親指でこめかみを押しながら眉根を寄せ、膝をついていたファナに声をかけた。

「行こうファナ」

さっさとこいつらから離れよう。

言外にそう言いながら、私は回廊の奥に足を向けた。

しかし、今回はそううまくはいかなかったらしい。

「待てよ。お前、ファナちゃんに冷たくないか？」

しつこい。

非難するような視線を私に向けながら、アツシがファナに手を差し

伸べながらそう言ったのだ。見ると、ヨリミチも言い争いを止めて私を見ている。

私は人差し指と親指で両のこめかみを揉みながら、とりあえず言い返すことにした。

「何が？」

いちいち言葉をつむぐのも面倒なので一言で、だが。
私の言葉が感に触ったのか、アツシが険しい表情で声を荒げる。

「一人でモンスターと戦わせることだろ！ 手も貸さないしょ！」

「ファナ一人で何とかなつたじゃん」

「何言つてんだ！ 俺達が助けなきゃ死んでたかもしれないんだぞ
！？」

てめえらが手え出さなきゃ死ぬような危険は微塵もなかったよ。

いつになく荒んだ気分になりながら私はぎりぎり歯を噛み締め、アツシから視線を外し一人で立ち上がっていたファナにもう一度声をかけた。

「ファナ、行くよ」

「あ、はい」

「待てよ！」

今度は完全に無視をして、私はダンジョンの奥に足を進めた。時間

は待つちゃくれないのだ。実りのない問答を私はするつもりはない。案の定二人は着いてくるが、タイミングを見て始末する事にする。どう考えてもファナにとっての害悪にしかならない連中だ。

「ファナ、あの二人にあまり近づいちゃ駄目だよ」

私はファナに手招きして、赤レンガを横目に小さくそう伝えた。ファナは少し首をかしげて疑問符を乗せながら私に答える。

「何ですか？」

「…さつき故意ではないとはいえ攻撃されかけたでしょう。この先何があるか分からないよ」

ピヨ介の警告と、ファナの魔力放出があったから避けられたのだ。普通の冒険者ならあっさり連中が切り殺してしまっていただろう。

「あ…できるだけそうします…」

一応了承の返事をしたとはいえ、また二人が危険に陥ればきつとファナは助けに行くだろう。それを咎めるつもりは全くないが、優先順位だけは忘れないで欲しい。少なくとも私はあの二人よりファナの方に生きていてもらいたいのだ。

と、またもや私の思考を中断させるような、奴の声が通路に響いた。

「お？ 何だこれ」

「押してみよう、隠し扉が開くかも…」

あの二人はとある壁で立ち止まり何かを押そうとしている。その手の先にあるのは、先ほど私が意識的に半ば無視していた、不自然に一つだけある赤いレンガ。ファナは私が話しかけていたから気付かなかったようだが、仮に見つけたところで押そうとは思わないだろう。

まともな思考をしていれば。だが、まだこの世界に現実感を持っていないような連中ならどうだろう？ …二度目の失敗だ。今日の私は機嫌に比例して調子がよくない。

そして、『待て』を言う前に無情にも赤レンガは押し込まれた。二人は何故か喜んでいようだが、私はそんなに暢気に構える事は出来ない。壁の奥から感じる魔力に、私は少し焦った。

フオオオオン

そんな涼やかな音ともに、しかし一瞬で魔方陣が展開される。それと同時に、景色が不自然に歪んだ。

「空間が弛んでる？」

が、私はそれに巻き込まれていない。

あの二人は当然巻き込まれているが、…離れた場所にいたはずのファナまで巻き込まれているのはどうということだろう。

「あ、あれ？ ナデイさん、何でそんな変な顔になってるんですか？」

なってるのはファナだよ！

そう言いたくなるのを抑えながら、私はファナを引っ張ろうと手を伸ばした。

が、それも一瞬遅く私の手は空をきる。あの歪曲もそれと同時に綺麗さっぱり消えてしまっていた。どうやらあの罫は転移トラップだったらしい。

「ちつ…あの二人に会ってから災難続きだ…。ま、ファナとピヨたんを組ませといて良かった」

私はピヨ介にテレパシーを飛ばしながら、ファナとピヨ介の位置を探った。以前はピヨ介からの一方通行だったテレパシーも、魔法が使えるようになってから私からも送れるようになっていた。ファナもテレパシーを使えばいいのだが、彼女は魔法自体を使えない。

「…？ 魔力は扱えるし人並み以上の魔力も持つてるのに、何で魔法が使えないのかなあ…魔力はそのまま使えるということは、想像から事象を発現する過程に異常があるのか…。ま、今はいいか、そんなことは。」

ピヨー ピヨー 今どこにいるのー」

>ピヨー ピヨー<

いつも通りのピヨ介の思考が返ってくると同時に、その発信源も特定できた。階層は違うがそれほど離れてはいないらしい。まあ、まだ浅い階のトラップだ、それほど大げさなものでもないだろう。

「分かった。すぐに合流 …ん…？」

ファナの近くに、あの二人もいる。億歩譲ってそれは兎も角として。

三人に近づくとこの狂気はどっしりよじりかたな？

こんにはちば愚か者（後書き）

転生者組なボックス、レヴアンスと比べてアレなトリッパー達です。突然連れてこられたようなものですしね。次回はきつとまた殺しあいです。

殺伐としてますね。何だか最近もっと落ち着いた雰囲気の二次小説を書きたくなって来ました。

二次小説は世界観や人が固定されているので、ある意味一次より難しいんですが。

こんにちははまともだった人（前書き）

パピローマ！

残酷描写に注意です。きっとエイ アンを見たいです。そうに違
いありません。

因みにリアルもエライこっちやで…

こんにちははまともだった人

「あ、あれ、ナディさん？」

ファナは気がつけば先とは違う場所に立っていた。周りの景色が歪んだと同時の出来事で、ファナはかなり混乱してしまった。しかし、ピヨピヨと頭の上からピヨ介に声をかけられ、内心を平静に戻す。

「え、えと、まずナディさんを捜さないでよね…」

ピヨピヨ

今彼女のいる場所は、元いた場所よりさらに広い通路だった。周囲には人もモンスターもおらず、物悲しい雰囲気漂っている。

「いや、ファナの耳に片側の通路から足音が聞こえてきた。ファナはそれを察知すると、すぐに剣を構え身構えた。ピヨ介はいるものの、ナデシコのいない状況下で大きな隙を見せる事は死につながる可能性が大きい。あながち過信ではないものの、ファナはそう判断していた。」

そして、通路から姿を現したのは見知った顔の二人だった。

「おお！ ファナちゃん、どこに行ったのかと思ったよ！」

暢気に声をかけてきたのはどこか軽薄な男、アツシ。小太りの男、ヨリミチは何も言わずじろじろとファナを眺め回していた。それを薄気味悪く感じながら、ナデシコに相手をしないように言われてい

たものの、無視するわけにもいかず渋々と頷いた。

「あ、どうも……」

「ちゃんと俺達のそばにいなきゃー。危ない目にあっても助けられないよ？」

「…はあ」

「さあ！ いいからどんどん進むとしよう！」

飛ばされたことが自分達の所為だとは微塵も考えず、アツシはファナの手をつかんで引く張った。ファナはなんとなく寒気がして、ぐいと手首を捻ってアツシの手から逃れる。

「あの…私、ナディさん捜さない」と……」

するとアツシは途端不機嫌な顔になりファナに詰め寄った。

「ええ？ あんなのもうどうでもいいじゃん。ちょっと可愛いからって調子に乗ってよ。なあ、ほつといて俺らと行くこうぜ。俺らならファナちゃんのこと守ってやるからさ！ ヨリミチもそう思うだろ？」

「そうだな。このままあいつのところに行ったら、絶対利用されて終わるだけだつて」

悪し様にナデシコを罵る二人に、ファナは顔を歪めて耳を押さえた。悔しい。お前達にあの人の何が分かると、その感情を乗せてファナは二人に言い返す。

「あなたたちに！ ナデイさんの何が分かるんですか！ あの人は誰よりも強くて、とても優しい人です。あなたたちよりもずっと！ さっきだって、私一人で十分だと判断されたから手を出さなかっただけです。あの人はいつも私の事を考えてくれてます、守ってくれているんです。それなのにあなたたちは私を助けると言っておきながら、私を剣で斬りつけそうになっていたじゃないですか！ あなたたちみたいな人間が、ナデイさんを侮辱しないでください！」

ファナはそこまで言い切り、はあはあと息をついた。ここまでのことを言ったのだ、器の狭いこの二人ならば間違いなく逆上するだろう。

が、

目の前に立つ二人組みからの反応は、無い。

ファナは不思議に思い、顔を上げた。そしてその疑問はすぐに氷解する。

アツシはファナの話を聞いておらず、呆然とヨリミチの腹を見つめていた。

ヨリミチはファナの話を聞いておらず、呆然と自分の腹を見つめていた。

ファナはヨリミチの腹から生える、てらてらと鈍く光るどす黒い血のついた曲剣の先を見つめた。

「お、おい。どうしたんだヨリミチ。そんなもん腹から生やしてよ…」

アツシが現実から逃げるように、しかし空っぽな声でヨリミチに声をかける。ヨリミチは空虚な表情で自分の腹から生えるそれに恐る恐る手を伸ばしながら、アツシに言葉を返した。

「い、いや、何か痛いっつーか、あ、あぐ、いて、が、あが

がああつあああつああああああつー！」

そしてそれも途中から叫びに変わる。

じわじわと血が剣を中心に広がり、ヨリミチの身体を蝕んでゆく。

「…」

「ひ、ひ…」

理由こそ違えど、ファナとアツシはヨリミチから一歩身体を引いた。ファナは思考を戦闘時のものへと切り替えていく。その様は奇しくもどこかナデシコと似ていた。

アツシは完全に腰が引け、ふらつくようにヨリミチから少しでも離れようとする。はじめて直視する現実、それは彼にとっては陰惨すぎるものだった。

ヨリミチに刺さった剣はようやく動きを見せる。ぐいぐいと何かを確かめるように小刻みに動き、その度にヨリミチはびくびくと痙攣し、ついにその口からは血が溢れだした。

に拍車をかける。

狂人はどこを見ているのかも分からないまま、しかしぐちやりとヨリミチだったものを踏みながら一歩を踏み出した。

ファナは油断なく腰から剣を抜き、狂人を見据え構える。

強い、でもなく、殺気、でもなく、ただただやばいと感じさせる狂気を撒き散らすそれに、ファナは少し冷や汗をたらす。

と、突然叫び声が真後ろから聞こえた。

「う、うあああああああああ」

それと同時にファナはどんと狂人の方へと押し出され、上体が揺らぐ。

ばたばたと誰かが走り去る音を聞きながら、少しずつシミターを振り上げる狂人へと近づいてゆく。

そのままであれば簡単に切り殺されていただろうが、ファナは一人ではない。

これで何度目か、今ではファナの相棒となっているヒヨコが火を噴いた。

ピヨーーッ

「ぎいっいいいああああうううづうづうづう！？」

奇声をあげながら炎に撒かれごろごろと転がる狂人を尻目に、フアナは我に振り返って体勢を立て直しながら後ろに下がった。

「ピヨ介!？」

ピヨピヨ!

「う、うん! ごめん!」

ピヨ介に叱咤を受けながら、フアナは辺りを見回した。『アツシ』は既にいない。つい先ほどフアナを突き飛ばし逃げたのだから。が、既にフアナにとっては彼は邪魔者でしかない。それゆえ今のような誰もいない状況下は好都合だった。ナデシコを除いて、だが。彼女も今はいない。

「きゅはああああ…」

再び奇声を耳にし目を戻すと、そこにいたのは既に立ち上がっている狂人。その身体に炎の残滓はなく、火傷一つない。

「そんな…? ピヨ介の炎が効いてない…」

ピヨ…

「ひははははあああああああっ!」

「くっ…」

ガキイイイイッン

と信じていた。

そして強くなりたいたいという願いが、誓いが、ファナの一步を踏み出させた。その歩みは、この先止まる事を知らずただただ進んでゆく。

「はあっ！」

選んだのはヒット&アウェイ。相手の小回り、スピードが優れているとはいえ、魔力放出を誰よりも巧みに扱うファナの速度には劣る。以前やり合ったドラミタスと比べ、狂人はあくまで人間。小技で体力と肉体を削りとっていけばいつか倒れるだろう。

「ききききききかっかかかっかかかっ！！！」

縦横無尽に自分へと迫る、二本のシミターをかわしながら、である。が、普段の手合わせでこれに勝るナデシコの豪速変幻自在の両拳を見慣れているファナにとってはまだ生温いものであった。

弾き、かわし、隙を見つければ一撃を。下がり、迫り、隙をがあれ
ば一閃を。

浅くだが、少しずつ確実に身体に傷を入れてゆく。それはやがて深いものになってゆく

「！？」

おかしい。

狂人の服の隙間から見える、はずの裂傷、あつたはずのそれが、いつの間にか消えてしまっている。

めげずに、さらに一撃。

「嘘!？」

が、その傷がみるみる内に塞がってゆく。この分では、既にこの男は無傷。体力が消耗される分、ファナの方が不利になってゆく。

(どうしてっ!?! 違う! そんなこと考えてる場合じゃない!

…何とかしないと…。一撃必殺…でもこの男にはそこまでの隙はない。肉を切らせて骨を断つ…博打すぎる! 一歩間違えれば私が死
っ)

「しいいいいっっししししししししししっねえええっっ!！」

「あっ!？」

ガキイイイイッン

一瞬の硬直。それは致命的だった。寸前で身体は守ったものの、手に持っていた剣は弾き飛ばされてしまう。剣はくるくると横向きに回転し、床面に落ちると遠くへと滑っていった。手の届かない場所へと。つまり、今のファナは完全な無防備。

「しいいいいいいいっ!！」

「!ふっ!！」

容赦なく迫るシミターの一撃を、ファナは魔力放出でかろうじて避ける。

が、

「ひいひやははあああああつ!!」

「よまれた!？」

およそ間髪を入れずに、狂人はわき目も振らずファナへと突進し、さらなる追撃を開始していた。それはファナが移動すると同時に移動先を特定していなければならぬほどの、反応速度。

ファナが狂人の動きを見切ると同時に、ファナの行動パターンも見切られていたのだ。

いつかナデシコに言われたことが、ファナの中で思い出される。

(私の動きは単調すぎる、か…)

高速移動後の一瞬の身体の硬直。これがこれほど忌々しいとは思わなかった。ファナはつくづく自分の迂闊さを呪う。再度の魔力放出で後方に逃げることも出来なければ、剣が無い今は相手のシミターを受け止めることもできない。

ピヨーーーーッ

ピヨ介の炎がファナのフォローに入るが、しかしそれも既に狂人を止めるには至らない。元々炎は効果が薄かったのだ。狂人にとっては慣れてしまえば、多少の熱さえ気にしなければ突風にも劣る足止めだったのである。

しかし、迫る狂人の凶刃を前にして、ファナの頭は高速で冷徹に回転していた。

(ここで、終わり…？ …そんなの、ナデイさんにも、父さんにも
顔向け出来ない！ 何か、何かあるはず…)

ファナの魔力放出は確かにすごいけど、ちょっと単調

走馬灯のように、いつか言われたナデシコの言葉が思い出された。
これは先ほども思い出していたものだ。

自分の命を預ける武器にお金をケチっちゃ駄目だよ。戦闘中に
折れちゃったりしたらどうするの

できれば、コレを使うような事態にならなきゃいいんだけどね

(…！ そうだ、ナデイさんに念のためにつて渡された短剣…！！)

万が一の時に、すぐに使えるようにと腰の後ろに挿してもらった短
剣。

しかし、短剣でシミターを防ぐのは厳しい。ならば油断しきって開
いているあの懐に飛び込むか？ 間に合わない！ この一瞬で、し
かも硬直状態で全身を飛ばすのは不可能。

…一部、だけだったら？

あー、ファナ、やっぱりこれ、できるだけ使おうとしないでね

ナデシコの目前にあったのは粉微塵に粉碎された、一瞬前は岩だっ
たもの。使うなと言われた、反動の大きい局所魔力放出。

いつか身につけようと少しずつ研鑽を積んでいたが、未だ完成には
至らないそれを。

今使わずにいつ使おうか！

「あああああああああつ！！」

固まっていた身体を無理やりに動かし、短剣を抜きすぐさま構える。いや、構えるという暇すらありはしない。抜いたその軌道のままに、狙うは狂人の右腕！

魔力を瞬時に込め、そして短剣を持った自身の腕を、撃ちだす。鈍速から、最高速へと。

それは空を裂き、フアナ自身の右腕を軋ませながら過たず先行していた狂人の右腕を斬りとばす。

「あがあああああああああああ！？」

一瞬の停止ののち、切断されたその腕からホースから飛び出る水のように、血が噴出する。

狂人はそれに絶叫したものの、しかしそれでも彼は左腕を止めなかった。もう一本の凶刃はさらにフアナへと向かう。

しかしフアナも右腕を斬り飛ばしただけでは終わらなかった。

「もう、一つっ！..!」

二度目の局所魔法放出。それは右腕を切った短剣を瞬時に方向転換させ、そのまま狂人の胸を斜めに裂いた。何の抵抗もなく、スッと短剣は走り、狂人の肉体を通り過ぎる。その短剣に、血がつかないほどの速さで、である。

「あぎが」

狂人は、ピタリとその動きを止めた。先ほど同様、その一瞬の停止の後今度は彼の身体から斜めに血が噴き出す。

「お、ぐ」

その左手から、シミターがカチンと落ちる。

それに続くように狂人の身体は傾ぎ、どしゃりと自身の血溜まりの中へと倒れた。

その血溜まりもじわじわと広がってゆく。

「はあっ、はあっ、はあっ」

フアナは荒く息をつきながら、自身の短剣を持っていた腕を見つめた。その腕はあらぬ方向へとひん曲がっている。

いつかの時のような無茶を、しかもその時以上のことをしたのだから当然だ。だが、むしろこれは軽傷と言えた。ナデシコが言ったように『腕が千切れとぶ』可能性は十分にあっただ。この程度ですんだのは一重にフアナが優秀だったためである。

「あ、あはは…お、折れちゃった…でも、勝てたよ」

ピヨ

「ん…ナデイさん、捜さないと…」

フアナはふらふらと立ち上がり短剣を拾うと、倒れ付す男をちらりと見やってそこから立ち去った。

「あ、がががががががが」

ファナが立ち去った後、倒れていたはずの男が起き上がった。地に手を突き、ゆらりと立ち上がるその男に、既に傷はない。

「ひ、ひひひひひひ、ああああああああああああ、こここここころして、××××をををを××××…」

落ちていたシミターを左手で広い、狂人はファナの立ち去った方へと足を向けた。彼の右手は傷は塞がっていたものの、さすがに元通りにはなっていない。しかし、彼は微塵も気にはしていなかった。

「わ、たししししししはああ、た、ただし、いなのだった！！

あああのおんんなをおおつゆゆゆゆゆゆ」

ぶつぶつと呟きながら、幽鬼のごとくその歩み始める

「残念ながら、ゲームオーバーだよ」

が、その身体は幾本もの硬指に貫かれた。

そしてそれが抜かれると同時に再び狂人の身体は倒れ付す。

その硬指の先にいつの間にかいたのは、もちろんのことナデシコである。

「こんにちは。…貫いと言って言うことじゃなかったかな。しかし、やっぱりフアナは殺さなかったか…。だからどうというわけではないけど、ね…」

私は男のそばまで行き、そしてその身体を見下ろした。

真っ赤に染まったスーツにスラックス、そしてネクタイ。サラリーマン風の男が、そこにはいた。

名前 タカアキ

種族 人間

レベル 42

スキル “解析”、“優秀”、“金運”、“剛力”、“対炎”、“再生 Lv.2”

おそらく、彼も有望株だったのだろう。レベルもさることながら持つスキルの多彩さもなかなかのものだ。

が、如何せん精神が脆弱だったのか。いや、この世界の現実を直視してまともな者の方が強いのであって、彼ぐらいがきつと水準なのだろう。彼も天使（仮）達の高みの見物の被害者ということだろうか。

「ひひやああああっ!!」

と、考え事をしていると、男が突然起き上がり、その手に持っているシミターで私の心臓を貫いた。まだこんな元気があったとは、恐れ入る。

「わわわわたしは、すすスーパーマンとなったのだ、ここの程度ではしし、死なん！」

私は彼の口上を聞きながら、心臓に刺さっていたシミターをつかみ引っこ抜いて遠くへと投げ捨てた。そして開いた穴を塞いでいく。

「そ。私も、これぐらいでは死なないよ。頭部を破壊するか、身体を粉々にするぐらいじゃないと…。ま、私が死んだところで『私』が死ぬわけではないけどね…」

「ひひひひ…、ばっけものめ…」

「人つてのは須らく化け物だよ。確かに私は特殊だけどね。

それじゃ、さようなら」

頭蓋を打ち抜き、彼の脳内を蹂躞する。

大げさすぎる殺害方法で彼を殺し、私は溜息をついた。

彼を正気に戻せただろうか？ 私には少なくとも無理だ。ならば放置か、排除か。結局選んだのは排除。彼は少々殺しすぎた。ここに来る途中にも見かけた、デスイーターに貪られていた腐った死体。一見しただけで凶器がああシミターであることは分かった。どれも、いくつもの裂傷がある切り刻まれた死体だったからだ。

「全く…ランダム転送なんてしなければよかつただろうに…」

おそらく、彼の初期位置はここ、‘奈落’だったのだろう。落ち窪んだ瞳、こけた頬がそれを物語っていた。運が悪いにもほどがある。“金運”があってもまるで意味が無い。

そもそも連中が言っていただけで本当にランダムなのかどうかは私も知らない。時間軸も座標も故意か、彼を狂わせることも予測済みか。

単なる推測だが、事実だとするとなかなかの外道ではないか。

「はっ……。高みの見物か。私も似たようなものだろうに」

私は複雑な心中を抱えながら、ピヨ介にテレパシーを飛ばした。おそらくファナは私を捜している真っ最中だろう。用を終えた以上、もうここにいる理由はない。私は完全に生体活動を停止した男から目を離し、虚空に視線を移した。

「すぐに合流するよ。用も終わったしね。

え、腕？ はいはい、合流した後直すから、気にしないでって言うとして。

相変わらず無茶するなあ。ま、嫌いじゃないけど」

「こんにちはまともだった人（後書き）」

直す、は誤字じゃありません。ナデシコのイメージの関係上、『傷の治癒』ではなく、『損傷部位の修復』になるのですね。

それにしてもあっさり死んでしまいましたね。一人残ってますけど、彼もじきに…

それは蒼天の事情（前書き）

投下です。えらい空けてましたけど、なんだか色々ごめんなさい。これからもこんな感じですよ。

因みに題名がいつもの傾向と違いますよね。やっちゃいました。

思ってますけど、話の展開？が強引ですかね。申し訳ありません？

それは蒼天の事情

私には、前世の記憶というものがある。ただ今の私と前の私が同じものかといえは首を傾げてしまう。何せ記憶が蘇ったのは十を過ぎた頃だった。最初こそ戸惑ったものの、直に記憶は今の私に統合されていった。あくまで記憶のみで、ベースの人格は今の私だ。

どうやら以前の私はトラックに轢かれて死んだらしい。確か憧れていた先輩に思い切つて告白して、その後結果は言わずもがな某然自失としてふらふらと横断歩道を渡るうとしたときだ。信号が、赤だったのか、青だったのか。それも覚えてはいないが、気づけば私は宙を舞い、次の瞬間には真っ白なところにいた。記憶が飛び飛びなのは仕方ない、統合する過程で精神が未熟だった私の所為で記憶に欠損が生じてしまった。それはともかく、その白い場所で私は天使とやらにあった。何でもこれから転生する世界にトリッパーとかいう悪人がいるのだとか。もっと色々と言っていたはずだが、もう覚えてはいない。どちらにせよ、あの時の私は成敗してやると意気込んでいたと思う。

そんな記憶が蘇ったからだろう、私はいつの間にか冒険者への道を歩んでいた。今の家族の反対を振り切つて、だ。幸い私には魔法にも、剣にも適正があり、苦節数年、私は一角の冒険者へと成り上がった。

私以外に転生者が多数いることを知ったのも冒険者になってからだ。連中から接触があつたのはそれほど昔の事じゃない。そこそこ名が売れてきた頃、一人の男が『目玉焼きには何をかける？』と聞いてきたのだ。『因みに僕は醤油だ』言われ、私はつい『塩コショウ』と答えた。しかし答えた後に気づいた。この世界で目玉焼きは一般的ではないし、そもそも醤油や塩コショウがあつただろうか。

私が少し警戒していると、男は笑いながら手を差し出して『君も僕達同様転生者のようだね』と言ったのだ。ずいぶんとあほらしい識別方法だと思う。その時私は驚きはしたが、しかし私以外に特異な存在がいることに安堵もしていた。思えば、私は理解者がいないことに寂しさを感じていたのかもしれない。今世の両親も兄弟達も良くしてくれたが、隠し事を抱えた私は疎外感をいつも感じていた。冒険者になったのもそれから逃げ出すためだったのだろうか。

その後男に色々教わりながら、彼らのことを聞き出していた。彼らのグループは今は二十人ほどらしい。十年ほど前はもっといたらしいが、ある事件で激減したのだとか。今は役目も無いので大体が各地に散らばりそれぞれの仕事をしているそうだ。

：聞いているうちに少しずつ私は彼の話になみを感じた。役目、とは選ばれた自分達がこの世の汚物であるトリッパーを排除することらしい。トリッパーが悪人である、ということ聞いた記憶はあるが、そんなことまで言っていたのだろうか？

この時はそれほど違和感を感じず別れたが、その後幾度か他の転生者達とも情報交換など交流する機会があった。私の彼らへの疑念は少しずつ増していったが、それでもトリッパーを放置するという考えはなかった。少なからず、彼らと同じものを私は感じていたのだろうか。とはいっても仲間曰く、ここ数年はこの世界にはトリッパーがおらず、役目が無いと言っていたのはそういうことなのだろう。

何事も無く、私も日々の冒険者としての依頼をこなしていた。しかしたまたま受けた護衛依頼で、私は彼女を見つけた。

一見するとただの一般人という風情であるが、その身にまとうのは紛れも無く強者の風格だった。ランク、と彼女は言ったが、実力

と照らし合わせるとそんなものではない。そばにいたFランクという少女も似つかわしくないランクだったが、彼女はそれ以上だった。それが如実に見られたのは、護衛する商隊が三匹のヘルハウンドに襲われたときだ。おそらく私達がいなければ商隊は全滅していただろう。私もダンジョンの外に出ているばかりか奇妙なほど同調しあう三匹のヘルハウンドに仰天したものだ。

自然に三匹を分担するような形になったが、私と彼女は一人だけだった。私は言わずもがなAランクの猛者だ、一人でも問題は無い。案の定軽く屠ることができたが、しかし何気なく彼女のほうを見て驚いたものだ。私とほぼ同時に倒してしまっていたのだから。

その後のケルベロスを奥の手を使って倒したあと、私は好奇心の赴くままに彼女を“解析”した。が、私はこのことを後悔することになる。

彼女は、トリッパーである。

私は知ってしまった。このことはまだ誰にも言っていない。言っていない理由は、彼女がまだ子供であることだ。悪人？　こんな子供の何をとって悪人というのだろうか。しかし、近いうちに他の転生者達も知る事になるだろう。

黙秘している理由は他にもある。単純に、得たいが知れない。

彼女のレベルは62程度。でありながら“死神 Lv.3”を持っている。このレベルのスキルを持つ死神を倒すには、レベル100以上は必須なはずだ。そのクラスのパーティと組んでいたとしてもこのスキルを得るのはとどめを請け負った者、62でそれができるとは思えない。が、事実として彼女が持つのは“死神 Lv.3”である。

結局、私は彼女との接触を避け依頼を終えた。しかし、このことはしりこりとなって私の中にも燻っていた。彼女がこの世界の普通の住人ならばまだ良かった。だが、彼女は本来私達のターゲットであるトリッパーなのだ。いつまでも放っておく事はできない。

が、悩む私を救ったのは他の転生者達からの情報だった。ぽつりぽつりと、トリッパーたちが姿を現し始めたというものだった。彼女は彼女と違い偽名らしきものを名乗っているわけではないようなので、目立っているようだ。

どちらにせよ、これで彼女からしばらくは目を離せる、私はそう思った。

仲間達はしばらく様子見をするらしい。何でも以前の事件の教訓だとかでかなり慎重になったそうだ。

が、特に危険な者に関しては早めに対処すること。まだギルドの方には報告が入っていないようだが、私達の方で早々に処理することになったらしい。今回は私に回された仕事だ、かなりの強敵らしい。‘奈落’の浅層に出没するという殺人鬼、その外見からトリッパーと断定された。最初に見つけた仲間は何とか逃げ切ったらしいが、他にいた普通の冒険者達は殺されたそうだ。やっぱり、トリッパーは悪人なんだ。私達が排除しなければ。

‘奈落’。

私も幾度も潜った、大陸最大のダンジョンだ。はじめてここに入ったのは十四のとき、確かDランクだっただろうか。その時はいちいち最初からやりなおしてどうやって深層に向かうのだろうと思ったが、その疑問が解けたのはBランクになったときだ。‘奈落’に併

設するようにつづっているギルド施設、そこで受付に話を持ちかけられた。ここの建物の奥に、前回ダンジョンで使った脱出陣まで飛ばせる魔法陣がある。それを聞いて、私は安堵したものだ。

何でも最初からあった魔法陣を隠すように施設を建てたらしい。つまり、この施設の本懐はこの魔法陣の管理にあるのだ。最初は小屋程度のものだったが、色々問題があつて今の形になつたとか。

しかし私は今回はそれを使わない。今回用があるのはダンジョンの上階だ。それなら入り口から入ったほうが早い。

出てくるモンスターたちを狩りながら、私は例の殺人鬼の出没区域を捜した。浅い層とはいえ、明確な地図などはないので一番時間がかかるのは目的地への到達だ。地図を作るには入り組みすぎている上に、日々変化しているという噂さえある。

話に聞いていた回廊に入った頃、私は誰かが近くに居る事に気づいた。洞窟のような岩肌に見える場所ではなく、舗装されたようなこの広い空間では隠れる事はできない。私は警戒しながら抜いていた剣を構えた。

「えと、レイラ、さん？」

果たして、やってきたのは短い金髪の少女だった。片手をかばいながら、しかしいつでも剣が抜けるような位置に手を置いている。頭にはいつか見たヒヨコが乗っていた。

『ファナ』、といったか、アイツの連れのはず。

私は頭を抱えた。アレから離れたと思つたら、逆に近くに来てしまったとは。が、よくよく考えてみれば彼女は今一人だ。

「確か…前の依頼の時の、ファナとか言つたか。お前一人か、連れ

はどうした？」

「え。あの、はぐれちゃって…」

…つまり、近辺にはいるということか。しかしはぐれたという事は
転移トラップにでもかかったのだろうか？ この階層のトラップに
かかるとは考えていたよりもずいぶんとどんくさい。

「その手はどうかしたのか？」

私はフアナとやらのかばっている片手を指した。ずいぶんと複雑な
折れ方をしている。普通ではこのような骨折はしないだろう。

「あ、あの、さつき変な人と戦った時に無理してしまつて…」

「…ほう」

フアナの口から聞き逃せない一言が飛び出した。この世界の人間か
ら見れば、私の今回のターゲットであるトリッパーは『変な人』だ
ろう。ソイツは何でも会社員のような格好をしているらしい。殺人
鬼が社会人とはおこがましいとは思わないのだろうか。殺人鬼にと
うても無意味か。しかし今彼女がこうしているということはまさか
撃退したのだろうか？

「そいつはどうしている？」

「えと、多分、向こうでまだ倒れているんじゃないかと…」

やはり倒したと言うのか。フランクとは思えない実力である。しか
し、おそらくまだターゲットは死んでいないだろう。ならば、止め

をささなければ。

「…そうか。ではな」

「あ、はい」

私はファナの指した方へと向かおうとして、しかし少し立ち止まった。まだファナに聞きたいことがあったのだ。

「お前は、何故あの女とともにいるんだ？」

「え、ナデイさんのことですか？」

「…そうだ」

気になったのは、アイツがどういう人間か。連れが一人でいる今はまたとない機会だ。

聞けば、盗賊に襲われていたところを助けられ、そのまま一緒にいるらしい。

悪人では、ないのだろうか？ しかし、偽名を使っているのは気になる。何か後ろめたいことがあるのかもしれない。それに、本名を隠すということは転生者の事情は大方知っているのだろう。

ぼんっ

「っ！」

考え事をしていた私の肩に、突然手が置かれた。文字通り電光石火、考えるより先に私は剣を抜いた。気が飛んでいたとはいえ、全く気配を感じなかった。情報の伝達を電気魔法で加速している私でも、

相手に先手を打たれては意味が無い。私は心臓を高鳴らせながら、後ろの誰かに剣を振り下ろす。

キンッ

しかし、それは甲高い音ともに防がれる。

止めたのは黒い硬質的な手袋をはめた手。その手の持ち主は私に楽しそうな笑い顔を向けて言った。

「こんにちは。えーと、レイラさん？」

ナデシコ。

私が今一番会いたくない人物である。私は動揺をいつもの鉄面皮で押さえ込み、つかまれていた剣を払い鞘に戻した。

その間ナデシコは特に何かするでもなく、私の様子を眺めていた。私は彼女を虚勢混じりに睨みつけた。何せ相手は“死神 Lv.3” 持ち。本当にSSの死神殺しならばレベルなんてあてにならない、自分よりずっと上の実力者だ。

彼女は私の視線を受けながら相変わらず笑っている。目も、口も、何もかもを楽しそうに歪めながら。その表情は、今の私を何よりも怯えさせる。

「ナデイさん！？ 捜したんですよ〜」

緊張感のないファナの声が、私の緊張を破った。ナデシコも私から視線をそらし、ファナの方に目を向けている。私はどっと疲労を感じながら肩を落とした。

そうだ、今は彼女の相手をしている場合ではない。そもそも今回会った事はイレギュラーなのだ、いつまでも相対している理由も攻撃する理由される理由も無い。

「フアナー、私も捜したよー。それにどうしたのその腕」

「あ、えと、これは…えへへ…」

「えへへじゃないよ、もー」

私は二人の会話を聞き流しながら、踵を返した。向かう方向は無論殺人鬼がいるであろう回廊である。

しかし、私の背にナデシコの声が投げかけられた。その一言は、私を大きく揺らがした。

「また会おうね。レイラさん」

私は慌てて振り向いたが、もう二人は背を向け反対側に去って行くところだった。先の一言を、ただの挨拶だと、何気ない一言だと、そう思いたい。が、私にとってとても都合の悪い事実も浮かんでくるのだった。

彼女が、私の正体に気づいているなどと。根拠なんて無い。しかし、何故か背筋に粟立つものを感じていた。

転生者はトリッパーを狙う。だが、ある意味その逆もしかりなのだ。転生者の存在を知り、狙われているということを知り、トリッパーが知れば、場合によっては狩る者狩られる者が入れ替わる事だってありうる。彼らはもとよりこちらを攻撃することを厭わないはずだ。増してや力関係では私は彼女に遠く及ばない。

私は半ば逃げるように回廊の奥へと足を向けた。

「!？」

数分ほど早足で歩いて、私はデスイーターが二つほど塊になって群がっているのを見つけた。デスイーターたちは私に気づくと文字通り尻尾を巻いて逃げていった。層言うモンスターなのだから仕方が無いのだが。

私はデスイーターが群がっていた物体に近寄った。かなり食いちぎられてえらいことになっているが、これに怖気づいてはそもそもダンジョン探索などできない。

片方は、Xのような形に真っ二つになっている男。こちらはおそろく犠牲者の方だろう。しかし、服装から見るにどうやらこいつもそうらしい。まあもう死んでいるのだからどうでもいいことだ。

もう片方が、私のターゲットだった。しかし死んでいるとは予想外だった。報告にあった通りのサラリーマン風のスーツ。かなり貪られているが、その特徴的な服装に見間違いは無かった。そばに転がっているシミターも報告通りだ。

しかし、死因はなんだろうか？ ファナは殺したとは言っていないかった。

「…ん？」

そう言えば、アイツは、ナデシコはこちらの方向に背を向けていた私の背後から来なかったか？ つまり、必然的にこの死体も見ているはず。何せあそこまで一本道だったのだ。いやいや待て待て、ナデシコがここに来た時この殺人鬼が死んでいたと言う保証は無い。

もしもまだコイツが生きていて、ナデシコがトドメをさしたのならば。

「アイツは、人を殺すことに罪悪感を感じないのか」

すぐ後に会った私達に、微塵の陰も見せなかった表情。

あれほどの力を持っていて、その上殺人を躊躇わない。やはり、危険か。

「…いや、それでも連中に報告するのは性急か」

それほど、私は自分以外の転生者を信用していない。彼らはどうせ他のトリッパーにかかりきりになっているだろう。私は私で動かせてもらおう。

ナデシコを敵認定したレイラだが、彼女はやはり気づかない。自身の思考が他の転生者よりマシとはいえしかし根本的などころはとも似通っていることに。

それはつまり、『私は正しい』『だから私がいいのです』、結局のところは選民思想。

それは蒼天の事情（後書き）

前世の人格と直結してないお陰で天使（笑）からの影響は少し薄いレイラさんです。それでもこんな感じ。

いんにちは宝箱（前書き）

もう一週間ですか。しらたまからはとても早く感じられました。みなさんはどうでしょう。

今回は進みません。閑話？ とにかく短いですかね。

とにかくそんな感じでどうぞです。

こんには宝箱

‘奈落’に潜って多分三日ほどたった。時間を確かめるすべがないのでかなりアバウトだが、大体それくらいだ。これくらいダンジョンに長居するなら、ホントに宿屋で部屋借りなくてもよかったかなと、私は頭をかいた。

現在はおそらく七階。六度階段を下ったのでとりあえずそういうことになっている。モンスターの程度は一階それほど大差ないので、今回はそろそろ切り上げて次回はハイペースで潜ろうかと思う。さすがに深層まで行くつもりはないが、私としてはファナより少し強いぐらいのモンスターがいる階層が好ましい。一度戻らなければならぬのは、そろそろ水や食料が尽きてきたためだ。私は問題ないがファナとピヨ介には大問題である。

「あ、ナデイさん、宝箱ですよ」

なるほどファナの言う通り道は行き止まりで、そこには宝箱が置いてあった。宝箱を見つけたのはこれで四つ目だ。今までの宝箱からの収穫は、棍棒と腐ったポーションである。両方破棄したけどね。ポーションはきつと宝箱が設置されてから時間がたっていたのだから、えらい臭いがしていた。これではポーションというより毒薬である。ポーションはそれこそ数ヶ月は質を保つような加工がされているらしいが、いったいあの宝箱はどれほど放置されていたのだろうか。

ところで三つ宝箱を開けて二つしか収穫物がないのは、残り一つの宝箱がミミックだったためだ。結局レベル8のミミックは哀れ、ファナの経験値の糧となっただけだ。あまり足しにはなっていないと

は思う。

ぶっちゃけ何が言いたいかと言えば、宝箱の中身が期待はずれすぎる。

「あー、うん。今度はまともな中身だといいね」

だからこんな投げやりな私を許して欲しい。

「あはは…で、でも、宝箱を開けるときつてなんだかドキドキしません？ 何が出るかな？ 何が出るかな？って！」

「もう、三回目の時に飽きちゃったよ…結局まともな収穫なかったじゃん。…はあ。ま、前より深いところまで来たし、少しはマシなものが入っているかな」

前回『三度目の正直！』と言いながら宝箱を開けたのを思い出し、私はむなしくなりながら目の前の宝箱に手を伸ばした。

とりあえずミミックではないし畏もない、鍵もかかっていない。かかっていたら蓋だけ破壊してやるところだ。私は諦め六割期待三割苛立ち一割で宝箱を開いた。

「ん？」

果たして、宝箱の中に入っていたのは黒い正方形の箱だった。一片10センチほどの小さな箱である。蓋などはなく、表面にはおかしな紋様が描かれている。

私はそれを宝箱の中から取り上げて眺めた。

「今度は当たり、なのかな…」

重さはそれほどなく、中に何かが入っているというわけでもない。そもそも中に何か入れるという機能のための箱ではないのだろう。ではいったい何に使うのか。

よく見てみると、六つつの黒い面の一つに小さな宝石のようなものが一つ、また他の面には黒い出っ張りのようなものがいくつついている。もしかこれはボタンだろうか。

首をひねっていると、ファナが箱を見て何かに気づいたように口を開いた。

「あ、これって『写影機』じゃないですか？」

「『写影機』？」

「はい。この宝石のついている面を向けながらこの出っ張りを押せば静止画がとれるんです。写したものを見たい時はこっちの出っ張りを押すと、ここの宝石から映し出されるんですよ」

ファナが箱の宝石の部分や出っ張りを指し示しながら説明してくれた。つまりこれはカメラのようだ。ただ話を聞く限りどうやら写真のように二次元的なものではなく立体映像として映し出すことができるらしい。背中側をどうやって撮るのかは疑問だが、とにかくようやくまともなものを手に入れられたようだ。

「ふーん…この魔導具ってレアなの？」

「いえ、そこそこ出回ってますよ。数が多いわけではないですけど、ここみたいにわりと浅い階層で手に入れますし。あ、でも、この『写影機』より上の『動影機』はかなりのレア物ですよ。何でも静止画じゃなくて動画を撮れるらしいんですけど、私も見た事はな

います」

「カメラの上はビデオカメラか…」

「亀…？」

「いや、なんでもないよ」

売るもよし使うもよし。この『写影機』をどうするかはともかく持つて行く事は決まりなので、私は唯一の手荷物である荷袋の中から手の平サイズの黒い玉を取り出した。

「じゃじゃーん」

「何言ってるんですか…。えーと、それって『ダークオーブ謎空間の黒宝玉』、でしたっけ。ホントに便利ですよね」

食料に水、寝具や薬、その他もろもろの旅道具、どうやって持ち歩いているか不思議に思われただろうか。その秘密は私が今取り出したこの黒い玉にある。

私は『写影機』を黒い玉に突っ込んだ。そう、文字通り突っ込んだのだ。ぐいと『写影機』は玉に食い込み、そしてずぶずぶと入ってゆく。はみ出る事もなく、明らかに『写影機』のほうが大きいはずなのに、玉は丸ごと飲み込んだ。ものの数秒で『写影機』は完全に玉に飲み込まれ、あとはただ黒い玉があるだけだ。

「うーん、何度見ても変な感じですね」

フアナがそう言うのも仕方がない。一応いわゆる亜空間につながっているようだが、物品が次々と飲み込まれてゆく様だけを見れば、

シユールな光景としか言いようがない。

この黒い玉、言うまでもなく魔導具だが、本当は黒いローブの姿をしている。『謎空間の黒外套』^{ダークローブ}、ファナには言っていないが、こっちが本来の名称だ。

以前倒した死神、アイムⅡデスⅡハボリウムは三つのドロップアイテムを残した。一つは鎌、そしてこのローブ。もう一つあるがそれは後々。私は、鎌はともかく、残り二つをファナに知られないように回収していた。そのうちこっさり使う機会があるだろう、そう思っただけだったが、ローブのほうは殊更に使い勝手がよく、形は変えているものこうして頻繁に使用している。ファナはもともと私がつけていた魔導具だと思っているようで、私にとってもその方が都合がいい。

機能は単純、ようはコンパクト倉庫である。この魔導具自身が不思議空間を持ち、自由に物を出し入れできる。限界があるかどうかは分からないが、少なくとも不自由することはないだろう。

「…ナデイさん？ どうしたんですか？ さっきからずっとそれ見てますけど…」

玉を眺めていると、ファナに声をかけられた。どうやら自分が思っていたより長い間見つめていたようだ。

「ん？ んー…これって色んな物がいくらでも入るけどさ、…生き物を入れたらどうなるだろうね」

そう言いながら、ちらりとファナの方を見る。

ファナはびくつと身体を震わせ、霞むほどのスピードで私から離れ

てしまった。

「い、嫌ですよ?」

「えー。まだ何も言っていないけどー」

「けど、『入ってみない?』とか言つつもりだったんじゃないですか?」

「やだなあ。単なる好奇心じゃない」

「言つつもりだったんですね…」

「ちえー。…今度バックスあたりで試してみようかな…」

「バックスさん…ご愁傷様です」

さすがに冗談だけだね。亜空間が生物の生存可能環境かどうか分からないのに無茶はできない。

『ダークローブ謎空間の黒外套』を荷袋の中にしまい、私はファナに声をかけた。

「そろそろ、さっきの魔法陣のところまで戻ろうか」

七階に降りてすぐの場所にあつた帰還魔法陣、それほど離れてはいないので道は覚えている。

「あ、地上に戻るんですか? 久しぶり、になるんですね…陽の光を見るのは」

ファナが遠い眼をしながらつぶやいた。いやはや、いつからこんな

に黄昏れる子になったのだろうか。数日間ずっと薄暗いところにいたせいか、悪環境で寝起きしていたせいか、はたまた私がミラット（大ねずみ）やりザードマン（二足とかげ）の群れに放り込んだせいでだろうか。

しかしその甲斐あつてか、もしくはあの殺人鬼を殺したわけではなけれど倒したためか、ファナもずいぶん成長した。

名前 ファナ

種族 人間

レベル 29

筋力 21

耐久力 19

魔力 18

抗魔力 18

感覚 22

スキル “天才”、“祝福”、“奇運 正”、“×× L V . 2”

やっぱり成長スピードが早い。あと数ヶ月もすれば一人でも十分なぐらいになるだろうか。少し危険ではあるがパワーレベリングを繰り返して、だが。

「持ってきた食料とかも底を尽きてきたしねー。商人から買おうにも、ダンジョン行商のはアイテム値がおよそぼったくりだし…」

ダンジョン内でも行商人には稀に出会う。聞いてみたところ、需要は結構あるらしい。危険手当なのかその値は法外だが、まあ危険なダンジョン内に売り物抱えて徘徊って根性はぶっちゃけすごいと思

う。ちなみに私達が出会った商人のレベルはなんと39だった。不覚にも笑えてしまったのは内緒だ。

「さて、行こっか。早く溜まった素材部位の換金したいし。スぺー
スはあるけどごちゃごちゃしてきて困るんだよね…」

「私は戻ったら一番にお風呂入りたいです…」

私達は帰還魔法陣のある部屋への道に足を向けた。徒歩で大体30分、運よくモンスターと出会わなければそれぐらいだ。急ぐ必要はないのだが、なんとなく気が逸って私達は早足で道を進んだ。思えば私も地上が恋しかったのだろう。

誰もいなくなつた袋小路。そこにあるのは蓋の開いた空っぽの箱が一つ。

いつしか箱はひとりでに閉じ、再び宝箱になった。まるで次の冒険者を待つかのようだ。

「んには宝箱（後書き）」

あ、修正です。『魔方陣』じゃなくて『魔法陣』にします。よくよく見たらちよくちよく誤用してたんですね。

ちなみに宝箱は時折勝手に移動します。同じ場所に行っても見つからないことはよくあります。

みんなちはは三カ月後（前書き）

これ投稿していいのかな……。あれ、今日って月曜日？ いそげー

さらに展開が早くなりました。じわじわやるのって難しいデス。

ファナがさらにパワーアップしました。次、時間飛ばしたらきっともっとすごいことになります。

二日にちはは三ヵ月後

「はあああつ」

「！」

超高速の銀閃を体をずらしながらかわす。私はそのまま腰を落としながら、足を踏みしめ右拳を繰り出した。しかし、それをファナはまるで早送りのような異様な加速でやすやすと避けてしまう。

別方向からのさらなる一閃。今度はよけることなく左手で防御しようとするが、しかし私に迫るその剣閃の切っ先は、途中でガクリと軌道を変える。私は仕方なく遊ばせていた右手でそれを払いのけた。甲高い金属音とともにファナの剣が弾かれる。

普通ならばあり得ない動きをするファナに仰天したのはずいぶんと前。なんでも魔力放出を發展させて、外ではなく内に向けて無茶苦茶な活性化をしているらしいが、聞いただけでは良く分からなかった。身体強化と局所魔力放出をそれこそミックスしたようなそれを、私はとりあえずバーストと呼んでいる。別に破裂するわけではない、あくまで魔力の体内運用におけるイメージだ。

少し距離をとり、双方ともに少し息をついた。

「まったく…ほんとに強くなったよ。最近は毎日言ってる気がするけどね」

私のつぶやきに、ファナは蒼い瞳を細め嬉しそうに笑った。

「私なんてまだまだです。一度も勝てた事がないですし。これも毎日言ってますね」

フレイディアに来て、既に三ヶ月が過ぎていた。今日もここ、フレイディアの近く、空白地帯の片隅で恒例行事になっているファナとの手合わせである。

ファナとの手合わせもとうに百を越えてしまった。ファナは打ち合うたびに成長しているし、私もやりあうたびに手を変えているため、いつまでやっけていても飽きる事がない。

ファナが勝てないのは私の大人気なさが原因だ。いつもファナに勝てる程度の力に調整しているため、その上鬨っている間も微調整しているため、ファナが私より根本的に強くない限り彼女は私には勝てない。

しかし私自身このギリギリ感を楽しんでいるし、ファナの力の土台になってくれたらとも考えている。

奈落で荒野で依頼で森で、あらゆる状況、場所にファナを一人で放り込んできたが、その結果が今のファナだ。以前Cランクの依頼をEランクと偽って渡したが、案の定一人でクリアしてきてしまったほどである。その剣筋も精神もずいぶん強かになり、そこそ自信もついてきたかのように思う。…最近笑い方が少し私に似ているような気がするのだ。それがいいことか悪いことかは未だに分からないが。

「たっ！」

再び、ファナが私に迫る。地を蹴り、しかしそれ以上に加速しながら、彼女は身体をひねり大振りの一撃を放とうとする。ここで大振りかと思うかも知れないが、実際のところは最後まで油断はできない。いつのころからかフェイントを自然に混ぜ始め、今のファナにセオリーは通用しない。

果たして引き絞られた腕は振られ、私に横振りの一閃が高速で放たれた。今回も左手で防ごうとしたが、今度は私に当たる前に変則的に剣は引き戻され、そのまま連続の突きが放たれた。

線に点、巧みに変則的にこれらを扱うファナを私は時折もてあます。それにこの突きは今回はじめて見るものだ。が、その逡巡も一瞬、自分の内のギアを切り替え、幾本もの剣山のように重なって見えるほどの突きを両手でさばいた。

突きが三十ほどを数えた頃、ファナは憚然とした表情をしながら剣を引いた。大方この突き連打が少しは私に届くと思っただろうが、残念ながら私も負けず嫌いなのだ。特にファナ相手には見栄を張っていたい。

そんなことを考えながら、実際私はずっと余裕の表情を崩していなかった。

私の顔を見ながら「むっ」とした表情をしていたファナは、唐突に私に指さした。その拳動に疑問を覚えながら私が身構えるのと、ファナが口を開いたのは同時だった。

「ピョ介！」

ピョーーーーーッ

ゴオオオッ

「えー……」

ピヨ介がファナの頭からパタパタと飛び立ち、その小さな口から最初の頃とは比べ物にならないほどの熱量の炎が吐き出されたのだ。まさかそれでくるとは思わなかった。私はぼやきながら次の手を考えた。

ファナ同様、ピヨ介もずいぶん成長していたためのこの威力の炎放射だ。彼曰くそろそろ進化するらしいが、いったい何になると言うのか。謎過ぎる。

それはともかく、ファナが手合わせでピヨ介を起用してきたのも初めてだ。いつもはファナの頭で黙って鎮座しているだけだった。つまり今回は本気で決めるつもりなのだろう。

とは言え、ファナがピヨ介を使ってくると言うのなら私も自重はない。私は使用制限していたモノを使うべく、身をかがめ地面に手を突いた。別にこんなことをしなくてもいいし傍から見れば隙だらけだろうが、こうすれば私が今からすることはおよそばれない。

炎に対処しないのか？ いや、これが私に届かないことは分かっている。これはあくまで目隠しだ。さもなければこれほど派手に炎を噴く必要はあるまい。

結果的に、ファナは炎を迂回し斜め後ろから現れた。うまく死角に入りながら回り込んだつもりかもしれないが、しかしどんな微細な気配も読み取れる私にしてみれば、この程度ではまだまだ足りない。

私は地面にしゃがみこみ、ファナはその後ろで攻撃態勢に入っている。絶好の好機、と彼女は思うだろうか。

だが甘い。

(好機！)

ファナが、何故かしゃがみこんでいるナデシコに向かって剣を振り上げる。無論寸止めはするが、それでも手加減される一撃ではない。ファナの現在の全力をもってナデシコに応える。これがいつからかファナが彼女自身に課した覚悟だ。

ナデシコの姿勢そのものに不審なものを感じるが、かといってこの体勢でいったい何ができようか。仮に何かしてきても対処する自信はある。それに剣は振り上げられた、もう遅い。

万感の想いをもって、ファナは剣を振り下ろそうとした。

が、ナデシコはその慢心をあっさりと打ち砕く。

「えっ…！？」

がくり、と唐突にファナは足を踏み外した。かたく踏みしめていたはずの地面が突然崩れたのだ。まっ平らだった地面は既にでこぼこの荒地となっている。

いぼっ

それとほぼ同時に幾本もの黒い硬指がファナの崩れた足元から飛び出し、足を胴体を腕を拘束すると、ファナを地面へと引きずりこんだ。その拍子に握っていた剣はカランと地面に落ちてしまった。

硬指によってあらかじめぼろぼろにされていた地中はあっさりとならな下半身を飲み込み、地上に残された上半身も硬指に巻きつかれ何もすることができない。

ファナがうんうん呻いているとナデシコが立ち上がり、手を腰に当てながらファナの方を振り向いた。その指は十本全てが伸びていて、その先っぽは地面に突き刺さっていた。つまりしゃがみこんでいたのは、この罠を前もって張っていたのをばれないようにしていたのだろう。

ファナはそれを見て自分が功を焦っていたことによようやく気づいた。

「ファナ…あんなあからさまな事してたんだから、もっと警戒しなきゃ」

ナデシコが硬指を抜き取りしゃがみこむと、下半身が埋没しているファナの頭に手を乗せてぼんぼんとたたいた。

「うう、その魔導具使うのずるいですよう…私は普通の剣なのに…」

恥ずかしさかそれとも圧迫される痛みからか、ファナが涙眼になりながらナデシコに抗議した。ナデシコは肩を竦め苦笑いしながらそれに返答する。

「ファナはピヨ介と協力してたじゃない。それで（きつと）イーブ

「んだよ。ね、ピヨ介？」

「ピヨ」

チラリとつい先ほどまで猛火を振るっていたヒヨコに顔を向けると、彼はそ知らぬ顔で一鳴きした。そしてパタパタと飛び上がりナデシコの頭の上に居座るのだった。

「ま、いーけどね、別に。ピヨ介の参加を禁じたこともなかったし」

ナデシコは未だうーうーと呻いているファナの両脇に手を挿し入ると、ぼこりと軽々と一息に地面から引っこ抜いた。その腕力たるや相も変わらず凄まじい。

「今日こそは、と思ったんですけど…」

ようやく地上に出たファナがぱんぱんと土を払いながらそう言った。

「悪くはなかったけど、私にはまだまだ足りないね。相手の視界から消えるまではよかったけど、気配もちゃんと消さなきゃ」

「消したつもりだったんですけど…」

「消えてなかったよ。甘い甘い。それこそ周囲の空気に溶け込むくらいじゃないと」

「うう…私人間なんですけど…」

「私もそうだよ（一応）」

所かわってフレイディアのギルド。
ファナは私の後ろでぽかんとしている。相変わらず私の顔は笑っているが、私も少し驚いていた。

「こんなところで何してるの？」

「お前こそ何してるんだよ……」

「元々私はフレイディアに行くって言わなかった？ バックスは確か向こうで定期の仕事があるんじゃないかなかったっけ」

「俺は冒険者だぞ？ 時々代役たてて遠方に出たりもしてんだよ」

「あ、そ」

ソレスティにいたはずのバックスがそこにいた。

私とファナはミクサスのメンバー、エリックたちに会うつもりだったのだが、彼らとともに何故かバックスがいたのだ。

バックスとミクサスは昔からの知りあい、グスタフもバックスの紹介でミクサスに入ったらしい。彼らとは小さい頃にソレスティに遊びに行っていたときに知りあったんだとか。バックスと話していると何故かファリスに睨まれた。ファリスはバックスにとって幼馴染らしいけど……テンプレかな？ テンプレなのかな？

「ボックス…ナディとはどういう関係なんだ？」

「どういうって…なんか怒ってないか？ ファリス」

「そんなことはどうでもいいんだ…で、どういうことなんだ？」

「かなりどうでもよくなさそうな雰囲気がないでもないんだが、ちよやめてやめて苦しい」

ファリスがボックスの首を絞め始め、よろしくないものを感じた私は二人から離れて笑っているエリックたちの方に行った。

「ファリスさんってもしかして…」

「ああ。あの様子だと進展してないみたいだが」

「しゃーないわ。ま、ボックスが鈍いんが九割九分九厘悪いんやけどな！ けど、そういう嬢ちゃん達もボックスと知りあいやったんか？」

「そうですね。ファナは違いますけど、私は同郷、みたいなものですか」

「ナディは辺境生まれなのか？」

「あー…まあ私にとっての最初は辺境でしたね」

「なんやそれ。おかしい言い回しやな」

「一応本当の事をそれっぽく言いながらはぐらかしつつ、私はバック

スとファリスの絡みが終わるのは眺めながら待っていた。ボックスに遭遇したのはハプニングだが、よくよく考えてみれば丁度よかった。ファリスには悪いけれどボックスは借りていこう。

ファナはエリックたちに任せて、私とボックスはフレイディアの街中を歩いていった。久々に会ったボックスは以前と大して変わっていないが、レベルが2だけ上昇している。いや、ボックスのレベルで2上がっていたら大したものだ。

それはともかく、ボックスを連れ出す際にファリスが騒いでいたけれど、シャーリーやベラフが宥めていたのできつと大丈夫だろう、そう思いたい。いや、被害を被るのはボックスのほうだ、私の知った事ではない。ということでご愁傷様。

「む…何故か寒気がしたんだが」

「気のせいじゃない？」

それにしてもファリスのクールキャラはいつたどこに行っただろう。恋は女を変えるのか。

「それで、何か用か？」

「あー忘れてた。なんだかんだでしばらくぶりだしね」

「四ヶ月ぶり…ってところか。何やってたんだ？」

「大体、奈落、にもぐってたよ。あそこはいいね、途中セーブ？が

できるし、底なしだし。他のトリッパーにも会ったよ。死んだけどね」

‘奈落’の転移魔法陣のからくりは既に知っている。この三ヶ月の間に私はBランクまで上がったためギルド職員から情報を聞いたのだ。ちなみにファナのランクはDランク。私と一緒にいるので同じく転移魔法陣を使わせてもらっている。

「！ ……そうか。なんとも思わないのか？」

「何で？ 他人だよ」

「確かにそうだが…」

「で！ トリッパーの方はともかく、最近転生者らしき連中をフレイディアでよく見かけるんだけど。何が起きてるの？」

「そのことか…最近トリッパーがよく見かけられるようになったのは知ってるな？ あいつらは隠れようとはしてないからな。まあ転生者が狙っていることも、ましてやいることも知らないだろうから仕方ないが…。連中はゆっくりと、だが確実に減っていつていいるいや、消されていつていいる。転生者がフレイディアに集まってきている理由は他にもない、トリッパーもフレイディアに集まってくるからだ。何せ冒険者の聖地だからな」

十年沈黙していた転生者が動き出した、といったところだろうか。三ヶ月、この間ずっとトリッパーを見かけていないが、どうやらみな殺されたらしい。話を聞く限りではまだまだこの世界に来ていないものもいるようだ、転生者がいては彼らも同じ事になるだろう。それに私の予想通りの冒険者が転生者だったら私もかなりまずい。

実力的に、それもあるが、それ以上に私の立場的にだ。

SSランクの『魔砲使い』。純粹な力とややこしい権力を持つ冒険者だ。確証こそないものの、十中八九彼だ、とも思う。あれが襲ってきて、仮に撃退しても、あれが黒と言えば白である私も黒になってしまうだろう。私はしがたないBランク冒険者だ。『死神殺し』の名ではSSには遠く及ばない。早い話、向こうが悪くともあれの証言すればこっちが悪者になってしまう。

つて、『魔砲使い』のことはバックスに聞けばいいじゃないか。

「『魔砲使い』…バクスターのことか。そうだ、あいつも転生者だ。あいつんはどうも餓鬼っぽいところがあるが、相当の実力者だぞ。レベルもSS越えだしな。少なくとも俺じゃ勝てん」

キターー。最悪だー。

進退窮まる。

下手に抵抗すれば、連中はファナを狙ってくるだろう。手段を選ばない、バックスの言っていたことだ。ファナもB〜A下位の相手はできないこともないだろうが、S〜SSの相手はまだ無理だ。人質にでもされて何かあったらコトだ。

逃げようか？

いや、もう私達も連中に気づかれているだろう。最近誰かにつけられているような気がするし。むしろ三ヶ月もったことが僥倖だ。変に動いて自棄を起こされると困る。

殺そうか？

いや、一気に全員殺さないと余計にまずいことになる。転生者を全

員捕捉していない今はこの選択肢タブーか。ファナはまだ直接は狙われていないのだ。あえて尻尾を踏んで刺激する事もあるまい。

はてどうしよう。残された時間は少ない。

…ああ。

「私が死んだ方がいいか」

「え、？」

こんにはは三ヵ月後（後書き）

うーん。スランプ？　こんなに展開早くするつもりじゃなかったんですけど。何だかごめんなさい。

『ナデシコ』が死ぬまでが一つの区切りです。え、前と違う？　事態は刻一刻と変わり行くのですよ。　事

こんにちは逃げの一手な私（前書き）

リケッチア！

やや、ずいぶん遅くなってしまいました。定期更新がしたかったのですが結局はこの様です。

些か潰れておりました。ようやく書き上げましたが、相変わらずの出来です。

よしなにー。

こんにちは逃げの一手な私

「私が死んだ方がいいか」

突然言ったナデシコのその言葉に、バックスの思考と歩みが一瞬停止する。通りの喧騒はも消え、そこに二人しかいないような錯覚に陥る。ナデシコはちらりと足が止まったバックスを見たが、特に気にすることなく足取り軽く街中を進んで行った。

「え？ 何言ってるんだ？」

我に返ったバックスが慌ててナデシコを追いかけ、横に並びながらそう改めて問うた。ナデシコは何でもなさそうにゆらゆら体を揺らしながら、片目をバックスに向け笑っている口を開いた。

「何って…文字通りじゃない。『ナデシコ』が連中の前で死ねば私が追われる理由は無くなる。…あれ、なんか違うかな。」

つまり私が死んだふりして、その後はこそこ隠れてればもう見つかる事はないし、『ナデシコ』が死ぬわけだから連中が『ナデシコ』を捜すことはない。そのことは連中の中で完結したことになるからね」

「死んだふりって…そう簡単にあいつらに誤認させることができるのか？」

「それに関しては秘策（？）ありだよ。見事に、劇的に死んでみせる」

ボックスが当然の疑問を口にした。積極的に殺そうとする相手にそうそう死んだと誤認させるなど、そう簡単なことではない。しかしナデシコは右手の人差し指を立て、つつい振りながら自信ありげな笑顔で豪語した。

「…あいつは、ファナのことはどうするんだ。あいつを連れて逃げ隠れは難しいんじゃないのか？」

続いて気になったのは、ナデシコの連れの仕事である。得体の知れない力を持つナデシコが、連中に対して武力で対抗しようとするのは彼女のことがあるからだろうとボックスは思っていた。そんな過保護気味なナデシコがファナを置いていくとは思えなかった。しかし隠遁生活をするのなら二人では難しい。無理ではないだろうが、ナデシコ以上に幼いファナには厳しいものになるだろう。

しかし、ボックスはナデシコとファナがどうしてともにいるかを正確には知らなかった。既にナデシコ感覚ではファナがほとんど完成してきていることを知らなかった。ボックスはナデシコとファナをセットに考えていたが、それ自体は間違っていないものの、あくまで期間付きのものなのだ。

「ああ…。あと一ヶ月は欲しかったんだけど…仕方ないからもう卒業だよ。ちよつと早いけど大丈夫じゃないかな。もともとは一年はかかると思ってたけど、実際は半年もかからなかったしねえ。いやはや、異常な成長スピードだったなあ」

そして、ボックスは唐突にナデシコから出た言葉にはすぐに反応できなかつた。彼にとっては話題を突然変えられたようなものだ。

「…何を言っている？」

「あの子が一人で生きられる力を得るまで私が一緒にいる。そう、約束したんだ。それが私とファナの関係……。いつまでも一緒にいるつもりは元から、なかったしね。何かを教えられたわけではないけど、少なくとも一人でいるよりは良かったと思う」

むしろ、約束を果たすためにはいつまでも一緒にいるわけにはいかない。そしてさらなる劇的な成長を望むならば自分の存在は邪魔であると、ナデシコは考えていた。だからこそ一人だけの状況を何度も演出してきたし、ファナを積極的に表に出すことで彼女にも人脈ができた。それもこれも、いつかファナが一人になったときのための準備である。

そして、今の状況とファナの状態を天秤にかけ、ナデシコは行動にうつすことにしたわけだ。

「良くわからんが…あいつは置いていくのか」

「『置いていく』なんて言い方は好きじゃないな…私達はいつかは離れるべきだったんだし。無理に離れる事もなかったけど、今の状況はそれを許してくれないし」

ナデシコは歩調を緩め、少し顔を俯けた。その声色は少し寂しげで、彼女自身がファナと一緒にいた時間をどう感じていたのかを匂わせる。

バックスはそんなナデシコを見て何も言えなくなった。そもそも二人の問題に彼が首を突っ込むべきではなかった。

それでも口を出したのは、放っておけなかったためか。

「こんなこと言えた義理じゃないけど、もしものときはファナのことお願い。御礼はするからさ」

「いやーけどよ…落ち着いたらちゃんと会いにいけよ。いつごろになるか、さっぱりだがな」

「そだねー…ま、連中のことは正体隠してるうちに何とかするよ」

「そついや…正体隠すってどうするんだ？俺も含めて、向こうから来たやつらはみんな“解析”を持つてるんだぞ？簡単にはばれんんじゃないか？」

「対策は立ててるよ。レベルを“解析”されなくらい上げるとか、魔導具で隠すとか。丁度よさそうなのも持つてるしね」

そこまで言つて、ナデシコは口をつぐんだ。バックスもそれにつられて黙ってしまう。二人はただ淡々と道を歩き、他の歩行者を機械的に避けてゆく。街の喧騒は二人の沈黙を置き去りにして、増してゆくばかりだった。

少しして、ナデシコは突然『先に戻ってる』と少し突き放すように言つて、バックスから離れて行つた。その顔は珍しく困つたような表情をしている。バックスはなんとなくその背中を追う気にはなれず、情報屋のいるバーによってから戻る事にした。

間接的にレヴァンスと情報交換をしたが、目ぼしい情報は入っていなかった。連中に存在を悟られずに情報を探ることに難航しているらしい。以前はそんなことはなかったのだが、どうやらかなり活発に動き回り情報統制もしっかりしているせいで潜り込めないらしい。

しかし、フレイディアに転生者が少なくとも十人、Aランク以上が

三人もいることが分かった。以前はひとところに転生者が三人もいれば多いぐらいだったが、今ではこの有様である。C以下ならばともかく、こつも手練が集まっているのはまずい。そう、単体でダンジョンを制覇できるとされるあのSSまでいるのが大問題なのだ。

『魔砲使い』、バクスター。

性格はともかく、その実力は本物である。高位武装、『機怪杖』《デバースロット》』を持ち、その魔法、いや、その魔砲の威力は世界でも随一である。その上接近戦にも長け、仮にAランクの冒険者と魔法抜きでやり合っても、勝つ事はともかく押し負けることはないほどの腕前である。無論彼の攻撃方法は砲撃が主体であるが、魔弾も巧みに使い近・中・遠距離と隙がおよそ存在しない。

その彼がここ三ヶ月ほどずっとフレイディアを拠点に動いている。確かに元々フレイディアのギルド本部に出入りすることは多かったものの、この期間は今までの彼の行動から考えれば異常事態と言えた。力を持つものが一つの場所に留まっているのはそれだけで大きな意味を持つ。だからこそレヴァンスはバクスターを特に警戒していた。結局、それは情報収集の遅延につながってしまったのだが。

ナデシコと別れて二時間ほどでバックスはギルド支部に戻ってきた。扉を押し開けて入ると、いつもの喧騒が外へと漏れだしてくる。バックスは顔をめぐらせてミクサスのメンバーとファナ、ナデシコを捜した。

彼らは彼が出たときと同じ場所にいるのを見つけたが、しかしその場にナデシコがない。バックスは首を傾げながら彼らのいるテールへと向かった。

「おおい」

「…ん？ なんや、戻ったんか。…あれ、嬢ちゃんはどないしたんや？」

真つ先にボックスに気づいたのは一番五感の優れているであろうベラフである。彼はボックスに片手を上げて出迎えたが、怪訝な顔をしてそう言った。

それにエリックたちも振り返る。

「え…戻ってないのか？ 俺より先にこっちに戻って来たはずなんだが…」

彼女と別れて既に二時間、流石にまだ戻ってきていないのはおかしい。ふと、ナデシコと直前まで話していた事を思い出す。

(おいおい早すぎだろ…！ もう逝ったのか…？)

あの時明らかに様子の変わったナデシコ、困ったような表情をしながら半ば慌ててどこかへと向かっていった。何か予想外のことが起きた事は想像に難くない。思えばあの時彼女を追うべきだったか？
ボックスは懊悩する。

「あ、あの、どうしたんですか？ ナデイさんに何か…？」

難しい顔をして黙り込んだボックスに、ファナが心配そうにナデシコのことを尋ねた。無理も無い、何せ彼は一人で帰ってきてそしてナデシコが帰ってきていないことを聞いて悩みはじめたのだから。

「い、いや、別にそういうわけではないんだが…」

眉根の下がったファナの顔から眼をそらしながら、ボックスはしどろもどろに答えた。彼女に言うべきか言わざるべきか……。どちらも良い選択肢には思えない。せめてナデシコの状況が分かっていたら、まともな返しもできるだろうが、そんな都合のいいこともない。

「ん…？」

ふと、そこでボックスはファナの頭の上に乗っている黄色い生き物に気が付いた。

ヒヨコ(?)のピヨ介である。

彼は黙して語らず、普段と変わらず変わりなく大人しくファナの頭に座っている。それを見て、ボックスは途端に安心した。

以前ナデシコが言っていた事を思い出したので。彼女はこう言った、自分とピヨ介はテレパシーでつながっていると。ダイレクトにナデシコの情報がピヨ介に伝わる状況で彼が騒いでいないと言うことは、今の彼女の状態に問題がないということだ。

ボックスは改めてファナに顔を向け、彼女を宥めるように笑いながら言った。

「別に何でもないだろう。そういえば確か何処かによって行くと言っていたからな、それが長引いているんだろう」

そして、ナデシコがその場に現れたのはそれから数分後のことである。相変わらずの楽しそうな笑顔でふらりと帰って来て、ようやく安心してファナにほそぼそと文句を言われたのは全くの余談である。

エリックたちはいざしらず、ボックスも結局は心配していたので無

事なナデシコを見て安心したが、しかし彼女の服の裾に今までは無かったはずの焦げ跡が付いていることにはとうとう気づけなかった。

こんにちは逃げの一手な私（後書き）

場面場面が短いですよー、自分が書くと。どうにも下手糞で、や
すね。ごめんなさい。

読んでいる方が負担無く読めていれば一安心です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9557u/>

三次元で遊ぼう

2011年9月30日21時51分発行